

第5章 各コースの沿革と現在

第1節 人文学科

1 哲学コース・人間学コース

(1) 文理学部文学科時代

『富山大学十五年史』(以下『十五年史』ともいう)が誌す、「文理学部の発足」(100頁以下)の記述には、必ずしも正確とは言えない箇所も見受けられる。しかし、十分な資料が見当たらないのである。

昭和24(1949)年学科目哲学関係の授業科目は、初年度哲学、倫理学から始まる。前者の担当は島崎藤一教授、後者の担当は館熙道助教授。初年度入学生の専門課程移行に伴い、哲学専攻の授業は、哲学概論島崎教授、哲学史館助教授、哲学特講柿岡時正助教授、東洋哲学史六浦教乗講師、哲学演習島崎教授、哲学史演習館助教授。なお六浦講師は共通授業科目ラテン語担当、心理学、美学は非常勤講師が担当していた。

杉本新平講師は、文理学部発足時一般教科目等の授業科目英語担当だった。哲学研究室所属は、若干遅れてのことである。また哲学専攻の授業科目に杉本講師担当の演習や、館助教授(のち教授)担当の倫理学と宗教学とが後年追加されている。

続いて『十五年史』は、講座(本来は学科目のことだが)に関して、哲学と哲学史とを誌す。しかし、哲学史は、不完全講座教授1のものである。昭和42(1967)年教養部が発足する時期まで、文理学部は一般教育科目等の担当学部だったから(ただし、体育科目等担当は教育学部)、一般教育科目等担当教員は文理学部所属のはずである。しかしそれぞれの数を明らかにすることもできない。

ちなみに、日本の慣行としては、社会学は、この時期文学科に属するのが普通だったろう。しかし、大学発足時から経済学部設置の問題があったし、このころすでに文理学部経済学科の早い時期の学部昇

格が予定されていたと見られる。またそのことの故に旧制富山高等学校に認められていた社会学は、経済学科に移しおかれたもの、と思われる。

さて、上述のように、昭和42(1967)年文理学部改組により富山大学は、教養部制をとる。このことにより哲学研究室に関しては、柿岡が学科目哲学教授、杉本が倫理学担当助教授として教養部に配置換えとなった(杉本助教授、のち直ぐに教授昇任)。

文理学部哲学研究室は、学科目哲学島崎教授、助教授ポストは、おそらく六浦講師であったろう。そして哲学史は不完全学科目で館教授担当であった。こう誌すのも、六浦教授(退職時昇任)の停年退職後任専攻教員採用につき問題が生じたものの、結局中本昌年が、昭和46(1971)年学科目哲学担当講師として採用されたという経緯があったことをとどめておく必要があるからである。

(ア) 哲学専攻

創設時から文学科は、旧制文学部系の講座制を踏襲、学科目をたて、学科目担当資格をもつ教員の配置、そして授業科目をたてて専攻学生をおく研究教育組織をとったと思われる。しかし講座編成、つまり教育研究体制に基本計画があったのではなく、旧制高等学校、高等専門学校、薬学専門学校、師範学校などに配置されていた関係教員の集合体という形式をとらざるをえなかった。例えば館は宗教学、六浦は印度哲学、杉本は倫理学が専攻であった。だが、結果として考えれば、また上記のものを含めて哲学を広く解すれば、人間思想を基本的に広く学ぶ視点からみても、これら教員編成は教育上まことに妥当なものでもあった、と言える。

また哲学関係の学科目は、哲学と哲学史の2学科目だが、教育組織においては、1専攻である。また所属学生は、文学科の学生定員は40名のことであり、学生の専攻志望は、個々の学生の選択に拠った。それだから、哲学専攻に関しては、年度により、専攻学生不在のこともあったものである。

(2) 人文学部人文学科・哲学コース

昭和52(1977)年人文学部創設において、哲学研究室は2学科目であり、両者とも完全学科目として発足した。昭和51年度(文理学部文学科時代)は、哲学教授本田弘(島崎教授停年退職により昭和51年配置換えにより、文理学部文学科所属)、助教授中本昌年、哲学史教授館熙道。このうち館教授は、昭和52(1977)年停年退職。哲学史担当教授に山村敬、助教授(採用年度講師)に木下喬があてられた。のうち昭和63(1988)年、山村教授転任(日本大学へ)により、哲学研究室は教授会(人事)の議を経て、中本昌年を哲学史担当教授に、木下助教授を哲学担当に所属換えを行い、哲学史助教授ポストに永井龍男を講師として採用(のち助教授昇任)した。なおここでも付言すれば、館教授退職に伴う後任教授選考に関し、必ずしも問題がなかったわけではなかった。当時哲学研究室には、比較文化コースを支援しうる人事という構想(人文学部創設の概算要求に係わるものの一つに)もあったとも推定されていた。

しかし、学科目担当には、それ本来の目的があり、かつ哲学研究室は、西洋哲学を主体とする建前をとる方針から、哲学史ポストは西洋哲学史専攻者で埋めることを堅持したものである。

(ア) 哲学コースの教育目標

哲学コースは、2学科目(講座)から成るものだが、旧文学科時代の哲学専攻の教育方針をそのままほぼ継承した。教員編成は、西洋哲学専攻教員による構成だが、哲学を狭く解さず、広く倫理学、宗教学、東洋・中国・日本思想、比較思想など多様な視点を哲学にもたせた。かつ美学、心理学、西洋美術史(これは、主として比較文化コースに係わるものだが、このコースを支える学科目欠如のため、この授業料目は、哲学コースに繰り入れたもの)もたてた。また卒業論文10単位は、卒業要件単位とした。(卒業論文については後にも述べる。)

多様な視点の顧慮とは、人間存在に中心を置く思考は、広い視野に立つ必要があるし、思想とはそのようなものだからである。必ずしもキリスト教文化圏に根をもつものだけが中心とも言えないはずのものであろう。またそれだから、学生教育、人材の育成には、事がらを根源までさかのぼって考える力を育てることを主眼とし、卒業論文題目選定において

は、学生の関心を核とすることにした。

(イ) 教育組織について

叙述が前後するが、文部省が人文学部に求めた教育組織は、2学科目について、学科中心としたカリキュラム編成を求めていたことは、筆者が学部長職についたとき知ったものである。

文部省の見解とは、こういうものである。

地方大学の人文系学部は、専攻(コース)をとらず、学科制をとること。したがって、学科ごとに必修、選択、自由選択科目(それだから卒業論文も必要とはしない)を定めてカリキュラムを編成するというものだった。それゆえ、昭和51(1976)年文学科時代、文部省との折衝に当たっていた学部長が、なぜ2つの学科に、幾つかの必修科目を定める必要ありと文学科教務委員会に要請するのか、その理由は知り得なかった。しかし文部省の命令だから2学科に幾つかの必修科目を設定せざるをえずということで、この問題が片付けられたし、コースによっては、卒業論文の替わりに授業科目10単位でも可とする措置もとられた。

それだから、コース制は人文学部内における教育組織でしかないわけである。だが、人文学部が、コース制という組織を旧文学科から踏襲した措置は、まことに価値あるものだった、と言えるかもしれない。人文科学系の学問修得には、コース制を基礎とするのが、本来、とも考えられるからである。

資料 筆者の手帳昭和51(1976)~63(1988)年

(3) 人文学部人文学科・人間基礎論コース

平成5(1993)年3月31日を限りに教養部が廃止され、教養部所属の教員は各学部に分属されることとなり、人文学部には総勢30名ほどが配属された。哲学コースに関係のある教員について言えば、哲学担当の観山雪陽教授は教育学部に、岡村信孝教授と、倫理学担当の松崎一平助教授と中純夫助教授は人文学部に配置換えされた。

この事態に対して、他コースのように配置換えされた教員をそのまま受け入れるのは、哲学コースの場合、スタッフが7名となり、多すぎるように思われた。しかし、新コースを創るとすれば、新コースと哲学コースの差異化が問題となり、哲学コースも元のままの哲学コースではありえない。差異化の大

掘みな方向についてはおおむね合意が得られたものの、ただちに2コースとして出発するのは時期尚早と思われた。そこで、近い将来におけるコース分割を念頭に置きながら、当面1コースとして出発し、教育実践により学生の希望を踏まえたうえで差異化の方向を詰めていくこととした。(なお、「人間基礎論」という耳慣れないコース名について一言すれば、これはもともと、人文学科を構成する大講座の名称「思想文化」、「歴史文化」、「行動文化」に対応して、「思想文化コース」という名称を考えていたところ、文部省から「思想」という名称は好ましくないとクレームがつき、講座名ともどもこのように変更された。)人間基礎論コースのスタッフは、中国哲学専攻の中を除き、残る6名が西洋哲学専攻であった。上に述べた合意事項のひとつが東洋関係のスタッフの充実ということであった。平成6(1994)年、本田教授の停年退職の後任として、日本思想史専攻の若尾政希が採用された(助教授)のは、この方針にもとづいている。

(ア) 人間基礎論コースの教育目標

哲学コースの時期には、隣接科目のコースが乏しかったため、例えば心理学などの科目を哲学コースが抱え、非常勤の先生にお願いせざるをえなかったが、この度の改組によって新コースが創設され、その問題がある程度解決された。そうした点を整理し、将来におけるコース分割を念頭に置いて、人間基礎論コースの教育目標と開設科目を次のように定めた。まず、学生に向けた人間基礎論コース紹介を『専門教育科目履修の手引き』平成6年度版から引用する。

「人間とは何であるか」「人間はいかに生きるべきか」哲学的探求はいつもこのような問いを核として行われてきた。…多様なレベルで様々な人間観(その学問的形態が「哲学」である)が提出されてきた。それらの人間観とその背後にあるものごとを考察し理解していくことは生きていくうえで私たちのだれもが必要とする「私」についての知と、「私」もその中に含まれる世界ないし社会についての知とを、より豊かなものにするにほかならない。本コースでは、洋の東西、時代を問わず、広く人間観の探求を行うため、「哲学」と「人間学」との二本の柱を立てる。哲学では、伝統的な哲学

研究を中心にすえ、一方、人間学では、人間の生に関わる様々な問題(例えば生命倫理、性、宗教などの)を取り上げる。

このような教育目標を目指して立てられた二本の柱のうら、まず「哲学」について言えば、哲学コースにおいて「哲学」と「西洋哲学史」の二本だてであったものを「哲学」に一本化して、特殊講義・演習・講読を配置した。これらは、哲学概論・西洋哲学、(西洋哲学史は中世哲学史を扱う新設科目である)に関連する。一方、「人間学」は倫理的宗教的内容を扱うものとし、これにも特殊講義・演習・講読をあらたに配置した。これらは、倫理思想、宗教思想に関連する。さらに、現代の具体的問題を思想的に検討するものとして、現代と思想という科目を新設した。

こうして、人間基礎論コースは、一方で哲学コースの伝統を継承しながら、他方では、東洋関係の充実を含めて、いっそうの視野の拡大と具体的な問題への接近を目指したのである。

(4) 人文学部人文学科・哲学コース人間学コース

教養部廃止に伴う人文学部改組が完成年度を迎える平成9(1997)年を目途に、コース分割の計画が具体化していった。人間基礎論コースにおいて二本の柱とされた「哲学」と「人間学」をそれぞれの中心として、哲学コースと人間学コースに分割することが決定された。コース分割によって、それぞれのコースの特性の明確化とコース所属学生に対するきめ細かな指導が目指されたのである。しかし、それぞれのコースの特性の明確化は、裏を返せば、相互補完の必要性を意味するから、今後の協力関係もあらためて確認された。人員の配置は、哲学コースが中本教授、木下教授、永井助教授、人間学コースが岡村教授、松崎教授、中助教授、若尾助教授とされた。ところが、これと平行して、国際文化学科の国際文化論コースを充実する計画が進み、若尾助教授の所属換えが求められた。われわれとしては、スタッフ1名を失うことは痛手であったが、学部全体のことを考え、了承することにした。こうして、哲学コースも人間学コースもそれぞれ3名のスタッフで出発したのである。平成10(1998)年、中助教授が

京都府立大学に転任となり、後任に日本思想史専攻の田畑真美が助教授で採用された。

(イ) 哲学コース・人間学コースの教育目標

哲学コース・人間学コースは、前述のとおり、人間基礎論コースの二本の柱をそれぞれの中心としているが、しかし、それぞれがコースとして独立する以上、当然、人間基礎論コースにおけるのとは異なった性格をもっている。例えば、哲学コースは伝統的な哲学研究に終始するわけではない。ここでも『専門科目履修の手引き』から引用しよう(平成10年度版)。

哲学コースは、広く人間の文化や社会の基礎となる様々な問題を思想的な側面から探究することを目指しています。世界観・認識論・人間存在といった伝統的な哲学の主題だけでなく、文化の基礎としての美学や芸術論さらに社会やコミュニケーションの前提となる言語行為の問題なども研究の領域に含まれます。このことによって文化現象の原理的考察などの幅広い研究ができることとなります。

哲学コースは、哲学概論、西洋思想史、(西洋哲学史をより広く解して、こう改称した)、哲学特殊講義・演習・講読、美学、論理学を継承し、文化基礎論講読を新設した。これは、広く文化の基礎に関わる文献を講読する授業である。

...「幸福とは何か」「人間はなぜ罪を犯すのか」「正義とは何か」「人間にとって神とは何か、何であったのか」これらの問は人類の知的遺産となるべき様々の倫理思想宗教思想を生み出してきた。人間学コースでは、洋の東西を問わず過去の思想を幅広く学びながら、人間が人間存在をどう捉えてきたかについて理解を深めることを目指す。また教育、ジェンダー(性)、環境、生命倫理など、現代社会・現代日本をとりまく具体的諸問題を取り上げ、背後にある価値観や世界観を考察し、私たちの選ぶべき生き方を模索することを試みる。

人間学コースは、倫理思想、宗教思想、人間学特殊講義・演習・講読、現代と思想のほか、東洋思想史、比較思想を継承した。

(5) 教員

文理学部文文学科時代以来の専任教員の専門ないし

研究対象を記録しておく。ただし、文文学科時代については『十五年史』の記述に拠る。

島崎藤一 ロックからヒュームにいたるイギリス古典哲学の後世に及ぼした影響、とくにフランス啓蒙思想やドイツ観念論との関連を通じたイギリス経験論の哲学史的意義の究明

館熙道 ドイツ観念論における人間観、とくに悪に関する問題の研究および宗教哲学的にみた親鸞の思想における人間と悪の問題に関する研究

柿岡時正 カント哲学を中心として、その前後のイギリス経験論、ドイツ観念論との関連の研究

杉本新平 政治哲学研究。プラトンからホッブス、ルソーを経て、ヘーゲル、グリーン等の政治思想、とくに国家論の歴史的研究

六浦教乗 印度大乘仏教の哲学的研究

山村敬 東方キリスト教思想を中心とした古代中世哲学研究

本田弘 ドイツ観念論、とくにカントとフィヒテの研究

若尾政希 日本近世思想史研究、とくに安藤昌益や「太平記読み」の研究

中純夫 中国近世哲学、とくに朱子学・陽明学の研究

中本昌年 人間の生の基本的存在構造について、現代西洋哲学および西田哲学を中心に研究

木下喬 主として現象学と解釈学の観点から、意識・身体・言語・行為などにまつわる問題を研究

永井龍男 プラトン、アリストテレスを中心にした古代ギリシア哲学研究。とくにアリストテレス自然学における諸問題の追究

岡村信孝 知識や価値判断の客観性の確立がどう可能かというテーマを、哲学思想と現代社会の諸問題との接点で追究

松崎一平 教父アウグスティヌスの著書の読解を中心に、その教養の源泉である西洋古典ならびに中世キリスト教の人間観を考察

田畑真美 日本の倫理思想、とくに伊藤仁斎や荻生徂徠の儒学の研究

前に述べたように、教養部廃止に伴う人文学部改組以前には、非常勤の先生方をお願いすることが多かった。その後も含めて、ご協力いただいた方々のお名前と当時の所属を、学期ごとの講義案内(昭和53年度後期以降)によって記録しておく。

哲学特講 柿岡時正、岡村信孝、観山雪陽、松崎一平（教養部）、砂原陽一、関雅美（金沢大学）、盛永審一郎（富山医科薬科大学）

哲学演習 島崎藤一（富大名誉教授）

人間学特講 盛永審一郎

倫理学（倫理思想）杉本新平（教養部）、盛永審一郎

宗教学（宗教思想）館熙道（富大名誉教授）、岩本光悦（教養部）、杉本卓洲（金沢大学）

美学 玉生正信（教育学部）、田中英道（東北大学）、武藤三千夫（東京芸術大学）

心理学 木場深志（金沢大学）、梅村智息子、海老原直邦（教養部）、桜井芳雄（富山医科薬科大学）

東洋思想史 金森西叡（富山工業高等専門学校）、橋本芳契（金沢大学）、杉本卓洲

日本思想史 土方和雄（名古屋大学）、源了圓（東北大学）

西洋思想史 岩本光悦

比較思想 金森西叡、氣多雅子（愛知技術短期大学）、亀山純生（東京農工大学）、藤井隆至（新潟大学）、菅野覚明（東京大学）

美術史 岡部紘三（東京大学）

（6）学 生

文理学部文学科時代、哲学専攻の卒業生は、不在の年もあったが、総計すると86名に達する。人文学部に改組以降は、哲学コースの卒業生は毎年切れ目なく、少ない年で2名、多い年で16名、総計150名になる。人間基礎論コースになってからの卒業生は、平成11（1999）年3月までの3年間で26名である。つぎに、文学専攻科哲学課程または人文学課程A群の修了者は5名、人文学研究科修士課程哲学の専攻分野の修了者は1名である。在学生は、人間基礎論コース（4年生）14名、哲学コース（2、3年生）11名、人間コース（同）15名である。卒業生の就職先について言えば、一般の企業に就職した者がもっとも多く、つづいて教員、公務員の順になっている。企業の職種は、新聞社・テレビ局、出版・印刷業、製造業、販売業、金融関係など、多岐にわたっている。教員になった者は、小学校から大学まで併せて

30名を超えているが、これは文理学部から人文学部への改組の前後10年をピークとしており、その後は減少している。公務員は、市役所、大学職員、警察、郵便局などである。

哲学コース カリキュラムの現状

1．教育目標

- （1）哲学的文献を精確に読み解く能力を養うと同時に、そこに含まれている諸問題を検討することを通じて、それぞれの哲学思想が持つ意味をその歴史的脈絡も含めて理解するよう促す。
- （2）これまでの諸思想を踏まえながら、自ら問題を発見し、自分自身の考えを展開できるような哲学的思考力・表現力を育成する。

2．授業の組み立ての骨格

組立方

全体としては分散（カフェテリア）方式であるが、一部、積み上げ的部分もある（「3.（A）各授業の位置づけ」を参照）。

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1年次 | 人間基礎論入門、講読 |
| 2～4年次 | 講義（概論・思想史・特殊講義）、講読、演習 |
- [ギリシア語、ラテン語]
- | | |
|-----|--|
| 3年次 | （上記の科目に加え、卒業研究準備の演習を履修。） |
| 4年次 | 卒業研究（卒業研究が中心になるが、必要に応じて上に挙げた各科目を履修する。） |

必修の内訳

入門・基礎演習（0）、概論〔思想史を含む〕（16）、演習・講読（12）、特殊講義（4）、卒業研究（10）各授業科目開講コマ数、および開講形態

- ・各教官が各学期ごとに、演習または講読を1コマ以上開講しているほか、「哲学概論」「西洋思想史」「西洋思想史」「哲学特殊講義」「古典ギリシア語」については毎学期開講しており、「論理学」と「美学」については隔年で開講（半期）している。いずれも半年で2単位。
- ・それぞれの授業は原則として半期ごとに行われるが、授業によっては、前年期の続きの内容が採り上げられる場合もある。ただし、その場合

でも、前学期受講していない学生も受講可能であるのが普通。なお、「古典ギリシア語」は半年でテキストを終了することが不可能であり、そのため、一通り学習するためには、最低でも2期の間受講する必要がある（半年だけの受講でも単位は出している）。

- ・授業分担と非常勤講師については、ほぼ例年、次の通り。

前期

教官 A：「哲学概論」「哲学講読」

教官 B：「西洋思想史」「哲学講読（1年生向）」
「哲学演習」

教官 C：「西洋思想史」「哲学演習」「古典ギリシア語」

非常勤講師 D：「哲学特殊講義」

後期

教官 A：「哲学概論」「哲学演習」「論理学」

教官 B：「西洋思想史」「哲学特殊講義」「哲学演習（卒業研究準備）」

教官 C：「西洋思想史」「哲学講読（1年生受講可）」
「古典ギリシア語」

コース横断的授業

(ア) 哲学コースと人間学コースが共同で開講している授業

「人間基礎論入門」4単位 [選択]

(イ) 人間学コースが開講する授業の内、哲学コースでも必修または選択の中に含まれているもの

「倫理思想・宗教思想・東洋思想・現代と思想・比較思想」の内いずれか4単位 [必修]

「人間学特殊講義」4単位 [選択]

「人間学演習」4単位 [選択]

「人間学講読」4単位 [選択]

「ラテン語中級」4単位 [選択]

3. 各授業の位置づけ、および学生の受講形態

(A) 各授業の位置づけ（主要なもの）

「人間基礎論入門」……主に1年生を対象とし、コース選択の際の参考になるよう、哲学（および人間学）という分野がどのような問題を扱うかを事例を通じて紹介する。

「哲学概論」……主として2年生を対象とする。哲学における基礎概念を説明すると共に、哲学

の各領域が扱う最も根本的・一般的な問題を広い視野から概説する。

「西洋思想史」……主に2～3年生を対象とし、哲学を中心とする西洋思想をその歴史的脈に基づいて説明する。これは、当の講義で扱った時代の思想を理解するためだけでなく、それ以降の時代の諸思想を理解するための基礎にもなる。

「哲学特殊講義」……2～4年生向け。哲学における特定の問題について、詳細に解説し、より専門的な議論を行う。

「哲学講読」……主に2～4年生向け [1年生向けまたは1年生も受講可能な授業もある]。哲学の文献の精密な読解を行う。

「哲学演習」……2～4年生向け。哲学的文献の読解に基づきながら、そこで扱われている問題について参加者が議論し合い、理解を深める。

「哲学演習（卒業研究準備）」……3年生向け。学期の前半は学生の意見も採り入れて選んだ文献を読み議論するが、後半は学生自身の研究発表が中心となる。

(B) 学生の受講形態

- ・2年生以降は学生指定のある授業が少ないため、かなり自由に選択できるが、概論や思想史は2～3年の内に受講することが望ましく、実際そのようにしている学生が多いはずである。講読・演習は哲学コースの最も中心となる授業であり、学問的訓練にもなるので、4年次にも最低一つは受講することが望ましい（そうしない学生もいる）。

- ・授業の具体的な進め方については、各教官や授業の内容によって異なる。講読・演習では、毎回学生の担当者を決めている場合も多い。学期末には試験やレポートを課するのが通常であるが、講読や演習の場合にはごくまれに、平常点だけで評価することもあるようである。

- ・卒業研究においては、10月下旬に「中間報告会」12月中旬に「最終発表会」を開催し、進捗状況を確認すると同時に、各教官や学生相互の批判やアドバイスを受けることになっている。

人間学コース カリキュラムの現状

授業科目名	単位数	
	必修科目	選択科目
倫理思想	2	2
宗教思想	2	2
東洋思想史	4	2
現代と思想	2	2
比較思想	2	2
人間学特殊講義	2	4
人間学演習	6	4
* 人間学講読	4	4
哲学概論	4	
西洋思想史Ⅰ	4	4
西洋思想史Ⅱ	4	
哲学特殊講義		6
哲学演習		8
* 哲学講読		8
文化基礎論講読		2
美学		2
論理学		2
古典ギリシア語		4
ラテン語中級		4
* 人間基礎論入門		4
卒業研究	10	
計	38	70

卒業に必要な専門科目の単位数は84単位である。その内訳は、

- (1) 必修科目38単位
 - (2) 選択単位70単位
- その他の人文学部専門科目 } の中から併せて46単位

1. 教育目標

- (1) テキストの的確な読解力と、自分の問題としても考えながらテキストを読解する姿勢の養成：東西・古今の倫理思想・宗教思想を幅広く学びながら、人間が人間存在をどう捉えてきたかについて理解を深めさせたい。そのために、古典(テキスト)の内容を自分自身の経験と照らし合わせつつ、いわば著者と自分自身とが対話するような形で読んでいく姿勢を身に付けさせたい。
- (2) 多様な価値観や世界観・人間観の理解、ならびに思考力・表現力・コミュニケーション能力の養成：現代社会・現代日本を取り巻く具体的諸問題を題材に研究発表やその後の自由なディスカッションを行い、背後にある世界観や価値観を考察させ、各自の世界観・価値観を高め深める機会を提供し、私たちの撰ぶべき生き方を模索することも重要な目的。そのために必要になる、様々な問題に対して自分自身の考えを持ち、またそれを正確に表現し伝達する力を身に付けさせたい。

2. 授業の組み立ての骨格

1年次	2年次	3年次	4年次
入門、講読	講義、講読、演習、 [演習(卒業研究準備)] [ギリシア語、ラテン語]	講義、講読、演習、 演習(卒業研究準備)	演習(卒業研究準備) 演習

3. 必修の内訳

入門・基礎演習(0)、概論(16)、演習(6)、講読(4)、特殊講義(2)、卒業研究(10)計、38単位

4. 各授業の位置付け

[1年次] 1年次の学生に対しては、人間基礎論講座唯一の共通科目で専門基礎科目である「人間基礎論入門」と「人間学講読」を開講している。

「人間基礎論入門」は、人間基礎論講座に所属する2コースを紹介するための授業として位置づけられており、各コースが半分(7回)ずつ担当している。はじめ通年で開講していたが、現在のコース選択の時期からして、講座やコースの紹介の目的は前期のみの開講で十分果たせると判断し、平成11年度から、前期のみの開講に変更した。人間学コースは、7回を、2名の西洋系の教員が毎年交代で4回、東洋系の教員は毎年3回、コースでの学習内容の紹介を念頭に置いて授業をしている。

コースでの学習内容のより詳細な紹介のために、また、コースでの2年次以降の学習に円滑に移行できるように基礎学力を養成するために、専門科目である「人間学講読」を、各期2コマずつ、1年生だけを対象として開講したり、1年生も受け入れるかたちで開講したりしている。いずれのかたちで開講するかは、担当教員の判断に任せている。

2年次から人間学コースに所属することになる学生のほぼ全員が、1年次に人間基礎入門か人間学講読を受講しており、そこで得た知見や印象を基にしてコース所属を決める場合が多いようである。

[2年次] 2年次の学生に対しては、自分の興味・関心を大切にして、できるだけ自由に、(他コースのものを含む)いろいろな授業に出席するように指導している。その一方で、いろいろな演習や講読に積極的に参加する中で、テキストやテーマ、あるいは研究方法の点で、卒業研究につながるような授業を見つけて、3年次以降の学習の核にするように

アドバイスしている。

学生たちは、おおむね、コースの必修科目から履修し、必要単位数を取り終えると、講読や演習などの少人数の授業よりも、集中講義などを最大限度履修して、講義などで単位を揃える傾向が強い。よって、残念ながら、「3年次以降の学習の核に」なるような授業を見つけようとする学生は、むしろ少数派である。

[3年次] 3年次の学生の学習の核として、3人の教員が参加し、4年生の卒業研究の中間報告をも織り込みながら実施する「人間学演習」(平成10年から、金曜日の4、5限に連続して、隔週で、前期後期に開講している)を準備している。3年生に、4年生の卒業研究ができあがっていく過程を見せることによって、卒業研究のテーマや研究方法などに関してある程度、目論見や考えを持たせて、卒業研究にスムーズに取りかかってもらいたいと考えている。(だからといって、この人間学演習は、人間学コース以外の学生を排除しているわけではない。哲学コースや、他講座の学生もぼつぼつ受講している。)

上の人間学演習と併せて、自分の興味や関心に関係のある演習を履修し、研究方法や本の読み方、議論の仕方を身につけさせたいと考えて指導しているが、2年次に必修単位をそろえると極端に演習・講読などの少人数に出なくなり、研究の拠点にしうる演習を持つに至る学生はわずかしかない。

[4年次] 大半の学生は3年次までに単位を取得し終わり、授業にはほとんど出席しなくなる。かろうじて、上記の人間学演習に(主に自分が発表する時間に)出席するか、あるいは、卒業研究に関連するテーマやテキストを扱っている授業だけに出席するか、である。

卒業研究のテーマの決定に関しては、極力学生たちの希望をほぼそのまま認めている。1名の指導教官に関しては、学生の選ぶテーマと希望に沿って、4月に決めるが、教員3人の間では、上記人間学演習を使って、できるだけ3人共同で指導していくということで合意しているし、学生たちにもそのことを知らせている。

5. 各授業科目開講コマ数、および開講形態(半期、年間、隔年など)各授業の分担の割り振り、非常勤
右表参照

6. コース横断的講座あるいは学科共通などの授業原則として教員は、毎期、講義、演習、講読を各1コマ、その上に専門基礎科目である人間基礎論入門を以下に説明する順番で担当し、さらに、3年生を対象にする卒業研究の準備をするための演習(「人間学演習」、2時間続きで隔週に開講)を3人全員で担当する。

各教員が毎期、演習1コマ、講読1コマ、併せて6コマを開講しているのは、様々な古典や思想家、テーマに出会う機会を、様々な研究方法やテキストの読み方、議論の仕方を身につける機会を、学生たちにできるだけ多く得させるためである。

3人の教員の授業担当は以下の通り。

A(現代の倫理思想を担当): 現代と思想(後期) 倫理思想(前期) 人間演習、人間学講読、人間基礎論入門(隔年、前期)

B(西洋倫理思想史を担当): 宗教思想(前期) 倫理思想(後期) 人間学演習、人間学講読、ラテン語中級、人間基礎論入門(隔年、前期)

C(東洋倫理思想史を担当): 東洋思想史、人間学演習、人間学講読、人間基礎論入門(毎年)
(非常勤講師: 比較思想(後期)、人間学特殊講義(前期・後期))

人間学授業配当表

授業名称	前期担当者	後期担当者	備考
倫理思想	A	B	概論・概説
現代と思想		A	
東洋思想史	C	C	
宗教思想	B		
比較思想		非常勤・集中	
人間学特殊講義	非常勤・集中	非常勤	前期
人間学演習	A	A	
人間学演習	C	B	
人間学演習	B	C	
人間学演習*	A・B・C	A・B・C	*2、3年生対象 「卒論演習」隔週・ 2時間連続開講
人間学講読	A*	A	*1年生のみ対象
人間学講読	B*	B*	*1年生も対象
人間学講読	C	C*	*1年生のみ対象
ラテン語中級	B	B	講座共通・専門基礎科目
人間基礎論入門	A・C		
卒論指導	A・B・C	A・B・C	

7. その他（カリキュラム以外の授業）

平成11年度、人間学コースとして初めて4年生を有し、卒業研究の指導を行っている。卒業研究の中間発表会や、最終発表会を年に数回実施することを計画している。3年生以下の参加も認め、合宿式なども試みたいと考えている。

8. 学生の受講形態の概略

上記「4.」に記載した。

2 日本史コース

日本史コースは、その前身が富山大学創立当時の文理学部文学科史学専攻のうちの国史学分野（後述のようにこのように仮称する）に遡り、その後人文学部人文学科日本史学コースを経て、現在の人文学科（歴史文化講座）日本史コースに至った。この平成11(1999)年3月には、47回目の卒業生を送り出した。この間、卒業生が全くなかった年があったり、また何人かの中途退学者を出しながらも、とにかく学部生360名・専攻科生15名・大学院生修士17名の卒業・修了をみることになる。

この間の歴史を振り返ってみると、ほぼ以下のような4期に分けて、叙述できるものと考えられる。まず、第1期は、文理学部蓮町校舎時代の史学専攻国史学分野の時期で、大学創設の昭和24(1949)年5月から文理学部が五福校舎に移転する37(1962)年4月までの13年間である。ついで、第2期は、五福校舎移転後の文理学部時代であり、人文学部に改組され、文理学部が廃止された昭和55(1980)年3月までの18年間である。さらに、第3期は、人文学部人文学科日本史学コースの時期で、少し第2期と重複するが、人文学部が創設された昭和52(1977)年4月から教養部廃止のあった平成5(1993)年3月までの16年間である。最後の第4期は、人文学部人文学科日本史コースの時期で、教養部の教官を受け入れて人文学部の改編が行われた平成5(1993)年4月から現在までである。

蓮町校舎時代の国史学分野

昭和24(1949)年5月から37(1962)年4月まで
昭和24(1949)年5月、旧富山高校のあった蓮町

校舎に文理学部が創設され、その文学科のうちに哲学専攻・文学専攻と並んで史学専攻が設けられた。当時の史学専攻のカリキュラムをみると、考古学・人文地理学・民俗学（民族学）・美術史も主要授業科目に加えてあり、教育内容は、現在の日本史・東洋史・西洋史の3コースのそれだけでなく、広く歴史学周辺を学習させる内容であった。ただ、国史学・東洋史学・西洋史学の演習が選択必修であり、学生はこの演習の選択にしたがって卒業論文のテーマを決めていったと考えられ、この演習の選択・卒論のテーマがのちに学生の学習研究分野と見なされた。現在の日本史コースは、国史学演習を選択した学生のグループに始まったのである。

研究組織としては、大学科目の史学を史学第一講座・同第二講座・同第三講座に分け、それぞれ国史学・西洋史・東洋史をこれに充てたという。講座というのは俗称で正式には学科目というべきであるが、史学第一講座の教官が史学専攻の国史学演習を中心に日本史関係授業を担当したので、この講座が現在の日本史コース指導の教官グループの前身といえる。

史学第一講座には、開学当初から教授に日本古代史・日本文化史の高瀬重雄、助教授に近世史の坂井誠一、講師に近代史の梅原隆章を迎えた。他の史学講座には西洋史の1名が着任したのみの状況だったに比較して、日本史はいち早くスタッフが揃ったといえる。高瀬は、高岡工専教授兼富山高校講師から富山大学教授に就任すると、その年の8月から図書館長を1年間、学生部長を4年間務めたが、さらに昭和32(1957)年9月からは文理学部長を6年間務め、学部や全学の運営にも尽力している。また、高瀬は、富山県の地方史研究の振興を図るため、昭和29(1954)年3月学内に越中史壇会を設立し、その会長に就任した。この会は、事務局が現在では富山県公文書館に移されているが、いまなお県内の地方史研究の拠点として活動している。高瀬は平成10(1998)年までその会長の職にあった。坂井は、富山高校教授兼教諭から開学と同時に文理学部助教授に就任した。梅原は、富山高校講師から富山大学講師に就任、昭和24(1949)年8月から附属図書館文理学部分館長も務め、27(1952)年7月助教授に昇任した。

この時期、史学専攻の授業として各年交互に民族

学・美術史・考古学の授業を開講していた。その講師には、いま史料でわかる限りでは、民族学では昭和34年度から38年度までが岡政雄、美術史では35年度から38年度までが谷信一、考古学では35年度から37年度までが末永雅雄であった。

この時期の史学専攻生が履修しなければならない単位は、一般教育科目52単位、体育4単位、専門科目58単位、卒業論文10単位の合計124単位であった。昭和32年当時では、専門科目のうち必修は、史学概論2単位、日本史学史2単位、西洋史学史2単位、東洋史概説2単位、日本文化史6単位、西洋文化史6単位、東洋史概説4単位、日本史特殊講義2単位、西洋史特殊講義2単位、東洋史特殊講義2単位、考古学および民俗学2単位、地理学2単位、美術史1単位の合計37単位であり、学生は等しく日本史・西洋史・東洋史の授業を受けることになっており、さらに広く歴史学周辺の考古学・民俗(族)学・地理学・美術史を履修しなければならなかった。その上で、選択必修として日本史学演習6単位、西洋史学演習6単位、東洋史学演習5単位の内から1科目選択することにより卒業論文を作成した。卒業論文は10単位で、その他哲学・文学専攻および経済学科・経済学部の授業の内から指定した選択科目から18単位以上、自由選択科目として8ないし7単位以上を取得することが必要であった。昭和34(1959)年10月にこの履修表が改正され、東洋史学史の代わりに開講されていた東洋史概説が廃され、東洋史概説と併せ東洋史概説6単位となり、日本文化史・西洋文化史を廃して国史概説・西洋史概説それぞれ6単位となった。また日本史特殊講義は国史学特殊講義に科目名変更が行われ、西洋史特殊講義・東洋史特殊講義とともにそれぞれ2単位ずつ増やしておのおの4単位となった。選択必修でも、日本史演習が国史学演習と科目名が変更され、東洋史学演習が6単位になった。これに伴い必修科目の合計が42単位以上に、選択科目の合計が12単位以上に変更された。

史学専攻の卒業生は、昭和27年度の5名が最初であるが、36年度までの10年間に合計83人を数える。このうち、国史学分野の者は45人であり、年平均4.5人になる。27年度の第1回卒業生は矢後まゆみ1人であるが、28年度は長澤聡一郎ら4名、29年度

藤原(京田)良志ら7名、30年度・31年度3名、32年度は現同窓会長の松平義磨ら7名、33年度4名、33年度栗三直隆ら4名、35年度3名、36年度9名というように毎年卒業生を送り出している。

五福校舎移転後の文理学部国史学分野

昭和37(1962)年4月から同55年3月まで

昭和37(1962)年4月、文理学部は蓮町校舎から五福キャンパス移転したが、学生の教育組織としての史学専攻という組織には、基本的に変更はなかった。しかし、これまで主として国史学分野を指導してきた教官組織である史学第一講座は、昭和38(1963)年12月から国史学講座(正式には学科目国史学)と改称された。42(1967)年4月には、教養部が設置されることにより、今まで文理学部の担ってきた一般教育が教養部に移され、文理学部からも幾人かの教官がその要員として異動した。学科目国史学からも助教授の梅原隆章が教養部に移り、これまでの教官3人体制から2人体制になった。昭和48(1973)年4月には文理学部に文学専攻科が設置され、歴史関係では史学課程が設けられた。これによって学部卒業後、1年の専門研究ができる専攻生が学部生と共存するところとなった。昭和52(1977)年5月には文理学部が改組され人文学部と理学部が設置された。そして、55(1980)年3月最後の卒業生を送り出すことにより、文理学部は廃止された。

この時期は、学科目国史学の教官スタッフが創立当初の高瀬・坂井・梅原が異動や退職によって新しいスタッフに入れ替わったばかりでなく、教養部に定員を割いたため3人体制から2人体制に後退するところとなった。まず、助教授の坂井誠一が昭和39(1964)年10月教育学部に異動となり、その後任に京都大学人文科学研究所助手の楠瀬勝が、40(1965)年1月助教授として赴任した。昭和42年4月、上に述べたように梅原隆章が教養部にて、高瀬と楠瀬の2人体制となる。さらに、昭和49(1974)年3月高瀬重雄が停年退職し、その後任に京都大学大学院から鎌田元一が、同年12月に講師として赴任した。鎌田は、昭和52(1977)年4月助教授に昇任した。楠瀬は中世史、鎌田は古代史であり、以後文理学部・人文学部の日本史の教官は古代史と中世史の研究者に固定されるようになる。これは、教育学部に

移った坂井が近世史、教養部に移った梅原が近現代史であったことから、学部間の棲み分けを行い、お互いに協力した教育研究体制をとることを図ったものである。

この時期の国史学分野では、自前のスタッフでの授業が古代・中世史中心に行われたが、その欠を補う意味で他所から非常勤講師を依頼することが多かった。その主な講師を列挙すると、次の通りである。

赤松俊秀・小葉田淳・五来重・柴田実・杉山博・高澤裕一・高取正男・戸田芳実・橋本哲也・林屋辰三郎・山口晶男

教育学部に異動した坂井誠一は、同時に教授に昇任し、昭和50(1975)年からは評議員、52(1977)年3月からは教育学部長を務め、56(1981)年3月に停年退職した。現在、富山大学名誉教授である。さらに同年4月上越教育大学学校教育学部教授に就任、付属図書館長・評議員を歴任、61(1986)年4月同大学を停年退職、同大学名誉教授となった。また学会活動では、昭和44(1969)年4月からは越中史壇会副会長に就任、53(1978)年北陸都市史学会を創設し副会長、次年には会長に就任している。さらに57年からは地方史研究協議会評議員となった。社会貢献としては、富山県下の自治体史の編纂は枚挙に暇がないが、とくに昭和40(1965)年に富山県史編纂委員会委員となり、55(1980)年からは富山市史編纂監修者を務めたこと、62(1982)年から富山市文化財調査審議会会長に就任したことを挙げておく。坂井の研究分野は、近世越中の漁業・交通・商工業・水田開発といった産業史の全体的な研究、あるいは越中の産業に対する加賀藩の支配方式についての研究である。著作・論文も多数であるが、代表的なものとして昭和49(1974)年『富山藩』(巧玄出版)、53(1978)年『加賀藩改作法の研究』(清文堂出版)がある。後者は法政大学大学院に提出された博士論文で、その前年に文学博士の学位を授与された。

教養部に異動した梅原隆章は、昭和42(1967)年9月教授に昇任し、43(1968)年10月から学生部長、45(1970)年から2年間および55(1980)年から4年間教養部長を歴任し、60(1985)年停年退官、名誉教授の称号を授与された。社会貢献としては、昭和45(1970)年から富山県史編纂専門委員、56(1981)年4月から富山県総合計画基礎課題研究会

委員、57(1982)年から富山県日中友好協会副会長、59(1984)年富山県文化懇談会委員や国土審議会専門委員中部圏担当などを務めた。他方、梅原は滑川の浄土真宗本願寺派梅原山専長寺の住職であり、宗派や宗学の役員を兼ねるとともに、昭和45(1970)年から10年間「北日本新聞」の「心」の欄に論説を連載、その宗教的信念を広く県民に説いた。梅原の研究分野は、始祖親鸞から現代に至るまでの真宗史研究である。主な著書に昭和26(1951)年『親鸞伝の諸問題』、34(1959)年『真宗史の諸問題』、37(1962)年『近世真宗史の諸問題』いずれも顕真学苑、41(1966)年『真宗教団の現代的課題』(永田文昌堂)などがある。なお、『近世真宗史の諸問題』は梅原の学位請求論文であり、昭和39(1964)年京都大学大学院より文学博士の学位を授与された。

高瀬重雄は、文理学部の蓮町から五福への移転の際の学部長であったが、さらにこの期も昭和40(1965)年9月から2年間および45(1970)年から4年間の2度にわたって学部長を務め、49(1974)年3月停年退職した。同年4月富山大学名誉教授を授与されたが、同時に金沢経済大学教授に就任した。昭和53(1978)年4月には同大学教務部長を併任、56年に同大学を停年退職した。学会活動としては、史学研究会・日本思想史研究会などの評議員を兼ねたが、越中史壇会は平成10(1998)年まで40余年にわたってその会長を務めた。社会貢献としては、富山県社会教育委員、富山県地方労働委員会公益委員および会長、高岡市公平委員会委員長、北日本放送番組審議会委員長を兼任するとともに、富山県史編纂監修者および富山県文化財審議会専門委員を務めた。高瀬の研究分野は、古代山岳信仰の研究であるが、思想史や文化史さらには広く古代から現代に至る越中史にも関心があった。主な著書は昭和44(1969)年『古代山岳信仰の史的考察』(角川書店)、52(1977)年『白山・立山と北陸修験道』(名著出版)などがある。前者は学位請求論文で、昭和37(1962)年京都大学大学院から文学博士の学位を授与された。さらに高瀬の業績で指摘しておかなければならないのは、折に触れ地元の新聞や会社報に載せられた300編にも及ぶ歴史エッセーであり、その歴史的関心の広さが示されている。

この時期に史学専攻の学生が履修しなければなら

ない授業科目および単位数は、以前と変化はない。昭和48(1973)年設置された文学専攻科は修業年限が1年、史学の分野ははじめ史学課程であったが、56年度から人文学課程B群となった。この史学課程の履修単位は、特別研究論文20単位が必修で、古文書学2単位・国史学演習2単位・東洋史学演習各2単位・西洋史学演習各2単位・国史学講読2単位・東洋史学講読2単位・西洋史学講読各2単位・国史学特別講義各4単位・東洋史学特別講義各4単位・西洋史学特別講義2単位のうちから10単位以上を選択履修しなければならなかった。

この時期昭和37(1962)年4月から55(1980)年3月までに卒業した史学専攻生は、1年遅れて55年度に卒業した5名を含めて226名である。このうち国史学を学習分野とした卒業生が115名でその半数を占める。この18年の平均は6.4名で蓮町時代よりほぼ2人増えている。昭和37年度は9名、38年度は藤井一・二ら10名、39年度9名、40年度は山田(新田)二郎ら7名、41年度は米原寛ら5名であったが、42年には卒業生がなかった。日本史の卒業生がなかったのは、この50年の歴史でこの年だけであつた。しかし、昭和43年度には久保尚文ら6名、44年度4名、45年度6名、46年度は金龍静・藤井豊久ら5名、47年度10名、48年度10名、49年度7名、と多くの卒業生を出している。50年代に入って、昭和50年度は佐藤圭ら2名と少なかったが、51年度8名、52年度7名、53年度7名、54年度5名、と回復している。

なお、開学当初から昭和55年3月の文理学部廃止までに卒業した国史学分野の学部生は、合計160名で、この28年の平均は5.7名となる。ちなみに、史学専攻全体の卒業生では309名、文学科全体では1,291名である。

昭和48(1973)年設置された文学専攻科の史学課程のうち国史学分野の専攻生は、50(1975)年には3名、この年を除く48(1973)年から55(1980)年までは毎年1名ずつ修了者を出している。この8年間で、合計10名を数える。

文理学部の校舎はメインストリートを挟んで現在の経済学部の本館の真向かいにあり、4階建てで以前の教養教育棟と繋がっていた。国史学の研究室および史学専攻の演習室はこの建物の4階にあり、演習室は2室だった。この演習室は24時間開放され、授業の

ない時間帯は史学専攻の学生の溜まり場となり、また卒業論文作成の追い込み時には泊まり込むこともしばしばあったという。

人文学部日本史学コース時代

昭和52(1977)年4月から平成5(1993)年3月まで

昭和52(1977)年4月、人文学部が創設され、文理学部文学科史学専攻はあらたに人文学科の日本史学・東洋史学・西洋史学の3つのコースに編成替えされた。昭和53(1978)年10月、人文学部生を初めて専門課程に受け入れ、56(1981)年3月初めての人文学部卒業生送り出した。その前年3月最後の文理学部生を卒業させ、文理学部は廃止された。これらの過程を経て、史学専攻のうちの国史学分野は、ここに日本史学コースに改編された。これを指導する教官組織も学科目国史学から学科目日本史学に変更された。昭和56(1981)年4月には文学専攻科が改組され、従来の史学課程は哲学課程と統合され人文学課程となった。文学専攻科は、昭和60年度から募集を行わず、61(1986)年3月最後の修了生を送り出して、廃止された。昭和62(1987)年4月、大学院人文科学研究科が設置され、日本東洋文化論専攻と西洋文化論専攻が置かれた。前者のうちに研究分野日本史学が設けられ、日本史学の教官が教育学部・教養部の日本史教官の協力を得てこの研究分野を指導することとなった。ここに、学科目日本史学が名実ともに日本史学講座となった。平成5(1993)年4月、教養部の廃止に伴い人文学部が改編され、日本史学コースは日本史コースに名称変更され、これを指導する小講座は大講座に統合され、日本史学講座は東洋史学・西洋史学と統合され歴史文化講座となった。

学科目日本史学のちの日本史学講座の教官スタッフは、教授が日本中世史・古文書学の楠瀬勝、助教授が古代史の鎌田元一であったが、昭和58(1983)年3月鎌田が京都大学文学部助教授に転出した。その後任に、同年4月京都大学大学院出の櫛木謙周が講師として赴任し、日本古代史を担当した。櫛木は、昭和60(1985)年4月助教授に昇任したが、平成2(1990)年3月楠瀬が停年退職した。その後任には、同年4月に京都府立総合資料館資料主任富田正弘が教授として赴任し、中世史・古文書学を担当した。

さらに平成4(1992)年3月には、櫛木が京都府立大学文学部助教授として転出し、同年4月に京都大学大学院出の本郷真紹が助教授として赴任した。本郷の担当は日本古代史である。

この時期、日本史学コースの授業を担当していただいた非常勤講師は、次の方々である。

朝尾直弘・網野善彦・井ヶ田良治・岩井忠熊・上横手雅敬・江口圭一・大山喬平・岸俊男・狩野久・黒田俊雄・佐々木隆爾・芝原拓二・園田香融・高澤裕一・高取正男・高埜利彦・棚橋光男・中塚明・中村哲・成瀬不二雄・橋本哲也・林宥一・尾藤正英・広田昌希・深井甚三・藤井學・藤井謙治・松尾尊允・三鬼清一郎・村井康彦・安丸良夫・脇田晴子

また、大学院人文科学研究科日本東洋文化論専攻日本史学分野の授業を充実させるために、教育学部助教授深井甚三・教養部助教授永井和が大学院担当教官を併任した。平成元(1989)年3月永井が立命館大学文学部に転出したことに伴い併任を解かれたが、同年4月永井の後任として教養部助教授に赴任してきた立川健治が、大学院の日本史学研究分野の併任教官に加えられた。

昭和58(1983)年3月京都大学に転出した鎌田は、平成6(1994)年京都大学文学部教授に昇任、同8年改組によって京都大学大学院文学研究科教授となり、現在に至っている。その研究分野は、律令制下の農民負担や律令政府の地域支配、さらに広く7・8世紀の古代社会の実相を究明することであるが、その集大成は『律令公民制の研究』(塙書房)に纏められた。鎌田はこの論文によって京都大学大学院から文学博士の称号を授与された。また自治体史の編纂としては、彦根市史編纂委員などに携わっている。

楠瀬勝は、昭和56(1981)年5月から2年間評議員、58(1983)年5月から4年間人文学部長を歴任し、平成2(1990)年3月停年退官した。同年4月富山大学名誉教授の称号を授与されるとともに、高岡法科大学法学部教授に任ぜられた。平成3(1991)年から7年間は同大学副学長を併任し、9(1997)年同大学を停年退職した。学会活動としては、日本古文書学会評議員や富山県古文書学会会長など種々の学会役員を務め、平成5(1993)年から

は越中史壇会副会長、10(1998)年からは会長となり現在に至っている。自治体史編纂にも関わることが多く、昭和41(1966)年から22年間は富山県史編纂委員会中世史部会長、53(1978)年から18年間は福井県史編纂委員会中世史部会長、54年から8年間は下村村史監修者、平成元(1989)年からの8年間は小杉町史監修者、同6(1994)年から現在までは氷見市史編纂委員会監修者を歴任している。その他の社会貢献としては、富山県文化財保護審議会委員および会長、富山県博物館資料専門委員、立山博物館資料選定委員、文化財保護審議会専門委員会臨時調査委員、新湊市歴史博物館基本構想策定委員会委員など枚挙に暇がない。楠瀬の研究関心は、中世史に限らず近世史や交通史・科学技術史に及び、さらに文書・資料の調査・整理や紹介にも尽力した。主な著書としては、昭和58(1983)・59(1984)年『石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研究 江戸時代末期の郷紳の学問と技術の文化的社会的意義』第一輯・第二輯、48年『金子文書・折橋文書 調査報告書』、その他、『高樹文庫資料目録』、『同(古文書)』、『井波町肝煎文書目録』冊子類・古文書(一)・古文書(二)、『城端別院 善徳寺資料目録』などがある。なお、楠瀬の編著として、平成元年『日本の前近代と北陸社会』(思文閣出版)が刊行された。

平成4(1992)年3月に京都府立大学文学部助教授として転出した櫛木は、平成11(1999)年10月同大学教授に昇任し現在に至る。学会活動としては、昭和51(1976)年から58(1983)年まで、および平成元(1989)年から9(1997)年まで、日本史研究会運営委員、平成4(1992)年から9(1997)年まで木簡学会運営委員を務めた。社会貢献としては、自治体史の編纂に当たり、平成元(1989)年から5(1993)年まで福井県史原始古代部会参与、平成2(1990)年から9(1997)年まで小杉町史編纂委員、平成10(1998)年以降現在に至り茨木市史編纂委員を務めている。櫛木の研究分野は古代律令政府の労働力編成であり、徭役労働・雇傭労働や技術官人・古代手工業生産等の問題を明らかにし成果を上げた。その成果は平成8(1996)年『日本古代労働編成の研究』(塙書房)に纏められた。櫛木はこの著書の論文によって、平成10(1998)年7月京都大学大学院から文学博士の称号を授与されている。

文理学部時代の史学専攻は改組され、これを分けて人文学部人文学科のうちに日本史学・東洋史学・西洋史学の3つコースが創設された。ここに初めて学生が日本史を専門に学べる日本史学コースが誕生したのである。日本史学コースの学生が履修しなければならない授業科目は、日本史の専門教育のための基礎的学習を内容とする授業科目を増やし、かつ日本史・東洋史・西洋史を一体として教育していた従来の史学専攻の良さを生かしつつ、編成された。史学専攻時代の必修科目と選択科目という大分類は、主要授業科目と関連授業科目の大分類に変わった。主要授業科目では、日本史概説6単位、日本史学特殊講義6単位、日本史学史2単位、古文書学2単位、日本史学演習6単位、考古学概論2単位・史学概論2単位、東洋史概説2単位、東洋史特殊講義2単位、西洋史概説2単位、西洋史特殊講義2単位、卒業論文10単位の合計46単位が必修であり、以上の科目の指定を越える単位および日本史史料講読、考古学特殊講義、人文地理学概論の単位が選択であった。関連授業科目では、中国史学史2単位、西洋史学史2単位、文化人類学概論2単位、哲学概論2単位、西洋哲学史概論2単位の合計10単位が必修であり、日本思想史・中国思想史・東洋思想史・西洋思想史・日本文化史・日本芸能史・金石文学・民俗学・美術史・法制史・経済史・東洋文化史・朝鮮史・人文地理学特殊講義・同演習・国語史・国文学史が選択であった。関連授業科目は東洋史学・西洋史学コースとほとんど共通のものであった。専門教育の卒業に必要な単位数は、主要授業科目が必修を含めて58単位以上、関連授業科目10単位以上、自由選択科目8単位以上の合計76単位以上であった。

学生の履修表は昭和57年度以降改正された。主要授業科目では、日本史学史・中国史学史・西洋史学史を合体させた史学史2単位が必修となり、人文地理学概論は関連授業科目に変更された。関連授業科目では、必修の中国史学史・西洋史学史が史学史に統合されてなくなり、日本文化史2単位が必修となった。必修だった西洋哲学史概論2単位は、新たに関連科目に加わった文化構造概論2単位、言語学概論2単位の合計6単位のうちから2単位を選択必修とするように変更された。すなわち関連授業科目の必修は2単位減って8単位となった。また、日本思想

史・中国思想史・東洋思想史が思想史に統合され、日本芸能史・金石文学がなくなった。そして、新たに文化論・博物館学・同実習が加えられた。平成元年度以降も少し変更が加えられたが、主要授業科目には変更がなかった。関連授業科目では、東洋文化史がなくなり、新たに生活文化史・文化構造特殊講義・計算機実習が加えられた。ただし、必修は哲学概論等5科目のうちから2単位を選択すればよいことになった。

昭和62(1987)年4月に設置された大学院人文科学研究科日本・東洋文化論専攻の日本史学研究分野の授業としては、日本歴史文化特論(1)・(2)・(3)・(4)、日本歴史文化論を開講した。院生の修了に必要な単位数は、必修の日本歴史文化論8単位を含めて32単位以上であり、院生は専攻科共通授業の日本東洋文化論や他の研究分野の授業からも単位取得できた。

人文学部日本史学コースから最初の卒業生を送り出したのは、昭和56(1981)年3月である。それから平成5(1993)年3月までの13年間に卒業した日本史学コースの学生は、合計138名である。この13年の平均は10.6名で文理学部時代の後半よりほぼ4人増えている。昭和55年度は11名、56年度は13名、57年度7名、58年度は10名、59年度は裏野哲行・奥田和孝ら12名、60年は9名であった。さらに、昭和61年度には10名、62年度11名、63年度11名、平成に入って、元年度は13名、2年度には10名、3年度10名、4年度11名と、10名を上回る卒業生をコンスタントに送り出している。

昭和56(1981)年4月に改組された文学専攻科の人文学課程のうち日本史学研究分野の専攻生は、60年度に最後の修了生を送るまでの4年間では、3名だけである。56(1981)年から58(1983)年までは1人もなく、59年は宮森俊英1人、60年は裏野哲行・奥田和孝の2人であった。

昭和62(1987)年4月に設置された大学院人文科学研究科は、平成元(1989)年3月に第1回の修了生を送り出した。日本東洋文化論専攻のうち日本史学研究分野の院生は、5(1993)年3月までの5年間に4名の修了生を出した。昭和63年度は奥田和孝、平成元年度は宮森俊英、2年度は渡邊哲、3年度は伊藤克江と毎年1人ずつ修了をみたが、4年度は1人もいなかった。

人文学部・文学専攻科・人文科学研究科の合同校

舎は、旧文理学部の校舎を引き継いで使用した。日本史学の研究室は、人文学部への改組とともにこの校舎の4階から2階に移転した。そして、新たに日本史学コースの演習室が研究室の向かい側に設置された。この演習室も24時間開放され、授業のない時間帯は日本史学コースの学生の溜まり場となったことは、いうまでもない。現在の日本史学コースの演習室には「本史遺文」と名付けられた落書き帳が72冊残っている。ナンバーが付されており、最後が「漆拾参」であるから1冊足りない。よく調べてみると、「弐拾弐」が見あらず、2年前の点検ですでに紛失していたことがわかった。遺文とは「寧楽遺文」「平安遺文」「鎌倉遺文」など竹内理三の編纂した古文書史料集からとったものと思われるが、本史とは「日本史」の意か、「正史」の意か、最初に書き始めた学生たちに聞いてみないとわからない。調べによると、「壺」は昭和56(1981)年11月18日のとある退屈な授業時間に書き始められている。ちょうど第1回の人文学部生を卒業させた次の年度から始まっているわけである。この落書き帳は、日本史学コースの演習室に集う学生互いの連絡帳であり、また鬱憤のはけ口のようなものである。そのほか、日本史学コースの研修旅行のこと、スポーツ大会のこと、種々のコンパのこと、卒業論文こと等々、日本史学コース学生の生態の歴史を語る古文書でもある。平成5(1993)年4月の時点では、「陸拾」巻目のノートが書き埋められた。

なお、人文科学研究科の日本史学研究分野の院生は、この時期は、4階の大学院演習室にデスクを与えられていた。

歴史文化講座日本史コースの時代

平成5(1993)年4月から現在まで

平成5(1993)年3月教養部が廃止され、同年4月人文学部が教養部の多くの教官を受け入れて改編された。学科は人文学科・語学文学科の2学科から人文学科・国際文化学科・言語文化学科の3学科となった。日本史学コースは日本史コースに名称変更され、これを指導する小講座は大講座に統合され、日本史学講座は東洋史学・西洋史学と統合され、歴史文化講座となった。改組に当たって、歴史文化講座は実験講座となることを目指して、カリキュラムの大幅な改正を断行して文部省に概算要求を行った

が、時期尚早として受け入れられなかった。しかし、文部省の配慮として、概算要求しなかった国際文化論講座を実験講座に繰り入れたため、学内の処置として歴史文化講座と国際文化論講座を準実験講座とした。新日本史コースに実際に学生を受け入れたのは、翌年4月からである。これ以前には、学生の専門課程移行は2年後期からであったが、この改組を機会に専門移行が2年前期からとなったからである。人文学部改組の完成年度の翌年度、すなわち平成9(1997)年4月、人文科学研究科が改編され、従来の日本東洋文化論専攻と西洋文化論専攻から、文化構造研究専攻と地域文化研究専攻へと編成替えされた。日本史学研究分野は地域文化研究専攻の中に属することになった。平成10(1998)年人文学部語学文学棟の南に新校舎が増設され、この9月、日本史研究室および日本史コースの演習室は新校舎に移転した。

歴史文化講座の日本史教室は、教授が富田正弘、助教授が本郷真紹であったが、平成8(1996)年3月本郷が立命館大学文学部に助教授として転出した。後任には、同年9月に神戸大学大学院出の鈴木景二が助教授として赴任して、日本古代史を担当するところとなった。

平成5年度以降、日本史コースの授業を担当していただいた非常勤講師は、つぎの方々である。

綾村宏・安藤正人・稲葉伸道・伊藤之雄・井上勝生・今谷明・大隅清陽・大藤修・鎌田元一・勝山清次・小南浩一・白川部達夫・高橋秀直・尾尾達哉・中尾堯・永村眞・橋本義則・東四柳史明・深井甚三・藤井一二・藤井譲治・藤本孝一・本郷真紹・三鬼清一郎・森茂暁・安澤秀一・湯山賢一・横田冬彦・吉川真司

また、人文科学研究科日本東洋文化論専攻のうち日本史学研究分野の授業担当は、日本歴史文化特論については、鈴木景二・富田正弘および環境地域論講座助教授立川健治がこれを受け持ち、教育学部助教授深井甚三が併任でこれに加わった。深井は平成7(1995)年から、立川は8年から、それぞれ教授に昇任している。日本歴史文化論演習については、富田・立川・鈴木の3人が担当した。平成9(1997)年4月の人文科学研究科の改組に伴い、日本史研究分野は地域文化研究専攻に属したが、立川は新たに設置された文化構造研究専攻の比較社会論研究分野

の担当となり、日本史学分野の担当からはずれた。したがって、これ以後は、日本歴史文化特論については、鈴木・富田および深井が、日本歴史文化論演習は、富田・鈴木の2人で受け持つところとなった。

平成8(1996)年3月立命館大学文学部に転出した本郷は、11(1999)年4月同大学教授に昇任し、教学部副部長およびアドミッションズオフィス室長を兼任し、現在に至っている。社会貢献としては、平成4(1992)年から7(1995)年まで福井県史編纂委員会調査執筆委員、平成6(1994)年から現在まで氷見市史編纂委員会古代史部会副部長を務めている。本郷の研究分野は、7世紀から9世紀に至る各段階での古代王権と仏教との歴史的特質、神仏混淆過程と王権との関係を探るところにあるが、最近では白山信仰等の北陸地方における古代宗教の地域的特質にも目を向けている。「日本古代の王権と仏教」「古代王権と宗教」など日本史研究大会報告論文もあるが、白山信仰については『白山信仰の源流 泰澄の生涯と古代仏教』(法蔵館)に纏めた。

現在の教授の富田正弘は、学会活動としては日本古文書学会理事・評議員、社会貢献としては平成11(1999)年3月から現在まで文化財審議会第一専門調査会古文書部会委員および書跡・典籍部会委員、自治体史の編纂については、平成2(1990)年から現在まで宮津市史編纂委員会中世史部会代表、平成6(1994)年から現在まで氷見市史編纂委員会中世部会長を務めている。富田の研究分野は、主として中世東寺の古文書および寺院組織の研究にあり、これを敷衍して日本古文書の系譜論を考え、公文書様式の中世的展開を通して中世国家社会構造の究明にあたっている。平成元(1989)年4月「室町殿と天皇」等日本史研究会発表論文や7(1995)年「中世史料論」(岩波講座日本通史)等の史料学の論文もあるが、6(1994)年3月古文書料紙の研究である『古文書料紙原本にみる時代の変遷・地域的特質に関する基礎的研究』(科学研究費総合研究・代表)を纏め、7年からは東寺文書の検索システムCD-ROM「東寺文書悉皆目録及び花押画像データベース」(科学研究費研究成果公開促進費・代表)の作成に取り組んでいる。

現在の助教授の鈴木景二は、学会活動としては、木簡学会幹事・越中史壇会理事を務め、社会貢献と

してとは、富山市日本海文化研究所研究委員、富山市民大学講師を歴任、自治体史の編纂としては、氷見市史編纂委員会文化財部会委員を務めている。鈴木の研究分野は主として古代の交通史と仏教史にあるが、その方法は後代に残る古代的遺物・遺跡を広く猟渉するというユニークな史料学に基づくものである。近年は北陸・信濃・飛騨の古代地域間交通や立山信仰の展開などにも関心を寄せている。著書として、行基の基礎史料である『行基年譜』の翻刻、木簡の解説書『木簡古代からのメッセージ』(共著)があるが、交通史については「地方交通の諸相(古代交通史研究)」「古代の飛弾越中間交通路(富山史壇)」「加賀国南部の古代中世交通路と駅家(加能史料研究)」「神楽歌からみた古代日本海世界」(史学雑誌110-12)など、仏教史では「立山信仰と雄山山頂の遺物」(富山大学人文学部紀要30)などの論考がある。

学生の履修表は、平成5年度入学の学生から大幅な変更が加えられた。その変更を招いた最大の要因は、以前まで30時間の授業で1単位であった演習・講読が2単位に、以前45時間の授業で1単位であった実習・実験が30時間で1単位となったことである。学生の学習負担の軽減を図ったものであるが、演習に力を注いできた歴史のコースにとっては歴史の専門教育が成り立つかどうかの死活問題でもあった。そのため、日本史コースでは、演習の履修時間の維持を図るため、その必修単位を従来の6単位から12単位に倍増させた。東洋史コースはそれ以上の16単位に、西洋史コースにいたっては18単位と3倍に必修単位を増やした。古文書学演習は実習に変更し、2単位の必修指定で実質上以前と同じ時間を確保した。単位のカウントの仕方が変わらなかった講義では、放置しておいても受講すると思われるので、日本史概説は必修の縛りを6単位から4単位に削減した。削減した2単位は、講義と同じように単位をカウントすることになった日本史史料講読の必修単位とした。日本史特殊講義は以前と変更なく6単位の必修である。また、教官組織が大講座制である歴史文化に統合されるに伴い、日本史・東洋史・西洋史の共通授業を求められた。この3コースは文理学部時代の史学専攻以来の伝統もあり、史学概論・史学史おのおの2単位ずつを共通必修授業として実施してきており、また考古学概論・同特殊講義・人文

地理学概論等も共通して主要授業科目に指定してきた。また、関連授業科目は科目数の半数は共通した科目であった。しかし、明確な形で共通授業を実施していることを示す必要があったので、新たに1年生向けの歴史学入門および世界史序説を、専門の学生向けには東西交流史特殊講義・東アジア交流史特殊講義を主要授業科目として開講することになった。前者はまだ専門課程に移行以前の1年生であるから必修とはせず、後者はどちらか2単位の選択必修とした。従来から共通授業であった史学概論・史学史のおおの2単位ずつの必修単位は、上記の共通授業が設定されたため、どちらか2単位の選択必修となった。さらに、3コースは従来から自コース以外の2コースの概説と特殊講義それぞれ2単位を必修としてきたが、このときから他の2コースの概説・特殊講義に加えて演習の3科目からの4単位を選択必修とした。また、教養教育と専門教育を並行して行われることになったため、1年生向けの専門教育の授業を開講することが求められた。前述の歴史学入門および世界史序説はこの要請にも応えたものであった。そのほかに日本史基礎演習4単位を主要授業科目として開講し、ほかに東洋史と西洋史の基礎演習も1年時に履修したものは主要授業科目の選択単位として認めることにした。さらに、歴史文化講座の実験講座化に向け新たに実習を導入した。まず、日本史実習2単位は必修、古文書学演習も実習とした。古文書・史料・遺跡調査等のフィールド・ワークや史料管理やデータ処理のコンピュータ利用を想定した改革であった。さらに、卒業後学芸員を目指す学生が少なくないことから、当時本学部で行っている博物館学と同実習が考古学中心に運営されていることに鑑み、文献史学の歴史文化講座向けに、最近欧米から導入された文書管理学や先駆的な大学が開講し始めた文化財学を取り入れた文書館学および同実習を開講し、実践向けの学生の養成を目指した。これは学芸員の資格を目指すものを対象とするから当然選択科目である。この主要授業科目には、さらに人文学科共通授業として人文学基礎論2単位が必修となり、新科目が盛り沢山となった。そのため従来主要授業科目であった考古学概論・同特殊講義・人文地理学概論は関連授業科目に廻さざるをえなかつた。

次に、関連授業科目では、文理学部の史学専攻時代からそれである日本文化史・東洋文化史・西洋文化史・民俗学・法制史がなくなり、経済史は社会経済史に、思想史は東洋思想史に代替された。美術史・朝鮮史はかろうじて残され、東洋思想史は図らずも復活したことになる。人文学部になって次第に設定されてきた生活文化史・文化構造特殊講義・文化論も廃されたが、哲学概論・文構造概論・言語学概論・考古学概論・同特殊講義・人文地理学概論・文化人類学概論・博物館学・同実習は残された。新たに関連授業科目となったのは、心理学概論・社会学概論・国際地域研究・地球環境研究・比較社会論概説・国際社会研究など、新設コース向けの授業群であった。関連授業科目は、すべて選択とされ、この時期から必修はなくなった。以上の改正によって、主要授業科目は必修52単位以上、主要授業科目の選択および関連科目のうちから28単位以上、かつ合計では84単位以上が、卒業までに専門教育において取得しなければならない単位となった。

この履修表は、人文学部改組の完成年度の次年度である平成9年度に、少し変更が加えられた。まず、改組の際盛り込まれた人文学基礎論と歴史学入門は、都合により廃された。ついで、考古学概論・同特殊講義・人文地理学概論は、日本史と関係が深いということから関連授業科目から主要授業科目に復活させた。さらに、民俗学も同様の理由でしばらくで主要授業科目に挙げた。東洋史・西洋史の基礎演習は、入門的な内容であるので主要授業科目から関連授業科目に廻した。さらに、博物館法の改正により、この年から学芸員資格取得のための博物館学の必要単位が、4単位から6単位に変更になったことに伴い、博物館学相当の授業である文書館学も、文書館学・・それぞれ2単位を学部共通の授業として開講することとなった。

平成5年度から10年度までの6年間に当コースを卒業した学生は、合計62人である。その1年当たりの平均は10.3人である。年別の内訳は、まだ日本史学コース学生である平成5年度卒業生は8名、6年度は12名、7年度は7名であった。初めての日本史コースの学生である平成8年度卒業生は15名と日本史関係コースの歴史で最大の人数に達した。以後、9年度12名、10年度8名である。この年平均の数は

第 期とほぼ同じであり、このことから人文学部になってからは、日本史コースには平均して11人ほどの学生が毎年入ってきていることがわかる。人文学部創立からの日本史学・日本史コースの卒業生は10年間でちょうど200名、開学から通算すると47年で360名となった。ちなみに、平成11年の在籍学部生は約40名である。

つぎに、大学院生であるが、この期の6年間に日本史学研究分野を修了したものは、合計13名である。これ以外に2人が入学はしたものの進路変更のため中途退学しているから、毎年2名程度入学している勘定になる。内訳は、日本東洋文化論専攻としては、平成5年度に竹松幸香・杉森真希子の2名で、竹松はのち金沢大学大学院博士課程に進学、博士(文学)の称号を取得した。平成6年度は中国からの留学生劉曉峰1名であった。劉はこの後京都大学大学院文学研究科博士後期課程に進学、博士(文学)の称号を取得のち帰国して、現在中国精華大学の日本文化史の講師となっている。7年度は修了者がなかったが、8年度には坂下有紀・志麻克史・西村憲一・野村尚志の4名で、10年度と並んで研究分野最大の大量修了者を数えた。志麻はのち立命館大学大学院文学研究科博士課程に進学した。9年度は大岸里美・尾下成敏の2名で、尾下は京都大学大学院文学研究科博士後期課程に進学した。平成10年度は、地域文化研究専攻のものが初めて修了する年度であったが、日本東洋文化論専攻の石丸綾子・近藤俊彦が、地域文化研究専攻の本多真美子・油井晶代とともに修了した。この時期の日本東洋文化論専攻の日本史学研究分野のものは合計11名、前時期もあわせた日本東洋文化論専攻日本史学研究分野修了生は、合計15名である。日本東洋文化論専攻出の修了生と合計して、日本史研究分野の修了生は17人となった。なお、平成11(1999)年の大学院在籍の院生は2名である。

平成10(1998)年9月、人文学部の新校舎が旧語学文学棟南に完成し、日本史研究室ならびに日本史コース演習室がその6階に移転した。演習室は新しくはなったが少し狭くなり、日本史コースの2年・3年だけでも全員が演習に出席したら、演習室では狭すぎて他の教室を探さねばならないという皮肉な現象が続いている。しかし、学生たちは遅しく、狭

く暑い中でも熱心に授業を受けている。また、授業のない時間帯や放課後には、この演習室は旧校舎のそれと同様に学生の溜まり場となつてといる。演習室で書き継がれてきた「本史遺文」もなお健在である。日本史学コース時代の昭和56(1981)年から平成5(1993)年まで実質11年に60冊ものノートが書かれたが、日本史コース時代の平成5(1993)年から平成11(1999)年の現在までの7年間では11冊だった。前者は20枚程度の薄いノートを使用しており、後者は40枚程度の厚いノートである。これを割り引いても、以前よりエネルギーが落ちてきているのだろうか。それでも、いま学生たちは「本史遺文漆拾肆」を執筆中である。

大学院日本史学研究分野の院生がデスクを置く大学院生演習室は、平成10(1998)年の移転以後は旧語学文学棟3階の部屋が配された。院生も、平成7(1995)年以来独自の落書き帳を始めた。これもすでに数冊になるという。名付けて「高志鑑」という。高志は越の国のこと、鑑は吾妻鑑などの鑑から取った。名称の由来ははっきりしている。

3 東洋史コース

富山大学の発足時(昭和24年5月31日)、文理学部には史学第1、第2、第3講座が設置され、日本史(国史)、東洋史、西洋史が含まれた。しかし当初は東洋史専任教官がいなく、昭和25(1950)年4月1日になって佐口透(1916年生)が助教授として着任して、その後14年間、ひとりで文理学部文学科の東洋史を担当することになる。佐口は昭和16(1941)年に東京大学文学部(東洋史専攻)を卒業し、創設されたばかりの国立民族研究所に勤務し、終戦とともに郷里金沢に帰っていた。佐口は北アジア・中央アジア近世史を専攻し、数多くの研究業績があり、ドーソン著『モンゴル帝国史』全6巻(東洋文庫、平凡社1968~1975)の翻訳者としても著名である。著書のひとつ『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』(吉川弘文館 1963)は富山大学に勤務中の業績である。

なお発足当初の東洋史講座として関係深いのは、富山大学の初代学長が渤海国史の研究者として有名であった鳥山喜一(1887~1959)であったことであ

る。鳥山は京城帝国大学の教授として勤務する18年間（1928～1945）、失われた渤海王国の遺跡を求めて中国東北地方を精力的に踏査し、多くの発見と研究成果を発表した。それと同時に、渤海国遺跡について本格的な日中合同の発掘調査をも提唱した。その提唱は昭和8、9（1933、34）年に東亜考古学会の事業として実現し、鳥山もそのメンバーのひとりであった。その調査報告書は原田淑人、駒井和愛編『東京城』（東亜考古学叢刊、第6冊 1939）として出版された。その調査の最終の日、宮殿址の漆喰床上から「和銅開珎」錢一枚が出土し、これぞ紛れもない日中友好の証として関係者たちを感激させたことは有名な話となっている。

鳥山は敗戦により日本に引き揚げ（昭和20年11月20日）、翌年の21（1946）年5月より昭和24（1949）年7月まで第四高等学校（金沢）の校長であった。そして昭和24年5月に新制富山大学が発足するにともない、7月から昭和28（1953）年12月まで、約四年半にわたり富山大学学長として大学発展のために尽力した。その後鳥山は東洋大学に勤務するが、富山大学にはひきつづき非常勤講師として来訪し、得意の「東北アジア民族史」を講義した。昭和33（1958）年11月に富山大学で講義したのを最後に、翌年34（1959）年2月19日に胃癌のため東京大学附属病院において死去した（73歳）。佐口透はさきに挙げた著書の序文に、学長鳥山喜一について次のように記している。

富山大学長であった故鳥山喜一先生（1887～1959）がほとんど著者一人の利用のために清朝歴朝実録を著者の研究室（富山大学）に購入されたため、この大部の基本的史料を書斎の座右に置いて自由に繙くことができ、研究の進行に確信を持ち始めて今日に至ったが、このことがなかったなら私は恐らく現在の研究を遂行する意欲も能力をも生み出すことはできなかったであろう。著者は鳥山喜一先生が著者に与えられた物心両面の御厚情に対して本書を捧げることによって深く感謝と追憶の念を表したい。

鳥山喜一が購入したという『清朝歴朝実録』は、清朝の歴代皇帝の実録であり、奉天故宮（現瀋陽市）の崇謨閣に収蔵されていたものを（満文と漢文両様、紅絹胡牒装、朱界の中に精写）、内藤湖南らが日満

文化協会の事業として複製出版したものである（満洲国国務院 1937刊）。現在、確かに富山大学附属図書館に収蔵されており、実物よりやや小型ながら、豪華で美しい複製本である。当時でもなかなか入手困難な稀覯書であったと思うが、最近になって、さらにそれから複製された洋装普及版の『大清歴朝実録』（A5判94冊）が台湾から出版され、今私たちは普段にはそれを使用する。

現在、フィールド調査の機会を失った日本の渤海国史研究はかつてほどの勢いはない。しかし当時富山大学文理学部の日本史担当教授であった高瀬重雄は鳥山の影響を受け、日本海地域と渤海王国との交流を中心に研究を進め、あわせて渤海国関係の研究資料の収書に努めた。そのおかげで鳥山の遺稿集である鳥山喜一著、船木勝馬編『渤海史上の諸問題』（風間書房 1964）、新妻利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』（学術書出版 1969）、前述の発掘報告『東京城』など、渤海国史の研究文献が富山大学附属図書館に多く蔵書されている。

富山大学文理学部は昭和37（1962）年3月31日に蓮町の旧校舎（旧制富山高校校舎）から五福の新校舎に移転し、その2年後の昭和39（1964）年5月に15周年を迎える。佐口透が金沢大学文学部に転出するのは昭和39（1964）年3月31日である。佐口透の後任には大谷大学より間野潜龍が助教授として同年6月1日に着任した。間野は長らく京都大学において『明代満蒙史料（明実録抄）』（京都大学文学部 1954～1959）の編纂に従事し、専攻分野もまた明代中国史であった。富山大学附属図書館には上記『明代満蒙史料』全18巻と間野潜龍『明代文化史』（東洋史研究叢刊31 同朋舎 1979）が所蔵されている（著者寄贈本）。間野は昭和50（1975）年3月31日付で大阪外国語大学教授として転出したが、惜しいことに昭和56（1981）年5月1日、58歳の若さで病死した。

間野の後任として永田英正（1933年生）が京都大学人文科学研究所（助教授）から教授として昭和50年4月1日に着任した。永田の研究分野は中国古代史、とくに居延漢簡など近年出土した木簡資料の整理、解読の研究である。永田は富山大学においても木簡研究を続行し、のちに『居延漢簡の研究』（東洋史研究叢刊41 同朋舎出版 1989）としてその研究成果を出版している。永田が着任してまもなく、

文理学部の分離改組の話が本格的となり、ついに昭和52(1977)年5月2日に理学部と人文学部とが設置され、それぞれの組織も大幅に拡充された。東洋史講座の教官も1人から2人に増員された。昭和54(1979)年4月1日、その新しいポストに夫馬進(1948年生)が京都大学人文科学研究所(助手)から講師として着任した。夫馬の研究分野は中国明代史、とくに前近代から中国に出現していた民間の慈善事業(善会、善堂)および国家による福祉政策を研究、評価するものである。中国各地の善会、善堂の実態を知るには当時地方ごとに編纂された地誌類(方志)が重要な資料となる。現在、富山大学附属図書館には『中国方志叢書』(第一期、第二期、台北、成文出版社)および各種の中国地方誌が多く所蔵されているが、その収書の発端は夫馬の研究であった。しかし中国地方誌は学内の他の研究者にも共通して活用され、現在も方志関係の収書は継続されている。夫馬進のこうした研究は最近『中国善会善堂史研究』(東洋史研究叢刊53 同朋舎出版1997)として出版された。

永田英正は夫馬を迎えて2年後、昭和56(1981)年4月1日付で滋賀大学教育学部教授として転出した。永田はその後、平成2(1990)年4月1日付で京都大学文学部教授に着任、平成9(1997)年3月31日で同大学を停年退官し、引き続き京都女子大学文学部教授として勤務している。永田の後任として昭和56(1981)年4月1日付で小谷仲男(1938年生)が鳥取大学教育学部(助教授)から教授として着任し、現在に至っている。小谷の研究分野はガンダーラ仏教美術史および東西交流史である。富山大学に着任以前、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊のメンバーとしてながらく発掘調査に従事しており、富山大学に勤務することになったから、ガンダーラ仏教遺跡の調査(1984、1986、1989年)のためにパキスタンにおもむいている。小谷の研究業績としては上述した調査の報告書、またそれらの調査に基づいた個人的研究の成果があり、後者は小谷仲男『ガンダーラ美術とクシャン王朝』(東洋史研究叢刊51 同朋舎出版1996)として出版された。夫馬進は昭和56(1981)年4月に助教授に昇任し、小谷教授とともに東洋史コース(講座)の運営にあたってきたが、昭和62(1987)年4月

1日付で京都大学文学部助教授として転出した。その後、夫馬は平成3(1991)年4月に同教授に昇任、現在は京都大学大学院研究科教授として勤務する。

夫馬の後任として、昭和62(1987)年4月1日付で檀上寛(1950年生)が堺女子短期大学から助教授として着任した。檀上寛の研究分野は元明時代の中国史である。檀上は明朝皇帝の専制政治と被支配の民衆社会との調和を中国儒教イデオロギーの理念と現実との中で解明しようとする。その研究成果は檀上寛『明朝専制支配の史的構造』(汲古書院1995)として出版された。また檀上の近著として、檀上寛『朱元璋(明の太祖)』(白帝社1994)、『永楽帝』(講談社1997)がある。檀上は5年間富山大学に在任して、平成4(1992)年4月1日付で京都女子大学文学部助教授として転出し、その後任として谷井俊仁(1960年生)が同日付で講師として着任した。なお檀上は現在京都女子大学教授として引き続き勤務している。新任の谷井の研究分野は明清時代の中国法制史、社会史である。論文には「乾隆時代の一広域犯罪事件と国家の対応 - 割辯案の社会史的素描」(『史林』70-6、1987)などがある。また翻訳書としてはフィリップ・A・キューン著、谷井俊仁・谷井陽子訳『中国近世の靈魂泥棒』(平凡社1996)がある。

富山大学は大学改革の一環として、平成5(1993)年4月1日より教養部を廃止し、4年一貫制教育を実施することとした。旧教養部の教官は関連の深い各学部配属することになり、気賀澤保規教授が人文学部東洋史コース担当教官に加わった。気賀澤(1943年生)は昭和57(1982)年5月1日付で仏教大学から富山大学教養部助教授として着任し、昭和63(1988)年4月1日に教授に昇任していた。気賀澤の研究分野は隋唐時代の中国史である。とりわけ兵役制度(府兵)や仏教思想からみた当時の民衆社会の研究である。その研究成果は気賀澤保規『府兵制の研究』(東洋史研究叢刊57 同朋舎出版1999)として出版された。そのほか著書として気賀澤保規『則天武后』(白帝社1995)がある。気賀澤は人文学部のなかで共同研究を組織し、研究課題「中国河北における刻経事業の総合研究 房山雲居寺石経を中心に」の代表者として、平成4~6年度の科学研究費補助金(一般研究B)を受けた。メンバーには気賀澤のほか、小谷、谷井(東洋史学)、中純夫

(中国思想) 藤本幸夫(朝鮮語学) 上野隆三、伊藤美重子(中国文学)が加わり、その研究成果として気賀澤保規編『中国仏教石経の研究 房山雲居寺石経を中心に』(京都大学学術出版会 1996)を出版した。

人文学部は教養部教官の約半数30人余を受け入れ、大きな組織改編をすることとなったが、東洋史コースについていえば、気賀澤は以前から人文学部に出講して東洋史演習などを担当し、専攻学生の指導にあっていたので、とくに大きな変化の印象はなかった。一方、小谷、谷井もまた従来から教養部に出講して一般教育の一部を担当していたので、教養教育のシステムが新しくなっても、やはりその仕事は残った。三人の教官が全学学生対象の教養原論「東洋の歴史と社会」を担当することになり、平均して教養教育の負担コマ数が減少したが、受講生が集中してひとつの教室に収容しきれないような事態が生じたりしている。

気賀澤は平成7(1995)年4月1日付で明治大学文学部教授として転出した。その後任として渋谷由里が平成8(1996)年4月1日付で大谷大学文学部(特別研修員)から講師として着任し、平成10(1998)年9月1日に助教授に昇任して現在に至っている。渋谷の研究分野は中国近現代史、とくに中国東北における張作霖政権を中心とした研究である。かつて富山大学には中国近現代史を専攻する教官に中村哲夫(1942年生)が在任していた。中村は昭和50(1975)年4月1日付で富山大学教養部講師として着任し、昭和52(1977)年10月1日付で助教授昇任した。昭和57(1982)年4月1日付で神戸学院大学教養部助教授に転出し、現在は同大学人文学部教授として勤務中である。中村の研究分野は孫文を中心とする中国近代史の研究であり、『近代中国社会史研究序説』(法律文化社1984)、『移情閣遺聞 孫文と呉錦堂』(阿吽社 1990)、『同盟の時代 中国同盟会の成立過程の研究』(人文書院1992)の著書がある。今また、渋谷の富山大学着任で中国近代史の研究図書資料がひきつづき充実してくると期待される。

谷井俊仁は平成9(1997)年4月1日付で三重大学人文学部助教授として転出した。その後任として同日付で徳永洋介(1960年生)が助教授として着任した。徳永の研究分野は宋元時代の法制と社会を対

象とする中国史である。徳永は着任以前、ながらく京都大学人文科学研究所の研究班「中国近世の法制と社会」のメンバーとして、『宋・遼・金・元史』『刑法志』の現代語訳注の作業に従事し、その共同成果を数多く刊行してきている。

以上述べてきたように、現在、小谷教授、徳永、渋谷助教授の三人が東洋史コースの担当として、それぞれの研究分野を中心としながら、研究教育に励んでいる。

次に東洋史コースの卒業生の動向について述べる。人文学部の創設以前では、文理学部文学科史学専攻の学生として日本史、東洋史、西洋史専攻の学生がひとまとまりになっていた。史学専攻の卒業生は昭和28(1953)年から昭和56(1981)年までの29年間に309人にのぼるが、そのなかの東洋史専攻生の数を正確に把握するのは困難である。人文学部になって、最初の東洋史コース卒業生(昭和56年3月)は6人である。その後、毎年8人前後の卒業生を送り出し、平成10(1998)年3月までの18年間に151人に達した。大学院修士課程が昭和61(1986)年4月に設置されて、東洋史専攻分野で平成9(1997)年3月までに7人の修了生を出した。そのなかには他大学出身者が2人含まれる。また富山大学東洋史の卒業生で他大学大学院に進学した者も過去に4人あった。現在(平成10年度)の大学院在籍者は2人、そのうち一人は中国からの留学生である。

次に人文学部東洋史コース卒業生の就職先について。一度、就職したあと職場を離れ、主婦として家庭にとどまっている者もかなりの数になるが、現在勤務する人たちの職種をみると、なかでも教師が16人と多い。大学、高専から高校、中学校、小学校と幅広いが、高校8人、中学校5人の順になる。ついで多いのは公務員12人、地元出身地の地方公務員として就職した者が大部分であり、国家公務員は1人である。この12人以外に郵便局に勤務する者が4人ある。その他の職種としては書店、出版印刷、図書館、医療福祉施設、コンピュータ会社、企業事務、新聞社、ハウス・メーカーなどが主たるものである。

人文学部東洋史コースの卒業生が99人に達した平成6(1994)年11月に東洋史同窓会を開催した。卒業生と在校生が人文学部の大教室に集い、懇親をはかるのが目的であり、以後毎年続けるということで、

正式名称は東洋史談話会となった。平成10(1998)年11月24日(日曜日)第5回東洋史談話会を竣工したばかりの人文学部校舎大教室で開催した。30人余の卒業生、十数人の在校生、教官3人、旧教官1人が参加し、午後2~5時までを総会とし、学部生、大学院生各一人の卒業、修士論文の準備報告、教官の講演、卒業生の活動報告などの集いを行い、その後場所を大学職員会館に移して懇親会を開催し、なごやかな雰囲気の中に閉会した。卒業生は年々増加し、先に述べたとおり平成10年度で151人に達し、今のところは案内状の発送と会員名簿の更新と新名簿の印刷程度の事務に止めている。訪れる卒業生の顔ぶれは年によっていれ変わり、回をかさねる間に多くの人が訪れる会になるだろうと思われる。幸い地元の卒業生が幹事となり、卒業生との連絡を密にしているので、今後も継続することになる。

東洋史コース カリキュラム編成

1年次には世界史序説(前期または後期)、東洋史基礎演習(前・後期)を開講している。前者で総合的な世界史の学び方、考え方を通じて既成の国境にとらわれない歴史観を育てる。後者は前期で中国史研究に必要な書誌学や古典に関する基礎知識を身につけると共に、初歩的な漢文を講読する。後期では中国史の各時代の中から受講者が好きな時代とテーマを選んで口頭報告と討論を行う。演習全体としては「中国史研究入門」と性格づけ、もとの史料から自分で考える重要性和歴史学における解釈の多様性を発見するのを目的としている。

2~4年次においては4年次の卒論指導を除いて年次ごとの必修科目はない。3年間で東洋史の概説・特殊講義・演習・実習の所定単位を取得する。選択必修として史学概論か史学史、東西交流史特殊講義か東アジア交流史特殊講義、日本史の概説・特殊講義・演習から1科目、西洋史の概説・特殊講義・演習から1科目を履修する。なお専門課程で世界史序説を履修することもできる。

専門課程では特に演習を重視している。3人の教官がそれぞれの専攻分野で重要な原典史料をとりあげ、学生が研究に必要な英語・漢文・現代中国語(および近代以降の文語文)の読解力向上を図りながら具体的な研究手法を学び、卒論に集約できる経

験を積む場としている。概説と特殊講義では、広い視野と新しい観点で整理された教官の歴史叙述を学生が聞きながら、演習での経験を反芻したり自分の歴史観を形成する機会にできるように各教官は心がけている。実習では、学生自身が旅行計画をたて、文献史料同様に重要な美術考古資料・碑刻・古文書などを見学し、具体的な地域や時代のイメージを提出し、学生がその時点での研究成果を確認するとともに、教官のアドバイスにより次の研究目標や計画をたてている。

卒論では学生が培った研究能力を、すべて発揮できるようにコースで指導している。まず学生自身が決めたテーマに沿って文献リストを作り、研究書や論文で得た知識をもとに構想を練り、口頭発表を反覆して問題点を絞り込む。次に論文構成を考えながら一次史料を読む。段階的作業をへて下書を重ね、提出する。

このように従来の歴史学の枠組みを超えて、世界史的視野をもつ人材を育成するの教コースの理念である。

東洋史コース カリキュラムの現状

1. 教育目標(計画)

従来の歴史学の枠組みを超えて、世界史的視野をもつ人材を育成すること

2. 授業の組み立て

<骨格>

1年次

基礎演習

世界史序説

2~4年次

史学概論or史学史 東西交流史特殊講義or東アジア交流史特殊講義

東洋史概説 日本史概説or特殊講義or演習

東洋史特殊講義 西洋史概説or特殊講義or演習

東洋史演習 (世界史序説) 東洋史実習

卒業研究 4年次

カリキュラム以外の活動...毎年1回、「東洋史談話会」を開催し、教官と学部4年生・院生の研究発表を行い、卒業生を招いて交流している。

<必修の内訳>

東洋史概説(4) 東洋史演習(16)

東洋史実習(1) 卒業研究(10)

特殊講義

自コース... 6 他コース... 8

横断的授業（講座共通授業）

史学概論or史学史（2）

東西交流史特殊講義or東アジア交流史特殊講義
（2）（世界史序説（2））

基礎演習（4）、世界史序説（2）は選択科目

3．各授業の位置づけ ...（ ）内は順に開講コマ数、開講形態、担当者（A C）

基礎演習（4．年間、B / C）...中国史研究入門。前期では中国史研究に必要な書誌学や古典に関する基礎知識を身に付け、初歩的な漢文を講読する。後期では中国史の各時代から受講者が好きな時代とテーマを選んで口答報告と討論を行う。もとの史料から自分で考える重要性和、歴史学における解釈の多様性を発見するのを目的とする。

世界史序説（2．半期、A）...総合的な世界史の学び方、考え方を通じて、既成の国境にとらわれない歴史観を育てる。

東洋史概説（4．年間、B / C）

東洋史特殊講義（6．年間4 集中2、A / B・非常勤）

広い視野と新しい観点で整理された教官の歴史叙述を学生が開きながら、演習での経験を反芻したり自分の歴史観を形成する機会にできるように各教官が心がけている。

東洋史演習（12．年間、2 × 2 × 3、A / B / C）

専門課程で最も重要な英語・漢文・現代中国語（および近代以降の文語文）の読解力向上を図りながら具体的な研究手法を学び、卒論に集約できる経験を積む場としている。

東洋史実習（1．半期、A / C合同）

学生自身が旅行計画をたて、文献史料同様に重要な美術考古資料・碑刻・古文書などを見学し、具体的な地域や時代のイメージを構築できるようにしている。

史学概論or史学史（2．隔年、1 / 3をC）

東西交流史特殊講義or東アジア交流史特殊講義
（2．半期、後者をC）

4．学生の受講実態の概略

特に演習には出席と予習を厳しく求めているので、演習室や図書館でよく勉強している。講義科目での受講態度・提出レポートの内容も良好である。

どの科目でも定期的に、または学期修了時にレポートを提出し、学生がその時点で研究成果を確認するとともに、教官のアドバイスにより次の目標と計画をたてている。

4年生に対しても就職活動に抵触しないように卒論演習での発表順に工夫をしているので、出席状況はよい。必要に応じて演習や講義に出席したり、発表時以外でも教官に卒論の相談に来る学生が多い。

4 西洋史コース

昭和24（1949）年の富山大学文理学部の発足とともに、西洋史コースは史学第2講座としてスタートした。担当は「ドイツ啓蒙思想」を研究する岡本基教授と、「スチュアート朝の政治思想」を研究する中臣恵暁講師であった。『富山大学十五年史』によれば、このころは、「西洋の文化・思想が講義・研究の主調であった」という。

後に史学第3講座と改まり、さらに西洋史学講座と改まった。昭和35（1960）年以降、西山勤二教授、中臣助教授の担当するところとなった。西山教授の研究には「ヴェーバーとランプレヒト」（『愛知学芸大学研究報告』1960）、「ランケとゲーテ」（『富山大学文理学部ドイツ文学紀要』1972）などがある。昭和42（1967）年に中臣助教授が教養部に転出した。

その後、昭和46（1971）年に大牟田章が助教授として赴任した。大牟田はヘレニズム史を専攻し、『アレクサンドロス大王』（清水書院、1976）、『アレクサンドロス大王』（平凡社、1978）などの著者や、フラウイウス・アッリアノス『アレクサンドロス東征記およびインド誌』（東海大学出版会、1996）などの翻訳がある。

西山勤二は昭和48（1973）年に、退官し、その後任に岡本明が同年に助教授として着任した。岡本は、フランス近代史を専攻し、「グラヴィリエ・セレクション史とジャク・ルー派」（『西洋史学』103号）、「貴族反動説の検討」（『史学研究』1984）などの論文があり、後にこれらの業績を基にして『ナポレオン体制への道』（ミネルヴァ書房、1992年）が出版された。

大牟田章は昭和51（1976）年に金沢大学文学部に転出し、後任として長沼忠兵衛が着任した。長沼はイギリス近代史を専攻し、「ピューリタニズムの展開に関

する考察 - レクチャシップ活用運動について」(『富山大学人文学部紀要』1983)、「名譽革命体制成立期における政治と宗教の相関 便宜的遵放防止法の命運を中心に」(『富山大学人文学部紀要』1980年)、「近代デモクラシーの思想」(『西洋の歴史(近現代編)』ミネルヴァ書房、1980年)などの論文がある。

この間、文理学部は改組により昭和52(1977)年に人文学部となった。

昭和57(1982)年には、岡本明が広島大学文学部に転出し、現在は教授として活躍中である。岡本には、『支配の文化史』(編著、ミネルヴァ書房、1997)などの著書もある。

翌年、昭和58(1983)年には服部良久が助教授として着任した。服部はドイツ中世史を専攻し、『西洋中世の秩序と多元性』(共編著、法律文化社、1994)、『西欧中世史』(共編著、ミネルヴァ書房、1995)などの著書がある。

昭和60(1985)年には河村貞枝が助教授として着任した。河村はイギリス女性史を専攻し、「イギリスフェミニズムの背景 ヴィクトリア期ガヴァネスの問題」(『思想』1974)、「ヴィクトリア時代イギリスの中流階級での女子教育」(『家と教育』早稲田大学出版部、1997)などの論文や、ブリッグズ『ヴィクトリア朝の人々』(共訳、ミネルヴァ書房、1988年)、バンクス『ヴィクトリア時代の女性たち』(創文社、1980)などの翻訳がある。

平成2(1990)年には、服部良久が京都大学文学部へ転出し、現在は教授として活躍中である。服部には、『ドイツ中世の領邦と貴族』(創文社、1988年)などの著書もある。

この年、服部の後任として根津由喜夫が着任した。根津はビザンツ史を専攻し、「アレクシオス一世の権力確立課程 軍幹部層の構成分析から」(『西洋史学』1992年)、「イサキオス一世とコンスタンティノス十世の治世をめぐって」(『史林』1997年)、「12世紀ビザンツ宮廷の政治文化 ラテン文化とヘレニズム趣味」(藤縄兼三編『ギリシャ文化の遺産』南窓社、1993)などの論文がある。

平成5(1993)年には、河村貞枝が京都府立大学文学部へ教授として転出した。河村は富山大学在任中貴重な女性史のコレクションを蒐集するなど、富山大学での女性史研究の礎を築いた。河村にはアリ

ス・レントン『歴史の中のガヴァネス』(高科書店、1998年)などの翻訳もある。

同年、河村の後任として東田雅博が着任した。東田はイギリス近代史専攻し、「ヴィクトリア時代における中国と日本のイメージ、1850 - 1900年」(『西洋史学』1990)、「文明化の使命」とアジア ヴィクトリア時代におけるインド、中国、日本のイメージ」(『思想』1992)などの論文や、『大英帝国のアジアイメージ』(ミネルヴァ書房、1996)、『図像の中の中国と日本 ヴィクトリア朝のオリент幻想』(山川出版社、1998)などの著書がある。

この年には、いわゆる大学改革の一環として教養部が廃止となった。大学の存立に関わる改革だったわけだが、ともかくその結果、教養部から吉田俊則が西洋史コースに加わることになった。吉田はロシア史を専攻し、「17世紀ロシアの通商政策と商人身分」(『ロシア史研究』1995)などの論文や、『講座スラブの世界3 - スラブの歴史』(共著、弘文堂、1995年)などの著書や、『図説世界文化地理大百科 - ロシア・ソ連史』(朝倉書店、1993)などの翻訳がある。

こうして吉田が加わることによって西洋史コースは、東田、吉田、根津の3人体制で教育を行うことになった。西洋史はカバーしなければならない範囲が広大であるだけに、スタッフが1人でも増えたことはまことに幸運であった。時代的には根津が古代、中世をカバーし、吉田が近世と中世の一部を、そして東田が近現代をカバーした。地域的には根津が地中海世界を、吉田が東欧世界を、そして東田が西欧世界をカバーすることになった。

この間、東洋史の明・清史を専攻する谷井俊仁助教授の演習に東田が出向き、谷井によってアヘン戦争に関する中国側の史料を講義されていた学生たちに東田がイギリス側の史料を講義するなどの実験的試みもなされたが、谷井が三重大学人文学部へ転出となったこともあり、こうした試みが歴史文化講座に根付くことはなかった。今にして思えばまことに残念なことであった。

西洋史コースでの3人体制は、まことに理想的で、大いに教育的成果を上げつつあったが、遺憾ながら吉田俊則が平成9(1997)年から学部の改組により、国際文化学科へ配置換えとなった。これは西洋史コー

スには大いなる打撃であったが、ともかくこの年から再度2人体制へと戻った。

西洋史を2人でカバーするというのは、考えてみれば無茶な話だが、地方大学の場合大抵の大学でも事情はさほど変わらないので、やむを得ないことであろう。しかし、ほんの4年間であったが3人体制を経験したものには、2人体制は正直いささか厳しいものであった。

さて、現実には2人で西洋史を切り盛りしなければならなかったのが、改めて、根津が時代的には古代中世、地域的には地中海世界と東欧世界、東田が近現代と西欧世界をカバーするという体制を確認した。こうして、ロシア史の場合には国際文化学科へ配置換えとなった吉田の協力を得るなどして、2人での指導体制を確立していった。

しかし、根津由喜夫が平成11(1999)年に金沢大学文学部へ助教授として転出することになった。根津は、富山大学在任中にビザンツ帝国史研究においてめざましい成果を挙げ、この一部は『ビザンツ幻影の世界帝国』(講談社、1999年)として結実した。

根津との分業体制は、着々と教育的効果を挙げつつあったが、ここにひとまず終わりを告げることになった。

同年、根津の後任として、小林功が講師として着任した。小林は、ビザンツ史専攻で「ミカエル三世と「従者団」 9世紀中盤ビザンツ帝国の皇帝と支配構造」(『史林』1995年)、「ニケファロス一世の対スラヴィニア移住政策 9世紀初頭のビザンツ帝国、バルカン半島、地中海」(『西洋史学』1996年)、「9世紀前半ビザンツにおける皇帝権力 テオフィロス政権を支えた人々」(『史林』1996年)などの論文がある。

したがって、現在は東田と小林の2人で西洋史コースの指導に当たっているわけだが、幸い小林が根津と同じビザンツ帝国史の専攻であったので、東田と根津との間で確立していた地域的・時間的分業体制をほそそのまま踏襲でき、比較的スムーズに指導体制が確立しつつある。

現在の西洋史コースは、近現代をカバーする東田と古代中世をカバーする小林とで25名の学部生と4名の院生を指導している。近年の歴史学の変貌ぶりは目を見張るものがある。そうした新しい歴史学は、

遺憾ながらほとんどが欧米の歴史学会を発信地としている。したがって、とりわけ西洋史での歴史像の見直しや、歴史方法論の革新が顕著である。西洋史コースでは、いち早くそうした新しい歴史像や、歴史方法論を学生の教育に生かすべく努力している。

富山大学人文学部同窓会編集になる1998年版『会員名簿』によれば、西洋史コースの昭和28(1953)年の第1回卒業生から平成9年の第45回卒業生までの累計卒業生は、正確な人数はわからないが、200名を超えることは確実なようである。この間は、国際的にも、国内的にも激動の時代であったが、多くの有為な人材を世に送り出したことになる。

印象的にいえば、西洋史コースの学生は国家、地方をとわず公務員志望の者が多いようである。また、教職の志望者もかつては多かったようである。公務員、教職以外では出版、書店関係が多いようである。また、富山大学のみでなく、他大学の大学院で学んだもの、学びつつあるものもいる。いずれ、どこかの大学に職を得ることを期待したい。

卒業生との連絡はあまり密ではないが、学年によっては頻繁に同窓会を開き、親睦を深めている学年もある。多くの卒業生を輩出しているのみならず、他大学にも多くの優秀な研究者を送り出していることを考えると、このあたりで、50周年という節目でもあり、西洋史コースの学生と教官の一大同窓会を計画してもよいかもしい。

西洋史コース カリキュラムの現状

1. 教育目標

木を見て森を見ない歴史学ではなく、木を見つつも森を見ることを忘れない歴史学を学ぶことでグローバルな問題に対応できる力を持つ学生が育つことを期待している。

2. 授業の組立

骨格

1年次：基礎演習、世界史序説

2～4年次：西洋史概説、西洋史特殊講義、西洋史演習(1、2、4)、西洋史実習
 史学概論or史学史、東西交流史特殊講義or東アジア交流史特殊講義
 日本史概説or特殊講義or演習
 東洋史概説or特殊講義or演習

4 年次：西洋史演習（3） 卒業研究

必修の内訳

西洋史概説（4）

西洋史特殊講義（6）

西洋史演習（18）

西洋史実習（1）

卒業研究（10）

他コース概説・特殊講義・演習（8）

講座共通授業

史学概論or史学史（2）

東西交流史特殊講義or東アジア交流史特殊講義（2）

3．各授業の位置づけ

基礎演習：西洋史への誘いを目的とするが、同時にテキストの読み方、不明な点の調べ方、文章のまとめ方なども指導する。

西洋史概説：西洋の古代中世史と近現代史の大きな流れを概観する。

西洋史特殊講義：各教官（非常勤を含む）の専門分野でオリジナルな歴史解釈・歴史像を提示する。学生は講義を聴くことで史料の操作方法、問題の組立方、論の展開の仕方等を学ぶことになる。

西洋史演習：基本的には卒論作成のための力を付ける場であるが、同時に西洋史は新しい歴史学がまず産声をあげるところなので、最新の歴史学の成果を学ぶ場でもある。そうすることで、学生が鋭い時代感覚を身につけることも期待している。

西洋史実習：ヴィジュアルな史料の可能性を探ることで、文献資料のみに依拠する文献史学の限界を克服することを目的とする。

卒業研究：西洋史演習（3）において学生が選んだテーマによって口頭発表し、そのときに教官から受けたアドバイスを基に構想を練り直し、10月ないしは11月の中間報告会で再度口頭発表する。この場での質疑応答を基に学生は最終的に卒論の構想を固め、論文の作成に取りかかる。

4．学生を受講実態の概略

講義科目についてはよくわからない。演習については原則として毎回出席するよう求めているが、遠方から通う学生については必ずしも出席はよくない。必ずしも演習の勉強＝予習のためだけではなさそうだが、演習室はよく利用されている。演習ではレポートの提出を義務づけているので、学生の勉学

状況をよく把握できる。4年生については就職が決まるまで演習に出てこられない学生もいる。

5 文化構造論コース

昭和52（1977）年、文理学部の改組による人文学部の創設に伴って、新たに比較文化コースが設置された。これが文化構造論コースの前身である。当初は教官定員がつかなかったため、人文学科の教官が共同で学生の指導に当たった。コースの設置に際しては、文部省の認可を得るための様々な配慮もあったことと思われるが、その動機はともかく、こうして人文諸科学を横断する学際的な総合コースが誕生したことは、その後の大学改革のあゆみに照らして、単にコースがひとつ増えたという以上の意義を担うものであったといえよう。とくに自分のコースと掛け持ちで比較文化も担当されていた先生方の負担は、決して軽いものではなかっただろうが、学部の発展のために、このような協力体制が組めたということは、コースが増えた分却って全体的なまとまりに欠けるうらみのある学部の現状を思うとき、いっそう感慨深いものがある。

この新コースの誕生に対するその後の教官サイドの評価には、後述のように必ずしも肯定的でないものもあるが、少なくとも学生たちは、これを喜び迎えたようであった。たとえば、「富山大学人文学部卒業生数調」によると、初めて卒業生を出した昭和56（1981）年には、比較文化の卒業生が13人と、人文学科の中では最も多くを数え、平成9（1997）年までの文化構造論を併せた卒業生の数170人も、人文学科ではトップの位置を占めている。それは、教官たちの努力もさることながら、新コースの性格や仕組みの中に、学生たちの新たな要求や期待を満たすものがあったからに違いない。

こうした状況の下で、コース専任教官の配属がいよいよ急がれる中、昭和56（1981）年、ついに学科目増設の概算要求が認められ、横井清、松島英子の2人の教官が相次いで赴任して来て、コース名も文化構造論と改められた。横井は日本の中世文化史に関する数々の名著と、その多彩な活動によってあまねく世に知られ、松島は、古代メソポタミアの美術史に新境地を開いた気鋭の学者として注目を集めて

おり、この魅力的な名を戴いた新コースを立ち上げるには、まことにふさわしい人材であったといえる。

しかし、実際に担当する授業科目の解説を読んだとき、2人はおそらく驚愕したのではないだろうか。それによると「文化構造論」は文化の構造と意味、その成立の根源一般（なんのこっちゃ）および文化構造考察の方法についての学習を、「文化構造研究」は哲学、文化人類学、言語学の面から多様な文化の構造と意味、その成立の根源等の学習を、

「文化基礎演習」は自然と文化の関係、文化の特徴を人文地理学、文化人類学の見地から学生自身に解明させることを、「地域文化特殊講義」は日本・東洋・西洋の文化現象の特色とその歴史的交流、推移という諸相を哲学史、歴史学、考古学の見地から学際的・総合的に把握させることを、「地域文化演習」は日本・東洋・西洋の文化現象の特色とその歴史的交流、推移という諸相を哲学史、歴史学、考古学の見地から学際的・総合的に学生自身に解明させることを目的とする」というものである。まさに、これを書いた本人に、「お前がやれるならやってみろ」といいたくなる代物で、お二人は怒るより前に、笑いがこみ上げてきたに違いない。

こうして新任教官のお二人は、そもそも「文化構造論とは何ぞや」という問いに、自ら答えるところから始めなければならなかったわけだが、試みに、昭和62年度版の「学部案内」には、文化構造論コースの説明として次のように書かれている。

「文化構造論」という学問領域は、人間にたとえると、まだよちよち歩きの“赤ん坊”みたいなもので、大学院レベルで設けられている例が一、二あるほかは、学部レベルではまず皆無といえましょう。だから、教官たちは“学生とともに育成していく、新しい学問分野だ”と思っていますし、他のコースにもまして、学習熱心で、心に弾みのある学生が来てくれることを念願しています。

本コースでは、既成の専門分野での研究方法や研究成果に学びながら、しかも、既成の学問分野でのやり方とは違ったやり方で、様々な文化現象を取り扱い、その仕組みを探求するのを目標としています。だが、研究の対象は幅広く無限であり、問題に迫る方法・筋道もまた極めて多様。ですから、毎年、学生の申し出る「卒業論文題目」を眺

めていると、教官のほうが眩暈を覚えるほどに多彩です。というと、いかにも“自由にやりたいことをやって卒業できるんだな”と思われがちですが、オットット…、そうは問屋が卸しません。幅広さ、自由さかげんのなかで「自分自身の学習課題」を見つけ、しかもそれを持続していくことは、とても難しい。“行きは良い良い、帰りは怖い…の文構さん”といったところでしょうか。わざわざ諸君を怖がらせるために言うのではなく、そういうことに耐えて、自分の内面の世界をいっそう豊かなものにしていこうとする学生を待望しているからこそ言うのです。

これは横井が書いたものと思われるが、横井も松島も、こうした説明で果たして自分自身を納得させていたかどうかは分からない。しかし、いまま文構の演習室に保管されている個性豊かで力作ぞろいの卒業論文の数々を見ると、お二人の努力が十分に報われているのを窺い知ることができる。

横井に関して言えば、彼はいわゆる部落差別の問題を学問の中核にすえることで、中世文化史の闇の部分に切り裂き、民衆文化史という新たな視座を確立した人として知られるが、後年の彼の著『光あるうちに 中世文化と部落問題を追って』（阿吽社、1990）によれば、来富2年目に学部の授業で部落問題を取り上げた彼は、引き続き教養の授業でもこの問題を学生たちに投げかけている。「富山には差別問題は存在しない」という「常識」を打ち破る彼の授業は、社会的にも様々な波紋を呼び起こしたようだが、何よりも自らの「内なる差別」に向き合おうとする彼の姿勢こそは、「自己省察の学」としての文化構造論に不可欠のものであり、学生たちも、そのことを身をもって体得したに違いない。

彼の社会的な「弱者」に向けられた関心は、その教育者としての姿勢をも貫くものであり、その点は松島にも共通するものであった。横井が富大を去っていくとき小澤に残していったファイルの一つに、震える手で書かれたと思われる何通もの手紙を収めたものがある。横井はそれについては何も言わなかったが、松島によれば、それは比較文化時代、学部移行後程なく不治の難病を患い、学業が続けられなくなった人のもので、しばしば見舞いに行った2人

やコースの学生たちに、当人から書き送ってきたものだという。小澤は、その文面から、横井や松島の思いやりがいかに深いものであり、それに対する本人の感謝の気持ちがいかに並々ならぬものであったかを知ることができた。このことは単に1コースの足跡を伝えるだけではなく、いま、大学の再編・統合問題を議論する際にも、我々にとって最も大切な事柄は何なのかということ、改めて思い起こさせてくれているのではなからうか。ちなみに、横井に次いで松島が富大を去っていくとき、後事を託された小澤と岩井は、その後も、本人を訪ねたり、授業のテープを送ったりしていたが、残念ながら、数年後に、その短い生涯を閉じた。

横井にはそのほかにも「横井伝説」とも「横井神話」とも呼ばれる数々の逸話があって、たとえば、演習の報告がいい加減だったりすると、にっこり笑いながら黙ってそのレジュメを破って紙吹雪にしたとか、大勢の授業で私語がうるさいと、突然ホイッスルを吹いて学生たちを吃驚させ、そのあと「発車オーライ」という落ちをつけたとかいった話が今に伝えられているが、平成元(1989)年、彼は7年間に及ぶ富大での生活にピリオドを打って、桃山大学文学部に転任して行った。

横井の後には、同じく日本史畑だが、近代の思想史や宗教史を専攻する小澤浩が着任した。業績にはさして誇れるものもないが、民衆文化、生活文化への関心という点では横井と共通するものがあり、「何でもあり」の文構には向いていたと言えるかもしれない。小澤も看板の魅力に惹かれてきてはみたものの、いざとなると、何をどうしていいかわからず、松島を質問攻めにして困らせた。松島の答えはいつも「先生のお好きなようにやればいいのです」という突き放したものだだったが、それこそは早く小澤をその気にさせるための彼女の思いやりには違いなかった。というのは、そのころすでに、彼女もまた東京三鷹のアジア・アフリカ文化財団への転出を考えていたからである。

着任まもなくそのことを告げられた小澤は、短い間の付き合いながら、またとないパートナーとみなしていた人を失うことになり、その衝撃も覚めやらぬまま、なれない後任人事に頭を痛めなければならなかった。しかし、やがて選ばれた後任の岩井瑞枝

の業績とその人格に接したとき、小澤はホッと安堵の胸をなでおろした。岩井も松島と同じくパリ大学で博士号を取得した英才であり、その専攻とするルネッサンス期の図像学も、文化構造論にはうってつけのものと思われたからである。着任後しばらくして、富山の印象を聞いたら、「富山の空の色はパリの空の色と同じなんですね」といわれ、パリの空の色を知らない小澤は、返事に窮した。また、彼女の専門分野の話聞かせてもらっているとき、いつもはきわめて控えめな彼女が「私って第一人者なのです」というので、あっけにとられていると、「だってそこをやっているのは私一人しかいないから」といって、嬉しそうに笑った。そういう茶目っ気が、学生たちに物真似までされるようになった岩井の人気の秘密なのであろう。

閑話休題。このようにして小澤と岩井による文構の第2ラウンドが開始されたわけだが、そこでの2人の悩みは、やはり、横井らと同じく、「文化構造論とは何ぞや」ということであり、それを学生たちにどう理解させるかということであった。その折も折、小澤は、コースの学生たちから思いがけないことを訴えられた。彼ら彼女らによると、取っていた他コースの授業で、その先生が文化構造論について説き及び、それが学問的にいかに信用のならない胡散臭いものであるか、ということを目と向かって言われて、とても悔しく、悲しかったというのである。その、教育者としての配慮を欠いた発言に対し、小澤はすぐさま抗議の意思を伝えたが、学生を動揺させないためには、いよいよ文化構造論の何たるかについて、明確にしていく必要に迫られた。そうやって試行錯誤を重ねつつ、暫定的なものとして、平成2年度の学部案内に掲載したのが、次の文章である。

もし君が、コースの先輩を捕まえて「文化構造論って何？」と聞いたとする。すると多分答えはこうだ。「サア、何だろう。マ、付き合ってみれば分かるさ」。何のことはない、彼らは我々教師の言い草をそのまま真似ているのである。これはただの冗談ではない。正直言って我々にも正解の持ち合わせがないのだ。しかし、君の問いがもし「あなたは何をやっているの？」だったとしたら、おそらく彼らはとたんに目を輝かせて、延々と自分の取り組んでいるテーマについて講釈を始めるこ

とだろう。

つまり、彼らの多くは、まず何らかの文化事象に関心を持つ。そして次に学問分野のことを考える。すると「学？ うーん、近いけどちょっと違うな」「××学？ それもあるけど、×学とも重なるんだよね」というわけで、一見何でもできそうなこのコースに目をつける。そういう既存の学問のどれかでは収まりがつかない、出来ればどんな方法でも駆使してトータルに対象に迫ってみたいという、欲張ったハミ出し者、ハンパ者の、これはいわば掃き溜めコースなのだ。(中略)

というと、いかにもこのコースは、やりたいことが何でも自由に出来るパラダイスのように聞こえるかもしれない。が、どっこいそうは問屋が卸さない。まずは、教師の方がいくら専門の殻を破るといっても、そこには自ずから限界がある。だから教師に頼ろうなどという見方は、初めから捨ててかからなければならない。もちろん、その点をカバーするために、授業では学内外の優れた先生方の協力を得て、多彩なメニューが取り揃えてある。しかし、何をどのように食べるかは、まったく君たちの自由にゆだねられている。しかも、名物の卒論演習ともなると、多少ともモノを知っている教師や、知らないことを強みと心得ているクラスメートから思いもかけない質問や意見が飛んできて、嫌でも孤独な戦いを凌いでいかなければならない。そのとき初めて君たちは、「自由」というものの厳しさ、「わが道を行く」事の難しさを、たっぷりと味わうことになるだろう。

しかし、そのようにしてこそ、逞しい雑草は伸びていく。そして、独りで知の冒険に旅立つことを厭わない、そうした雑民たちのためにこそ、雑学としてのわが文化構造論の門は開かれているのだといえよう。

このなかでは、学外からの協力者のことに触れているが、事実、我々は、横井の時代から、集中講義を通して最高の「知」に触れさせることを学生への最大のサービスと心得て、当代一流の学者・研究者を招くことに意を用いてきた。たとえば、神話学の吉田敦彦、社会学の阿部謹也、上野千鶴子、宗教学の山折哲雄、島園進、文化人類学の波平恵美子、民

俗学の宮田登、茶道史の熊倉功夫、美術史の坂本満、若桑みどりなどは、そのホンの一例に過ぎない。これらの大半はそれぞれの交友関係に支えられているが、上野千鶴子については、面識もない小澤が、臆面もなく長々しい手紙を書いて実現したものであった。そのほか、平成2年度からは、学生たちを生き文化に触れさせようと、実習旅行などもはじめて、教師の失敗談なども含む忘れがたい思い出を刻んだが、紙幅も尽きているので先を急ぐことにする。

平成5(1993)年、大学設置基準の大綱化に伴う大学改革で、廃止された教養部から新たに、談話分析の専門家で、英語教育にも熱意を傾けていた湯川純幸を迎えた。裏話になるが、このとき人文の窓口として教養部との折衝に当たっていた小澤に、よく食って掛っていたのが他ならぬ湯川だったので、彼の志願は、小澤にとってはやや意外なものであった。しかし、それだけに、小澤は湯川の真情を評価せずにはいられなかった。その後の文構のあゆみを考えると、このときの湯川の決断なかりせば、との思いを禁じえない。

平成7(1995)年、小澤がはからずも学部長に選出されて、文構には新たな転機が訪れた。折からの学部改組を成功させるため、小澤が立場上、新コースの国際文化論に移籍せざるを得なくなったからである。このとき岩井は、コースの将来を心配して、小澤に翻意を迫ったが、小澤とて、それは願ってしたことではなかった。しかし、それによって多大の迷惑をかけたお二人と学生たちに、小澤はただ詫げる他はない。

こうして、文構はいま、湯川、岩井のコンビによって、第3ラウンドの新たな発展を目指しているが、「文化構造論とは何ぞや」という問いは、これからも消えてなくなることはないだろう。しかしそれこそは、文構の限りない変革をささえるエネルギーの源となっていくのではなからうか。

おそらく、文構に対する誤解や曲解は、これからもなくなることはないだろう。しかし、学生たちが理解してしてくれる限り何も恐れることはない。

文構の卒業生たちは、いま様々な分野で活躍しているが、そのなかには社会的な弱者の救済に身を挺しているものも少なくない。それこそは文構の誇りであると、小澤は考えている。

6 言語学コース

旧文学部から分離して人文学部が発足したのは昭和52(1977)年のことである。人文学部では16の専門コースが設置されることとなったが、最初からすべてのコースがそろっていたのではなく、年次進行により昭和55年度までの間に順次設置が進められていった。

言語学コースが発足したのはこの年の最後の昭和55(1980)年のことであった。この年の4月、北海道大学文学部から浅井亨(1930年生)が、東京大学文学部から鈴木敏昭(1948年生)が赴任してきた。浅井はアイヌ語の専門家であると同時に言語の数量的分析研究にもたずさわり、また言語障害の分野にも造詣が深かった。浅井は言語学者として活躍する一方で、医師でもあり、病院勤務の経歴を持っていた。鈴木は専門分野は心理言語学で、幼児の言語習得の研究に従事し、その後、多義とその背後にある認知システムの研究へとテーマが広がっていった。

この昭和55(1980)年から翌昭和56(1981)年にかけての冬の歴史に残る大雪に見まわられた。いわゆる56豪雪である。愛知県生まれの鈴木は本当の大雪というものを知らず、毎日降り続く雪を無邪気に珍しがっていた。岐阜県神岡の出身で北海道での生活が長い浅井は、雪とのつきあいにかけてはベテランであった。浅井は、車が雪の深みにはまった時の脱出方法など、雪とつきあうノウハウの多くを鈴木に伝授した。

言語学コースが発足したといっても学生が実際に進級してくるのは10月のことで、それまでの授業はもっぱら他コースの学生が受講していた。10月になると、11人の学生が進級してきて、言語学コースが実質的なスタートを切った。この11名の学生の中には留年をしながら言語学コースの発足を持っていた学生も含まれていた。

発足の当初は、机、椅子など最小限必要な備品を除けば、ないものづくしの状態で、ともかくなるべく早く教育や研究に必要なものをそろえなければならなかった。幸いなことに、言語学関係の基本図書は、古いものが中心であったが、図書館の書庫でかなり見つけることができた。書架などの備品は、当時物置きとして使われていた球場沿いの木造校舎のなかの廃物から見えそうなものを調達してきた。学

生といっしょに何度も物品を運び込んで、なんとか少しずつ教育研究の条件が整ってきた。

そうした古物の中で場違いなほど先端的な機器は、音声合成分析用のコンピュータであった。このコンピュータは今で言うパソコン(当時はマイコンと呼ぶのがふつうであった)で、CP/Uは8ビット、記憶装置は8インチFD、OSはCP/Mという仕様であった。音声合成のためにはあらかじめ組み込まれたソフトを使えばいいが、それ以外の目的で使うときにはGASICでプログラムを書く必要があった。

このコンピュータは、20年後の現在から見ればおもちゃのようなレベルの能力(特にその高価な価格に比した場合)でしかないが、音声学の実習などに大いに威力を発揮した。ただ、困ったのはその置き場所であった。コンピュータ本体が大きな事務机ほどもある上、教室の勉強机ほどのプリンタがつながっていた。そのためにこのコンピュータに演習室のかなりのスペースを取られることになった。ここには「遅れてきた」言語学コースの窮状がからんでいた。というのは、当時4つあった実験講座のうち、言語学が最後に設置されたという事情からか、他の3コースのような実験室が言語学コースには用意されておらず、いろいろ訴えたが、すぐには部屋を割り当ててもらうことはできなかった。この問題は、有害といわれる塵を放出するサウンド・スペクトログラムを導入するにいたって一層深刻になるが、幸いなことに1階に1スパンの1部屋を得ることができて一応の前進をみた。その後、3階にもう一つ1スパンの部屋を確保することができて、やっと他の実験講座なみの実験室を得るにいった。

昭和63(1988)年に語学文学棟の新築がなあって、語学文学部の諸コースが新校舎に移転した。その後、10年間にわたって人文学部は二つに分断された状態に置かれることになる。このことは学部の運営に様々な支障や不便をもたらすことになったが、言語学コースもその影響を免れることはできなかった。言語学は、国語学、朝鮮語学、英語学などとの関係が深く、発足以来、教育や研究の両面で活発な交流が行われていた。特に、隣同士にあった国語国文コースとの関係は密接で、学生や教官は自由に互いのコースの部屋に出入りしていた。昭和59(1984)年8月

に、同コースの都竹通年雄教授がご不幸にあわれた時には、言語学コースの学生たちは、その訃報に接して、国道41号を猛烈なスピードで飛ばして、岐阜県萩原町での葬儀に急遽駆けつけた。そのようなつながらりも、移転の後は、どうしても下火にならざるをえなかった。

平成5(1993)年の教養部廃止に伴って、旧教養部の教員は各学部に分属した。この時、言語学コースは井上逸兵(1961年生)を迎えることになった。井上の専門は会話の相互行為分析を中心にした社会言語学で、海外の最新の研究動向にも詳しく、その関心は異文化間コミュニケーションから語用論や記号学にまで及んだ。言語学がカバーする領域は、膨大な数の言語の共時的・通時的の研究から心理学、社会学、医学、工学などと境を接する応用的研究まで大変多岐にわたる。これらの広い領域の内、多くの大学の言語学科は少数言語を含めた個別言語の専門家を中心に組織されている。その点、新たに井上を加えた当言語学コースは、応用言語学的側面に重点をおいた特色ある構成をもつこととなった。井上逸平は平成6(1994)年に信州大学人文学部助教授として転出した。その後任として、同年11月に呉人(一ノ瀬)恵(1957年生)が北海道大学文学部から着任した。呉人の研究分野は、モンゴル語学、コリヤーク語学、および北東アジア言語に関する言語類型論で、言語と文化との関係についての言語人類学的な関心を保ちつつ、現地でフィールド調査に熱心に取り組んでいる。

平成8(1996)年3月に浅井教授が停年退官した。3月16日には先生の退官を記念する催しが氷見海岸の雨晴ハイツで泊りがけで行われた。この催しには卒業生、在校生の約半数にあたる70人が参加した。参加者たちは、言語学コースの「伝説」となった朝日の廃校での牛の丸焼き大会など、先生をめぐるなつかしい思い出を夜遅くまで語り合った。この催しに先立つ5年前には、先生の還暦を祝う会が宇奈月温泉で開かれて、やはり多くの卒業生、在校生が集まった。浅井先生の指導は、学生に自分の頭で考えさせることを主体におくもので、論理的な首尾一貫性が強く求められた。そのことばは挑発的であってもウィットに富み、決して威圧的になることはなかった。先生はいつも多忙であったが、学生からの

様々な相談には快く応じ、時間とは無関係に対応がつづくこともよくあった。奥田にあった先生のアパートを昼夜の別なく訪れた学生も少なくなかったが、そのアパートに行くと、近所のおでんや「小森」で夜明けを迎えるはめになることも珍しくなかった。退官後、浅井先生は特別養護老人ホーム「常楽園」の理事長を勤め、やはり忙しい日々を過ごしておられる。

浅井教授の後任として、平成8(1996)年4月、東京大学人文科学研究科博士課程に在籍していた加藤重広(1964年生)が着任した。加藤の研究領域は、日本語統語論および語用論を中心としながら、そこからさらに一般言語理論や言語学史にまで広がっている。言語学コースに学ぶ学生の研究テーマは言語現象の多様性に対応して多岐にわたっているが、どうしても、自分にとって一番身近で、最もよく知っている言語である日本語の問題に取り組む学生が多数を占めることになる。日本語を広い視野の中でとらえようとする研究スタンスを背景にして、加藤はこれらの学生の精力的な指導にあたっている。

インターネットで富山大学のホームページにアクセスすると、そこから言語学コースのホームページにたどり着くことができる。このホームページは加藤の努力によって支えられているものであるが、そこを訪れれば言語学コースの近況を知ることができる。

昭和58(1983)年に最初の卒業生7名を送り出して以来、平成11(1999)年までの18年間に言語学コースが送り出した卒業生の数は153人にのぼる。その内訳は男女比で見れば、男性が42人、女性が111人である。また、卒業生の中に外国からの留学生が3人含まれている。研究生などのかたちで短期に在籍した学生のほとんどは外国人留学生であるが、その数は10人を超える、その内の3人は大学院に進学している。

人文科学研究科(大学院修士課程)が設置されたのは昭和61(1986)年のことであるが、平成11(1999)年3月までの間に言語学専攻分野を修了したのは11人である。その内、4人は当言語学コースの卒業生で、7人は他大学の出身者である。11人の修了生の内、6人が他大学の博士課程に進学した。その中の一人である深澤のぞみは金沢大学で博士号を取得したのち、平成11(1999)年から富山大学留

学生センター(助教授)に勤務している。

平成11(1999)年9月1日現在、言語学コースに在籍している学生は40人で、その内訳は、4年生11人、3年生14人、2年生12人、大学院生2人である。その中に外国人留学生が3人含まれている。

言語学コース カリキュラムの現状

1. 教育目標

「ことば」を、研究対象として客観的にかつ科学的にとらえるための基本的素養と分析能力を身につけることを目指す。

2. 授業の組み立ての骨格

2.1. 授業の組み立て

<1年次>

行動文化入門/行動文化特殊講義

<2~3年次>

言語学概論/音声学/言語学実験実習/言語学演習/言語学特殊講義/個別言語論/行動文化研究法

<4年次>

言語学概論/音声学/言語学実験実習/言語学演習/言語学特殊講義/個別言語論/行動文化研究法/卒業研究

2.2. 必修の内訳

言語学概論(4)/音声学(4)/言語学実験実習(2)/言語学演習(8)/言語学特殊講義(6)/個別言語論(2)

2.3. 各授業科目開講コマ数・開講形態

各授業の分担は年度ごとに話し合って決め、特に決まったローテーションなどはない。以下は、平成12年度のコマ数ならびに開講形態、担当者の一覧である。

言語学概論	前・後	2コマ(呉人)
音声学	前・後	2コマ(呉人)
言語学実験実習	前	1コマ(鈴木)
言語学演習	前・後	2コマ(加藤)
	前・後	2コマ
		(鈴木・呉人・加藤)

言語学特殊講義	前	1コマ(加藤)
	前・後	2コマ*
	前	1コマ*

行動文化特殊講義	前	1コマ*
----------	---	------

(注)*は非常勤

2.4. コース横断的授業(行動文化講座共通)

行動文化入門/行動文化研究法/行動文化特殊講義

3. 各授業の位置付けと受講実態

3.1. 位置付け

行動文化入門:

1年次に4コース共通で行う入門的授業、言語学コースとしては、言語学への関心を促すことを目的とする。

言語学概論:

「ことば」の研究に対する幅広い基本的素養を身につけ、各人の研究の基礎作りをする。

言語学演習:

1)各教官がテーマを決め、主に発表形式で授業を行う。

2)3人の教官共同の演習は、学生が順次自らの研究テーマに沿って研究発表する。

言語学実験実習:

言語データ処理の手法を習得させるため、基礎的なコンピュータ・リテラシーとともにデータ処理ソフトや音声分析ソフトの使用を指導する。

言語学特殊講義:

教官がそれぞれの専門分野に即したテーマで講義を行う。

個別言語論:

個別言語を取り上げ、その構造的特徴を音声、形態、統語、意味などの側面から具体的に考察する。

行動文化研究法:

統計学の基礎、特にデータ解析のための統計的方法などについて修得する。

行動文化特殊講義:

言語学では特に、言語学プロパーな分野以外の社会言語学、心理言語学、語用論といった分野の授業をこれに当て、言語学に対する幅広い視野を養うことを目的とする。

3.2. 受講実態

言語学コースでは、期末試験以外に出席を重視することもあり、出席率はおおむね良好である。ただし、どの学年にも恒常的に出席率の悪い学生が少数ながら散見される。

4. その他

カリキュラム以外の授業として、毎年秋に卒論合宿を行う。これには4年生のみならず、2、3年生も参加する。

7 心理学コース

人文学部心理学コースは、富山大学大学改革の一環である人文学部改組に伴い、平成5（1993）年4月1日に創設された。教官スタッフは梅村智恵子および海老原直邦の2名で、両名とも平成5年3月31日までは富山大学教養部に所属し、主に一般教育の心理学などを担当していたが、大学改革による教養部廃止と同時に、人文学部に配属され、新設された心理学コースを担当することになったものである。平成9（1997）年4月には大学院修士課程で心理学研究分野を専攻する学生の受け入れも開始され、平成10年度には学部から大学院修士課程までの心理学専攻の教育システムが完成したことになり、この体制が現在まで続いている。

教官の研究分野は、梅村（教授）が社会心理、言語心理、女性学など、海老原（教授）が認知心理、音楽心理・音楽療法、無意識過程などである。授業での開設科目は心理学概論、心理学実験、心理学研究法、心理検査法、心理統計法、精神医学、心理学特殊講義（種々）、心理学演習（種々）などとなり、これらの授業については学内外の非常勤講師による協力も仰いでいる。

心理学コース最初の卒業生（平成9年3月）は7名であったが、その後は毎年10～13名の卒業生を送り出しており、平成11（1999）年3月までの3年間で卒業生総数32名に達した。平成11年5月現在で、心理学コースの学部在籍者数は39名（うち1名は3年次編入生）、大学院心理学研究分野の在籍者数は7名である。

心理学コースへの3年次編入学生の受け入れが平成11年度から開始され、11年度に1名の編入学生があった。編入生の出身は、国立工業高等専門学校であった。

学部卒業生および大学院修了者の就職先は、国家および地方公務員、精神科病院、印刷・広告関連企業、ソフトウェア会社、通信関連企業など、様々で

あるが、大学院の修了者は（修了予定者も含め）、公務員心理職や精神科心理検査士など、心理学専門家としての職種に就くケースが多くなっている。

以上、人文学部の中ではまだ歴史の浅い心理学コースであるが、その沿革ないし概要を簡単に紹介した。

心理学コース カリキュラムの現状

1. 教育目標（計画）

心理学コースでは、「心のはたらきと行動の科学」としての現代心理学の理論や方法を学び、科学的・実証的な心理学研究を適切に遂行するための基礎能力を身につけることを主な教育目標としている。したがって教育の内容も、心理学における科学的な研究技法と心理学各分野の基礎知識を修得することに重点をおいたものとなっている。

2. 授業の組立の骨格

授業科目の組立

<1年次> 心理学概論・行動文化入門（心理学入門）

<2年次> 心理学実験・行動文化研究法（統計法）・心理学特殊講義・心理学演習

<3年次> 心理学実験・心理学研究法・心理学特殊講義・心理学演習

<4年次> 卒業研究・心理学特殊講義（自由単位）心理学演習（自由単位）

必修の内訳

概論（4）、実験（8）、研究法（2）、演習（6）、特殊講義（8）、卒業研究（10）、計38単位

授業科目開講コマ数、および開講形態

<前学期> 実験2コマ（計8時間）・演習（含研究法）3コマ・講義（含概論）5コマ

[専任教官6コマ、非常勤講師4コマ（含集中）担当]

<後学期> 実験2コマ（計8時間）・演習3コマ・講義（含概論）4コマ

[専任教官7コマ、非常勤講師2コマ担当]

コース横断的授業

行動文化入門と行動文化研究法を講座共通の授業として開設。

3. 各授業の位置づけ、および学生の受講の実態

<1年次>

・心理学概論（通年。心理学の基礎的概念、理論、

方法の理解) 必修科目。心理学コースに進学希望の学生のほとんどが1年次に履修している。

- ・行動文化入門(心理学入門を含む。行動文化講座共通授業) 心理学コースへの進学希望者はほとんど履修。

< 2年次 >

- ・心理学実験(通年。実験、検査、調査、データ処理、パソコン等の基礎技法の習得) 必修科目。2年生全員が履修。
- ・行動文化研究法(前期。統計法の基礎。講座共通授業) 必修相当科目。全員履修。
- ・心理学特殊講義(心理学各分野。心的活動や行動を多面的に考察、理解)
- ・心理学演習(心理学各分野での方法の理解、外書講読、心理学的洞察力の養成など。)

< 3年次 >

- ・心理学実験(通年。受講者各自が研究テーマを決め、実験や調査を実施。研究論文を作成し、卒業研究への準備とする。) 必修。3年生全員履修。
- ・心理学研究法(前期。より高度の研究技法の習得。実験、実習あり。) 必修。3年生全員履修。
- ・心理学特殊講義、心理学演習(2年次と同様。演習では心理検査法の実習など実施。)

< 4年次 >

- ・卒業研究(学生各自が自由にテーマを決定することになるが、結果的には教官の専門分野に関連のあるテーマを選択することが多い。4年生全員に加えて、2~3年生および大学院生も参加する卒論発表会を毎年行っている。)
- ・心理学特殊講義(自由単位) 心理学演習(自由単位)

8 社会学コース

平成5(1993)年4月1日に教養部が廃止されたのに伴い、同部の教授だった中河伸俊(1951年生まれ)が人文学部に配属された。また、同日付けで、大阪大学人間科学部の助手だった佐藤裕(1963年生まれ)が講師として人文学部に着任した。中河の専門領域は社会問題研究と大衆文化論。佐藤の専門領域は差別論、階層研究、および社会調査の方法論である。この2人を専任スタッフとして、上記の時点

で人文学部の人文学科に行動文化講座社会学コースが創設されたが、年次進行のため、実際にコースに学生が所属することになったのは平成6(1994)年4月のことであった。平成9(1997)年3月には初めてコース生が卒業し、実社会に羽ばたいた。以来、本年までに、社会学コースは5回卒業生を出している。ちょうど経済状況がきわめて厳しい時期に当たったため、卒業生の職業選択の試みは一般に楽なものではなかったようだが、コースでの調査中心のカリキュラムやパソコン・電子通信の基礎訓練の経験を生かして、SE(システム・エンジニア)として企業に就職した学生が目につく。もちろん、それに限られるわけではなく、卒業生は様々な業種の企業の様々な部門に就職しており、また公務員になった者、大学院に進学した者もある。

やはり年次進行のため。人文学研究科に社会学コースが設置されたのは、平成9(1997)年4月のことである。ただし、その前から、中河と佐藤は旧カリキュラムの文化構造論コースの担当者として幾人かの院生の修士論文の指導に携わり、そのうちの1人は、修士課程修了後他大学の博士後期課程に進学している。社会学コースが設けられて以降では、3名の院生が1名入学し、うち2名が在学中である。

創設時のスタッフである中河と佐藤は、平成9年度から11年にわたって、「家族をめぐる言説の実証的研究」について文部省の科学研究費「基盤研究(B)」を受け、平成10年度に学部外国人研究者として半年間受け入れられた Robert Scott North(当時 University of California at Berkeleyの博士課程在籍)の協力を受けながら、コースを挙げて質問紙調査やフィールド調査を行った。現在、社会学コースは基礎作りの段階を終えて、教育・研究の二つの面で、確かな足取りであゆみを進めている。

社会学コース カリキュラムの現状

1. 教育目標

前提として、社会学コースでは研究者の養成ではなく、職業人または生活者としての市民のための知識と技術の提供に主眼を置いている。

1)「社会調査」の知識と技術の修得

ここで言う「社会調査」は非常に広い意味のものであり、質問紙などを用いた計量的な調査

から、インタビューや参与観察を行う質的調査、また、文献・資料を収集・整理・分析するようなものまでも含んでいる。これらのついでに知識や技術は、社会学的研究のための基礎能力としてだけでなく、職業生活を送る中でも様々な場面で活用されうるものであると考え、力を入れている。

2) 社会学的な「センス」(社会学的想像力?)の養成

一言で説明するのは難しいが、社会学および周辺領域の視点、認識枠組などを修得することにより、我々を取り巻く複雑な現代社会の「仕組み」を理解していく能力を身につけてもらおうと思っている。

3) 「情報処理能力」

コンピュータネットワークを用いた情報収集と情報交換、および発表・表現の技術は、(広義の)調査を手段として有効であるだけでなく、市民のとしての社会参加の手段として重要な意味を持っていると考えられる。

2. カリキュラム(授業)

必修授業と実質的な必修授業

< 2 年次前期 >

社会学実習 社会学コースでの学習・活動のための基礎的な技術の修得。文献検索、電子メール、インターネットの利用、電子掲示板の利用など。(オンラインコミュニケーション)

社会学概論 社会学の基本的な考え方、視点の習得。学説史的な構成と具体的なトピックによる構成を隔年で開講。

社会調査法 主として計量的な調査の実習。通年で1つの調査を行う。この授業の調査テーマは、4年生の卒業論文の中から適切なものを選んで採用することが多い。

< 2 年次後期 >

社会学実習 3年生と共同で「グループ研究」*を行う。

社会学講読 1冊の本を分担して、またはそれぞれの受講者が関心のあるテーマの論文を見つけて、発表・討論を行う。

社会調査法 前期の続き

< 3 年次前期 >

社会学実習 4年生と共同で「グループ研究」*を行う。
社会学概論
社会学講読
社会学演習 卒論演習だが、3年次前期は4年生の発表を聞いて討論に加わるのが主な目的。

< 3 年次後期 >

社会学実習 2年生と共同で「グループ研究」*を行う。
社会学演習 卒論演習。卒業論文を念頭においた発表が求められる。

< 4 年次前期 >

社会学実習 3年生と共同で「グループ研究」*を行う。卒論に関する調査などを行うことができる。

社会学演習 卒論演習

< 4 年次後期 >

社会学演習 卒論演習

選択授業(コース内)

社会学特殊講義 主として非常勤講師に社会学の各論について講義してもらう授業
2年次前期からいつでも受講できる
社会学講読 3年次後期、4年次前期にも引き続いて受講できる
社会調査法 3年次前期後期にも引き続いて受講できる

「グループ研究」について

興味関心に応じて2人~5人程度の研究グループを作り、各期ごとに自分たちで計画した研究活動を行う。活動内容は様々で、論文などを用いた学習会や、資料集め(と整理・分析)、インタビュー、観察などグループのテーマに応じて決める。

基本的に複数学年(前期は3・4年、後期は2・3年)でグループ構成し、上の学年が活動をリードする。特に前期は4年生の卒業研究のテーマに直接関わるような活動を行う。

卒論指導

多くの学生は、グループ研究を通じて卒論のテーマを絞りこんでゆくので、早ければ2年の後期(社会学実習)から卒論に関する研究をスタートすることになる。しかし、3年の前期や後期にテーマを変える学生も少なくない。

卒論のテーマや研究方法の確定は、3年次後期の社会学演習ということになっている。3年次後期の

社会学実習で基礎的な資料収集や調査を行い、4年次前期の社会学実習で本格的な調査に入るのが理想であるが、遅れることも多い。

また、一部の学生は社会調査法に参加し、そこで得られたデータを卒論に用いる。

3. 授業以外の「教育」手段

オンラインでの情報交換、ディスカッション

電子メール。メーリングリスト、BBS（電子掲示板）を用いて、情報交換、指導、およびディスカッションが行われることを期待している。

情報交換としては、文献に関する情報、ホームページに関する情報などを主として教員から流しているが、学生どうしの情報交換も少しは行われている。ディスカッションは時々、突発的に行われるが、あまり長続きはしていない。

今年からはBBS（電子掲示板）の運用を始め、一部の卒業生も加わることによって議論が活性化されることを期待している。

研究成果の蓄積・公開

卒業論文は原則として全員のを、また一部のレポートなどもホームページで公開している。これによって、先輩たちの研究を安易に参照できるほか、「公開に値するものを書く」という意識を持ってもらうことを期待している。

4. 問題点・課題

・問題意識の「貧困」さ

自分の関心から研究テーマを決めさせているのだが、非常に身近なこと、表層的なことに集中する傾向が強く、卒論のテーマとして適切なものにまとめていくことが困難なことがある。

・プレゼンテーション能力

人に読んでもらう文章、表現を工夫するように指導指導しているが、実際にはあまりうまくいっていない。

・グループ研究

「共通のテーマ」を見つけ出ししていくことがまだまだ難しい。お互いのテーマの「接続」がうまくいっていない。

第2節 国際文化学科

1 国際文化論コース

国際文化論コースは、平成9年（1997）年に設置された新しいコースであるが、その母体となったのは、平成5（1993）年、これもやはり比較的新しく設置された日中・日口文化関係論ゼミナールである。この年に富山大学では、教養部が廃止され、教養部所属の教員が各学部に分属することになったため、既存の各学部も多かれ少なかれ再編の必要に迫られた。その中で人文学部は、教養部からもっとも多くの教員を受け入れ、したがって、学部の編成も従来の小講座制から大講座制への転換を機軸として大きく改編され、教育課程であるコース編成も刷新された。そのとき新しい大講座として「国際文化関係論講座」が創られ、そのもとでの教育課程として三宝政美教授が担当する日中文化関係論ゼミナール、藤井一行教授が担当する日口文化関係論ゼミナール、勝野良一教授と渡辺洋教授が担当する比較文学コースがおかれた。またこの講座には、もう一人メアリーアン・ムラジアン助教授が所属し、ゼミナール、コースの形態はとらなかったが、英語教育、日米の文化関係論などを担当した。

「国際文化関係論」という講座名は、日本の大学に由来からある国際関係論が主に経済学や政治学を母体として研究・教育されてきたのに対して、同じく学際的な観点をもちながら人文学の色彩を強く打ち出すために、改組に際して考案されたものであった。そうした観点から、日中・日口の文化関係ゼミナールでは、「環日本海文化圏」をキーワードとした文化交流や異文化交渉の研究が行われ、学生教育においても、藤井教授が中心となってイルクーツク外国語大学、イルクーツク経済大学などとの留学生交換などの道が開拓され、また、三宝教授が中心となって中国遼寧大学への留学生派遣などが活発に行われるなど、実践的な国際交流をそなえた「文化関係」の研究・教育が行われた。

平成8年（1996）4月には、留学生担当教官のポストが新たに設置され、国際文化関係論講座に所属することとなり、山本富美子講師が着任し、人文学

部の留学生に対する日本語教育などを担当することとなった。

平成9(1997)年4月に三宝教授が転出し、同年10月にムラジアン助教授が、雇用期限の満了に伴い退職した。この時期と前後して、人文学部教授会では「国際文化関係論」講座(したがって、教育コースとしての日中・日口の両ゼミナールと比較文学コース)の拡充・再編のプランがもちあがった。「国際文化関係論」講座は、当時の人文学部では数少ないいわゆる「学際的」な性格をもった講座の一つであり、かつ、教育コースであったが、その拡充の狙いの一つは、「環日本海」地域を研究・教育の対象とする講座として、日中・日口だけでなく、韓国・朝鮮やロシア極東地域などをも視野に入れたものにする。また、現代日本の社会や文化に深い影響をあたえ続けてきたアメリカ合衆国の文化をも対象とすることであった。そうした構想のもとに、教授会で新講座への移行希望者を募ることとなった。希望調査の結果、下記の教員が移行することとなった。

小澤 浩(教授、当時学部長、行動文化講座・文化構造論コースより)

神徳昭甫(教授、英米言語文化講座・アメリカ言語文化コースより)

吉田俊則(助教授、歴史文化講座・西洋史コースより)

若尾政希(助教授、人間基礎論講座・人間基礎論コースより)

上野隆三(助教授、日本東洋言語文化講座・中国言語文化コースより)

以上の移行希望の5教員に加えて、国際文化関係論講座の藤井教授、中本昌年教授(当時評議員、人間基礎論講座)の7名で、新コース立案のためのワーキンググループが設置され、新講座および新コースと、そこで行われるべき教育カリキュラムの検討が進められた。

ワーキンググループで立案され、将来計画委員会の承認のもとに教授会に提案された再編案は、平成8(1996)年の概算要求事項として文部省に申請され、その年の12月に内諾を得て、平成9(1997)年から新講座「国際文化論講座」と新コース「国際文化論コース」が、コース学生定員16人の実験講座として発足する運びとなった。なお、それまで国際文

化関係論講座に所属していた比較文学コースは、このときの改組を機に同じく国際文化学科の文化環境論講座へと配置換えになった。

新体制の特徴は、一大講座=1コースという大コース制ととること、コース所属のすべての学生に日本文化関連の授業を必修とすること、環日本海地域と北米の文化を学習するにあたって、できる限り現地への研修などのフィールドワークを取り入れること(そのための授業として「国際文化論実習」がたてられた)、実践的な外国語の習得のために「外国語演習」をコース全学生の必修とすること、などである。

講座の教員の定員は下記の通りであった。

日本文化論担当	2名	小澤、若尾
中国文化論担当	2名	
朝鮮文化論担当	1名	
アメリカ文化論担当	2名	神徳
ロシア文化論担当	2名	吉田
留学生担当	1名	

平成9(1997)年4月に国際文化論コースが発足したと時点では、教員ポストにも多くの欠員を抱えていたが、同年10月には、3月に転出された三宝教授の後任として末岡宏助教授が着任し、翌10(1998)年、3月に藤井教授が退官し、4月には韓国・朝鮮文化論を担当する鈴木信昭助教授とアメリカ文化論を担当する小野直子講師が着任したが、これらはいずれも新設ポストである。さらに同年10月に、退官された藤井教授の後任として、ロシア文化論を担当する青木恭子講師、また、留学生担当教官山本氏が同年3月に転出していたために、その後任に山崎けい子講師を迎えた。なお、留学生担当教官は、講座としては国際文化論に所属してきたが、実質的には運営と予算の両面で独立の「コース」として存立すべきことが、この再編に際して教授会で了承され、以後、そのような仕方で行われている。

平成10年(1998)10月には、コース立案以来のスタッフであった若尾政希助教授が転出されたのに伴い、国際文化学科文化環境論講座・比較社会論コースの立川健治教授を国際文化論へ配置換えすることが教授会で認められ、立川教授は以後、国際文化論講座に所属し、本コースの日本文化論を担当することとなった。

先に述べたように国際文化論コースは、環日本海地域とアメリカ合衆国の諸文化を、比較・対照しながら、それぞれの文化的特質、日本社会へのその影響、相互の交渉・交流の歴史などを研究・教育するために、日本、中国、韓国・朝鮮、ロシア、アメリカなどを文学、歴史学、現代文化論などの様々な視角から研究する総勢8ないし9名のスタッフをそろえた学際的な性格をもった大コースであるが、実際のコースの教育課程においては、それらが有機的に結びつくこと、言い換えれば、学生指導において事実上小コースの並立といった姿をとらないことを強く意識して運営されてきた。そのための方策として、卒論指導を集団で行うこと、様々な形態での共同授業を数多く導入すること、履修指導において少なくとも2地域以上の文化に関わる授業の履修を勧めることなどを追求してきた。現在のところ、共同授業としては、国際文化入門（1年生対象、前期は各文化論担当教員によるリレー式授業、後期は複数教員による共同授業）、国際文化論演習（2年生全員を対象とした複数教員による共同授業、前・後期）、国際文化論演習（3年生後期から4年生前・後期、卒業研究を目指した講座全教員による授業）などがある。

大コースが複数教員による共同の教育を行うことは、必ずしも簡単ではなく、そのための意志疎通、話し合いに割かれる時間も相当なものであるのは事実である。しかし、今後国立大学によりいっそう求められるであろう「教育重視の路線」を考慮すれば、この点での努力は決して無駄なことではなからう。学生が自主的に研究テーマを選び取り、主体的な判断のもとに教員の指導を求めるといった体制が十分成熟するにはまだ時間を要するが、この間のコース運営において模索されてきたことは、概ねそのような方向に合致していると考えている。

国際文化論コース カリキュラムの現状

(1) 国際文化論コースの教育目標

国際文化論コースは、日本、中国、朝鮮、ロシアおよび米国などの諸文化を比較的文化論や交流・関係論

の観点から研究する。中国、朝鮮、ロシアは日本とともにいわゆる環日本海地域を構成し、歴史上、相互に強い影響を及ぼし合ってきた。また、米国文化の近代・現代日本への強い影響はいうまでもない。本コースは、異文化間の相互理解、相互交流の歴史と現状に関わる諸問題を、文学・歴史・宗教・政治などの多様な分野の研究手法を複合的に用いて、総合的に研究することを目的とするが、そのため、専門分野の異なる複数の教官による共同の研究・教育体制をとる。とくに外国人留学生には、国際交流のための実践的日本語の修得だけでなく、上記の周辺諸国や、留学生自身が属する自国の文化との関係において、日本文化を多角的に研究する場を提供する。

(2) 授業の組立の骨格

必修の内訳

入門(0)、概論(2)、実習(0)、演習(8^{*1})、講読(4)、特殊講義(6^{*1})、講義(4^{*2})、学科共通講義(6)、卒業研究(10)

*1：二つ以上の地域の科目で充足することを条件付けている

*2：「日本の社会と文化」、「日本の歴史と思想」

各授業科目開講コマ数、および開講形態（半期、年間、隔年など）

原則として教員は、演習と、講読を毎期1コマ、講義を半期1コマ、3年生後期に卒業研究準備のための演習（国際文化論演習、）を全員で担当する。その他、専門基礎科目である国際文化論入門(1)を隔年（前期）で2回担当する。

卒論指導

テーマに応じて指導教員をおいているが、年数回の中間報告の際も含めて、原則的に、全教員が指導にあたる体制をとっている。

3. 各授業の位置付け（・学生の受講実態の概略）
[1年次] 必修科目ではないが、国際文化入門(1)を開講して、国際文化論コースの教育目標、学習内容、および各教員の研究内容を紹介している。コース進学のガイダンスとして位置付けているわけではないが、進級後のアンケートをみると、国際文化入門(1)受講が進級の動機となっているケースが多い。

1年次	2年次	3年次	4年次
入 門	概論・講義・講読・演習・実習 (英語、ロシア語、中国語、朝鮮語、近代文書、日本語)	講義・講読・演習・実習 演習(卒業研究準備)	演習(卒業演習) 卒業研究

国際文化論講座のコースは、多様な地域を専攻しようとする学生を対象にカリキュラムを編成、いわゆるカフェテリア方式（好きなメニューを学生に選択させる。をとっている。下記のもの、仮にアメリカを中心に研究する予定の学生の場合の履修モデルとしての例示。（印は国際文化論コースの開講授業）

授業科目名	必修	選択	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	備考
国際文化論特殊講義	2				2						
国際文化論演習（日本と東アジア）	2	} 2									3,4年生合同授業 (ブレ、中間報告)
国際文化論演習（日本と欧米）	2						2	2	2		
国際文化論実習		2					2				居留地、北海道、 中国等*自己計画
日本文化特殊講義	4	} 6					2				2科目（地域）以上 の単位で充足
中国文化特殊講義	4				2						
ロシア文化特殊講義	4				2	2	2	2	2		
アメリカ文化特殊講義	4										
朝鮮文化特殊講義	4										
日本文化演習	8	} 8				2	2	2	2		2科目（地域）以上 の単位で充足 *比較日本文化論 演習は朝鮮文化論 演習として開講
中国文化演習	8										
ロシア文化演習	8						2				
アメリカ文化演習	8				2	2	2	2	2		
比較日本文化論演習	4										
日本文化論演習（留学生対象）	4										
日本文化講読	4	} 4									
中国文化講読	4										
ロシア文化講読	4				2	2	2	2	2		
アメリカ文化講読	4										
日本語・日本文化論講読（留学生対象）	4										
外国語演習	4	} 4			2	2					どの地域の専攻でも 日本の社会、文化、 歴史、思想を学ぶ。
日本語表現法（留学生対象）	4										
国際文化概論	2	2				2					
日本の社会と文化	4	} 4				2		2	2		
日本の歴史と思想	4				2		2				
比較日本文化論											
情報文化論	2	} 6			2						文化環境論講座と 共通（*開講担当 は文化環境論）
都市研究	2										
国際地域研究（地誌学）	2				2						
マイノリティ研究	2					2					
国際社会研究（政治学）	2										
民俗学	2					2					
国際動態研究	2					2					
自然人類学	2										
ヨーロッパ文化論	2					2					
国際文化入門		4	2							国際文化論が(1) 文化環境論が(2)	
卒業研究	10								10	指導教官および全員	
計	46	38									

第 部 部局編

2000年度がカリキュラムの完成年度。

国際文化論演習、は、まず教員全員で担当、学生の発表、ついで指導教官、副指導教官を決めて、そのグループで個別指導、最後に全教員、学生の前で発表 卒業研究に移行 後期、四年生、三年生合同演習。

実習 居留地は二年後期（準備作業）から三年前期（実施）の通年で編成。北海道は、アイヌ文化のフィールド。中国は遼寧大学で語学研修後、中国各地へフィールド。なお学生の自主計画に基づく実習も認めている。

特殊講義、演習は、二つ以上の地域の単位で充足するよう必修化している。かつ、どの地域を学ぶにしても、日本の歴史、思想、社会、文化の教養が基礎になるとの観点から、「日本の歴史と思想」、「日本の社会と文化」の取得を必修化している。

比較日本文化論演習は、新講座設置以後、朝鮮文化専任教員が着任したことで、朝鮮文化論演習として開講している。

講読に加えての外国語演習は、「読み・書き・会話」の実践的運用能力の向上をはかるとの観点から設置してある。

日本文化論演習、日本語・日本文化論講読、日本語表現法（以上留学生2年生以上対象）は、国際文化論講座在籍の留学生だけが、必修、選択単位として取得できる。検討、是正が望まれる。

「国際文化概論」は、計画段階（92年度）では、国際文化学科としてその内容を検討するものであったが、実施当初から、相互の講座が隔年で担当（通常非常勤講師）している。

「都市研究」～「ヨーロッパ文化論」までは、計画段階（92年度）では、国際文化学科全体で編成するものとして考えられていたが、実施当初から環境地域論講座（文化環境論講座）が担当している。

*「国際文化概論」、「都市研究」～「ヨーロッパ文化論」は、計画段階（92年）では、国際文化学科としての特色を打ち出す共通授業として構想されていた。

国際文化入門（1）は、講座（コース）の紹介のための授業。ガイダンス（全般的なコース紹介）、日本、アメリカ、中国、ロシア、朝鮮の各担当者が二コマを基準としてリレー講義を行っている。

国際文化論授業担当表

科目名	前期担当者	後期担当者	備考
国際文化論特殊講義	非常勤（集中講義）		学科共通
国際文化論演習		全教員	3、4年生対象。3年生は卒論研究準備。4年生は、卒論研究の中間報告。
国際文化論実習	A	A	後期準備、前期実施
	B		中国実習
	C		
日本文化論特殊講義	非常勤（集中講義）		
中国文化特殊講義	非常勤（集中講義）	D	
ロシア文化特殊講義	C・E		他に前期集中講義（非常勤）
アメリカ文化特殊講義		F	
朝鮮文化特殊講義		G	
日本文化演習	A	A	
中国文化演習	B	B	後期からは新任教官も担当
ロシア文化演習	C	C	
アメリカ文化演習	B	F	
比較日本文化論演習	G	G	朝鮮文化演習として実施
日本文化論演習		I	留学生2年生以上対象
日本文化講読	A	A	
中国文化講読	B	B	後期からは新任教官も担当
ロシア文化講読	E	C	
アメリカ文化講読	F	H	
日本語・日本文化講読	I		留学生2年生以上対象
外国語演習（中国）	B	B	2～3年対象
	B	B	3～4年対象 * L L 教室で同時開講 * 後期からは新任教官も担当
外国語演習（ロシア語）	非常勤（毎週）	非常勤（毎週）	
外国語演習（英語）	H	F	
外国語演習（朝鮮語）	G	G	
日本語表現法	I	I	留学生2年生以上対象
日本の社会と文化		J	
日本歴史と思想	A		
比較日本文化論			隔年開講（非常勤・集中講義）
国際文化論入門	A・B・D・E・F・J		専門基礎科目
卒論指導	全教員	全教員	

[2 年次] 自分の興味、関心を中心にしながらも、他コースも含む、できるだけ多様な授業に出席するように指導している。どの地域あるいはその関係を学

ぶにしても、日本の歴史、社会、思想の教養が基礎になるとの観点から、その授業科目を必修とし、またそれとともに、特殊講義、演習は二つ以上の地域

のもので充足することを必修としている。そしてそれ以外の科目についても必修とはしていないが、できるだけ二つ以上の地域のもの取得するように指導している。

学生たちは、講座共通の科目は別として、できる限り2年次中に全必修科目の履修完了に近づける形で受講する傾向が強い。教員の側からいえば、学生の自主性をできうる限り尊重し、その学習意欲に応える形態をとることをコースの特色と考えているが、学生側から見れば、カリキュラムがカフェテラス方式の上に、地域、分野なども多様なために、コースの枠がないと感じているものが多い(何を勉強しているか、また何を勉強すればよいかわからない)。

2年次において、3年次以降の学習の核、あるいは卒業研究につながるようなテーマをもつ学生はほとんどいない、ただし、どの地域を選択するかについては、決定する傾向が強い。

[3年次]後期からは、学生の学習の核、あるいは卒業研究につながるものとして、国際文化論演習、

を開講している。全教員、3年生全員の参加のもと、4年生が中間発表を行い、それに対して質疑応答(コースとしては今年度から開始)、ついで3年生が、その時点で、卒業研究として選択したテーマについて発表を行っている。それを受けて、各指導教員、副指導教員のグループに分けて個別指導を行い、最終時間(2日間)に中間発表を行っている。

3年生に対しても学生の自主性を第一義としているが、コース内の多様性(授業、指導、あるいは教員の研究分野、方法)を活用することに、学生はとまどいを覚えている感が強いと思われる。

必修については、前期までにほとんど取得し、後期からは、週に1、2コマから3、4コマ出席する学生が多くなる。

[4年生]卒業研究のみの出席がほとんどとなる。大学院進学希望者を除けば、卒業研究に本格的に着手するのは、就職内定後、早くも7月である。

卒業研究のテーマの決定に関しては、学生の志望をそのまま認めている。指導は複数で行っているが、上にふれたように、後期の国際文化論演習のなかで、3年生の質疑応答も含んで全教員の指導を行っている。

近年、卒業研究の動機付けそのものが学生にとっ

て困難になっている観が強い。

*コースには中国からの留学生が10人程度所属しており、中国文化関係では、そのメリットを活かす授業の工夫を行っている。

4. その他(カリキュラム以外の講義)

卒業生も参加して、卒論提出後の卒論発表会(+修士論文発表会)。

2 考古学コース

(1) 考古学研究室の創設

富大文理学部の改組によって、新たに発足した富大人文学部に考古学研究室が設けられたのは昭和54(1979)年。秋山進午と和田晴吾さんが創設の任を負って赴任したのはその4月。第1期生が1年半の教養課程をおえて進学してくるのは秋10月からで、その間の半年が新研究室開設の準備期間である。

研究室は旧人文学部の建物の2階南端、こじんまりながらも流しなども具えた部屋が用意されていた。部屋の方はまあまあであるが、決定的に不足しているのが報告書等の研究文献である。

有り難いことに、地元、富山考古学会会長の湊晨先生から、先生の貴重な蔵書のうちから千数百冊の基本文献を貸与していただいた。「湊文庫」として初期の学生が多いに活用させていただいたところで、そのご恩は計り知れない。今は研究室も手狭となり、蔵書もある程度増え、先生にお返ししたと聞くが、先生のご厚意は研究室にとって決して忘れてはならないところである。

もうお一人、当時、京都大学を退官された有光教一先生が、やはりご所蔵の蔵書のうちから、洋書の基本文献を多数お譲り頂いた。それに、図書館に架蔵されていた僅かな考古学関係図書を借り出して何とか格好をつけた。あとは、われわれが所蔵する図書を自由に利用してもらうことにしたが、これだけではどうにもならない。早速拡充策をはからねばならない。どこの大学でも研究室の創設にはつき物の苦勞が待ち受けていた。

蔵書を増やす簡便な方法がコピーである。これを、研究室旅行に結び付け、各自で時代を分担し、京大考古学研究室の豊富な蔵書のうちから、関係するところを片っ端からコピーして持ち帰り、簡単な製本

をして蔵書とした。この方法によって、急速に蔵書の増加を計ることが出来たのではなからうか。

研究図書とあわせ必要な考古資料も皆無である。秋山の前任の大阪市立美術館の一室には、創立当初の古代学協会の事務所がおかれていたが、事務所が京都に移されて以降、放置されたままとなっていた。美術館には当時考古担当学芸員として、上田宏範氏と藤原光輝氏の二人がおられ、関西各地の考古調査を行っていた。しかし、私が在籍した1973～79年にはお二人とも早く退職また早世され、それらの事情は全く判らないままとなっていた。あたかも、美術館の大改造が行われることとなり、旧事務所となっていた部屋が機械室となるため、あけわたすこととなり、旧関係資料が整理された。そこから廃棄された各種資料および、早世した藤原氏が整理途中のまま放棄された資料が石炭箱に乱雑につめこまれ、美術館のあちこちに放置され、まさにゴミとして放棄されようとしていた。富大へ移るにあたり、捨てられるよりは実物資料のない大学で学生教育に役立てたともらい受け、大学で整理することとした。長年の埃で真っ黒となっていた資料を学生諸君が洗ってみたら、驚いたことに、すでに刊行されている報告書に採用されなかった遺物を含め、未報告の遺物がいけると出てきた。研究室開設3周年の機会に、それらを公開したところ、その噂が関西に届き、早速、旧古代学協会関係者から詰問状が届けられた。本来なら、美術館でゴミとして捨てられるところを救出した資料であるが、旧所有者として名乗り出られたのであるから、お返しすることとし、トラック1台分を堺市博物館に移管した。関西の古墳時代資料に注目すべきものが含まれていることを付記しておく。それらの資料のうちで、唯一北陸と関係のある糞置庄遺物は古代学協会からあらためて借用し、研究室で整理させてもらうこととなっている資料である。堺市博物館でも整理が進んだとは聞いていない。共に整理を進めて欲しいものである。

そうした準備のかたわら、暇をみつけては県内からはじめて、北陸の主要遺跡の踏査を行った。我々に不足している北陸考古学事情を補うことが主目的であるのは勿論であるが、同時に、研究室として実施すべき発掘調査の候補地選定作業を兼ねていた。

このほか、研究室の開設と同時に、地元の研究者との間で毎月開催した「富大考古学談話会」も、地元との提携に役立ったものと思う。

(2) 考古学研究室の学生教育

研究室が発足したところの考古学卒業生の就職状況は、決して楽観できるものではなかった。また、人文学部改組当時は学部のみで大学院はなく、したがって、学部学生時代に考古学を専攻する上での必要な事を、すべて教育しておく必要があった。それに、恰好な事業が小矢部市域の埋蔵文化財分布調査である。研究室の発足は昭和54(1979)年であるが、我々が赴任したのは当初計画から1年遅れていた。そのため、北野博司・贅元洋両君は仮に日本史コースに所属して我々の赴任を待っていてくれた。2人は考古学コースの0期生なのである。すでに小矢部市の伊藤隆三さんのところで仕事手伝っていた両君を通して、研究室に小矢部市域の埋蔵文化財分布調査の依頼があり、それに応じて小矢部市と研究室とで共同調査を行うこととなったのである。この小矢部市を皮切りに、分布調査は以後、立山町、氷見市と引き続く。

この分布調査は、丁度、秋に研究室へ新たに入ってくる新入生の格好のトレーニングとなり、考古調査の第一歩である分布調査の重要性とともに、その調査方法を教え、採集遺物の整理と同定、そして自分たちでの報告書の作成作業を、実際に体験するものとなった。それに加え、毎年夏休みに必ず実施した発掘調査に参加することで経験を積み、そのおかげで、「富大考古の卒業生は現場ですぐ役に立つ」という評価を頂くことができたのである。

(3) 研究室での研究目標

研究室での最重要課題が発掘調査の実施にあることはいまでもない。地方大学が地域に役立つ研究を行うことは最も肝要なことである。しかし一方、大学のあり方を放棄することもあってはならぬ。大学で行う発掘調査は、行政が行う発掘調査とは自ずから異なる。すなわち、学術調査でなければならぬ。発掘地点を選定するにあたり、我々が第一に考えたのはそのことである。従って大学としては、緊急調査には絶対参加しない。しっかりとした研究目標を

立てる。調査のあとすぐ破壊される可能性のある遺跡は調査対象としない、との原則をかけた。

まず真っ先に行わねばならぬのは、研究の方向をどう定めるかである。我々にとっては、これまでの研究経過から古墳時代がもっとも近いテーマである。それも、北陸へ居を移してみると、それまでは関西に居住した関係で、知らず知らずのうちに中心から地方を見る見方にとらわれていたことが良くわかった。それとは逆に、地方から中心を見る見方に転換してみたい。また、北陸で盛んな弥生時代の研究成果を取り入れ、連続することができるようにと考え、「北陸地方における古墳時代成立課程の研究」をテーマとし、北陸3県の研究者とともに共同研究を行うこととした。こうして文部省科学研究費補助金の申請を行う一方、早速発掘候補地点の選定にかかった。研究テーマにふさわしい遺跡は富山では思い付かない。共同研究諸氏とも相談のうえ、隣県ではあるが、石川県にお願いすることとなり、早速、石川県埋蔵文化財センターにある石川考古学研究会に高堀勝喜会長をお訪ねして趣旨をお話した。先生は快く我々の願いを聞き届け頂き、浜岡賢太郎、橋本澄夫両先生ともご相談のうえでご推薦頂いたのが七尾市国分尼塚古墳群なのである。また、地元では七尾市教育委員会の松浦五郎氏それに地権者松本与四松・修さん、神社奉賛会の立野誠一郎・古木健二さんはじめ皆様のご協力を頂いたが、もっとも有り難かったのは宿舎を提供いただいた高村利男さんのご厚意である。調査経費は昭和56(1981)年の第一調査こそ科学研究費補助金の補助を受けたが、あとは研究室経費をやり繰りして実施した。見かねて石川考古学研究会からご寄付を頂いたことも忘れられない。尼塚調査は1号墳に続き2号墳と、和田先生が立命館大学へ代わられるまで5次にわたった。そして、宇野隆夫先生が和田先生の後任となられてからも、関野古墳群(『富山大学考古学研究報告書』

1) 谷内16号墳(『富山大学考古学研究報告書』2)の発掘調査、また、王塚・勅使塚の測量調査(『富山大学考古学研究報告書』4)と古墳調査は引き続いたのである。

宇野先生とのコンビでは新たなテーマも設定された。「北陸における」がそれである。立山町上末窯(『富山大学考古学研究報告書』3) 羽昨市塩田

(『富山大学考古学研究報告書』5)の発掘調査はそのテーマによる調査成果である。どちらの研究テーマも研究室のおかれている状況と地元の研究者との連携、そして、学生教育を優先して設定したものであった。

(4) 11年を振り返って

昭和54(1979)年から平成2(1990)年まで、秋山の47歳から58歳まで、若くはないがなんとか働いたことを有り難く思う。とりわけ恵まれたのは和田・宇野両氏とコンビを組めたことである。研究室の基礎をつくる上で、働き者のお二人との共同作業では、私も働かざるをえなかったところである。

第1期生が卒業したときにストレートで就職できたのは、岡山大大学院へ進んだ贅君は別として、金沢市に入った楠君唯一人であった。しかし、志を立てた諸君は諦めないで、苦勞の末、いつか考古の職についている。私のいた11年で6割であったが、大学の専攻をそのまま職場に結び付けられるコース、文科系ではそれほど多くはなからう。そして、年度末に送って頂いた分厚い報告書を繙くとき、本当に頑張ってくれていると頭が下がる。そうしたなかから、20周年を前に、北野・高橋君が研究の場に戻ってきた。幸い私もまだ現役。どこの職場環境も一層厳しさを増すばかり。皆さんも健康にだけは留意して前進して下さい。

(5) おわりに

その他、考古学協会富山大会の開催など、書き残したのものもあるがもうとくに紙数がつきた。おわりに、富山での11年の秋山のモットーを記しておこう。

研究室の和
地元との協調
大学としての教育・研究

以上の三つである。たった二人しかいない研究室スタッフの呼吸があわないと、一番の被害者は学生となる。そうした例を仄聞していたため、富山ではそうしたことがおこらぬスタッフの選択に心がけ、幸い和田・宇野両氏と気持ちよく仕事をする事ができた。

地元との協調は地方大学としては勿論、第一にか

んがえるべきことであるが、さらに考古学という特徴から、地域の研究者・各種期間との協調は不可欠である。これも、富山・石川さらに福井や新潟まで各県の考古学会は、我々新参者を快く迎えていただいたことに感謝の言葉もない。それらの優れた研究者との共同研究が、富大の仕事に素晴らしい稔りをもたせていただいた。

とはいえ、大学には大学の役割がある。我々は行政機関とは異なる役割を担っているのである。いう

までもなく、学生の教育であり、大学としての研究の推進である。したがって、大学にも行政にも双方の利益となる事業があれば理想的である。それが県下市町村の埋蔵文化財分布調査事業であった。小矢部市からはじめたこの事業は、引き継がれて今も続いていることと思う。こうした、埋蔵文化財保護の基礎資料となる仕事こそ、先に記したように学生の教育にも役立ち、併せて地域社会の役にも立つものなのである。

富山大学人文学部考古学研究室年表

年 度	実習発掘調査	実習分布調査	研究室旅行	野外調査・談話会その他
1979年度		富山県小矢部市		考古学研究室開設 記念講演会（湊晨、竹内俊一）
1980年度		富山県小矢部市	奈良県	一周年記念講演（小林行雄）
1981年度	石川県 国分尼塚古墳群	富山県小矢部市	福岡県・ 佐賀県・ 熊本県	二周年記念講演（橋本澄夫・谷内尾晋司）
1982年度	石川県 国分尼塚古墳群	富山県小矢部市	静岡県	三周年記念講演（高堀勝喜） 富山県小矢部市北・墳墓群測量調査
1983年度	石川県 国分尼塚古墳群	富山県小矢部市	四国	四周年記念例会（富山大学考古学研究室『尼塚古墳群の発掘成果』）
1984年度	石川県 国分尼塚古墳群	富山県小矢部市	和歌山県・ 三重県	50回記念特別例会（東村武信・光谷拓実）
1985年度	石川県 国分尼塚古墳群	富山県立山町	千葉県	和田先生転出、宇野先生着任 黒部市阿古屋古墳群測量調査
1986年度	富山県 関野古墳群	富山県立山町	島根県	
1987年度	富山県 谷内古墳群 上末古窯跡群	富山県立山町	長野県	
1988年度	富山県 上末古窯跡群	富山県立山町	秋田県	人文学部に大学院新設
1989年度	石川県 滝E遺跡	富山県立山町	京都府	日本考古学協会富山大会開催 婦中町王塚古墳測量調査 秋山先生転出
1990年度	石川県 滝・柴垣製塩遺跡群	富山県立山町	福岡県・ 佐賀県	前川先生着任 青森県十三湊遺跡分布調査 婦中町勅使塚古墳測量調査 男子ソフトボール初優勝
1991年度	石川県 珠洲大畠窯跡	富山県立山町	福井県	青森県十三湊遺跡分布調査 上市町柿沢古墳群測量調査
1992年度	石川県 珠洲黒畑窯跡	富山県立山町	宮城県・ 福島県	上市町柿沢古墳群測量調査 青森県十三湊遺跡試掘調査 立山町芦峯寺室堂遺跡発掘調査 立山町芦峯寺室堂遺跡発掘調査
1993年度	青森県 十三湊遺跡	富山県氷見市	岐阜県	
1994年度	岐阜県 江馬氏城館跡	富山県氷見市	奈良県	英国ケンブリッジ州スウェッジー遺跡調査
1995年度	岐阜県 江馬氏城館跡	富山県氷見市	新潟県	英国ケンブリッジ州スウェッジー遺跡調査
1996年度	岐阜県 象鼻山古墳 江馬氏城館跡	富山県氷見市	島根県	
1997年度	岐阜県 象鼻山古墳 青森県 十三湊遺跡	富山県氷見市	大阪府	
1998年度	岐阜県 象鼻山古墳 青森県 十三湊遺跡	富山県氷見市	石川県 能登地方	人文学部新校舎完成 研究室移転（10月）
1999年度	富山県 上末古窯跡群 試掘調査	富山県氷見市	三重県	宇野先生転出・高橋先生着任 青森県唐川城跡測量調査

富山での11年、毎年、秋から冬にかけ、新入生歓迎会のあとは分布調査。そのあとは年度末までに『分布調査報告書』の作成。そのあと、4月にも分布調査、そして春は見学旅行の準備と旅行。そして夏には学生諸君との発掘作業に明け暮れた。忙しくはあるが充実した生活であった。そうした時を共に過ごした皆さんの働きに御礼申したい。残念ながら業半ばに故人となられた田上・西田、それに日本史の奥田君の冥福を祈る。

そして、すでに故人となられた方を含む富山考古学会、石川考古学研究会の皆様、各地考古学関係機関の諸氏に心からの御礼を申し述べると共に、今後共のご支援をお願い申し述べるものである。

(秋山進午 1979年4月～1990年3月在職)

<研究室刊行報告書一覧(年代順)>

- 『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』、1979年度、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団、1980年3月。
- 『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』、1980年度、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団、1981年3月。
- 『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』、1981年度、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団、1982年3月。
- 『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』、1982年度、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団、1983年3月。
- 『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』、1983年度、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団、1984年3月。
- 『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』、1984年度、小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団、1985年3月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1985年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1986年3月。
- 『関野古墳群』小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団、1987年3月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1986年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1987年3月。
- 『谷内16号古墳』富山大学人文学部考古学研究室、1988年3月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1987年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1988年3月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1988年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1989年3月。
- 『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会、1989年10月。
- 『縄文時代の木の文化』富山考古学会縄文時代研究グループ、1989年10月。
- 『旧石器時代の石斧(斧形石器)をめぐって』北陸旧石器文化研究会、1989年10月。
- 『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室、1989年10月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1989年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1990年3月。
- 『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告 北陸の前方後円・後方墳の - 考察』富山大学人文学部考古学研究室、1990年10月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1990年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1991年3月。
- 『能登滝・柴垣製塩遺跡群 - 古代揚浜式塩田店鉄釜炉・土器製塩炉の調査』富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会、1991年7月。
- 『立山町埋蔵文化財分布調査報告』、1991年度、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1992年3月。
- 『富山県上市町柿沢古墳群、第1次測量調査報告』上市町教育委員会・富山大学考古学研究室、1993年3月。
- 『珠洲大島窯』富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会、1993年5月。
- 『芦嶺寺室堂遺跡 立山信仰の考古学的研究』立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1994年3月。
- 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』、1993年度、氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室1994年3月。
- 『江馬氏城館跡 下館跡発掘調査報告書』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1995年3月。
- 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』、1994年度、氷見市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1995年3月。

SWAVESEY GEOPHYSICAL SURVEY AT BLACK HORSE LANE, 1994, INTERIM REPORT

Kaname Maekawa, Hideo Sakai, Takao Uno and Simon Kaner, THE SWAVESEY PROJECT FACULTY OF HUMANITIES TOYAMA UNIVERSITY, JAPAN and THE CAMBRIDGE ARCHAEOLOGY UNIT DEPARTMENT OF ARCHAEOLOGY UNIVERSITY OF CAMBRIDGE, October 1995.

- 『江馬氏城館跡 下館跡門前地区と庭園の調査』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1996年3月。
- 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』、1995年度、氷見市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1996年3月。
- 『象鼻山1号古墳 第1次発掘調査の成果』養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1997年3月。

『江馬氏城館跡 下館跡南辺の調査』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1997年3月。

『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』、1996年度、氷見市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1997年3月。

『象鼻山1号古墳 第2次発掘調査の成果』養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1998年3月。

『十三湊遺跡 第77次発掘調査報告書』青森県市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1998年3月。

『氷見市埋蔵文化財分布調査報告』、1997年度、氷見市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室、1998年3月。

考古学コース カリキュラムの現状

1. 教育目標

・実物の物質資料から自分の手で歴史を再構成していく能力を習得させる。

・そのための基礎技術、発掘調査技術、報告書作成技術を習得させる。

・アナログ情報をデジタル情報に整理するコンピュータ能力を習得させる。

・考古学実習：夏季発掘調査、研究室実習旅行におおきな比重を置いている。

・学生との対話を重視している。発掘調査期間中におけるきめ細かな指導。大学院生(TA)を通じた指導。

・理学部地球科学教室との学際的教育。考古学実習において、理化学的手法の教育。

・国際文化学科のコースらしく外国の考古学にもある程度知識を身に付け、国際性を身につけさせる。

・県埋蔵文化財センターや富山県内市町村教育委員会とも連携して、実物の考古資料に触れる機会を多くする教育を目指す。

2. 授業の組み立て

<骨格>

・1年次

国際文化入門において、コース紹介をする。

3. 2から3年次

国際文化概論

文化環境論演習

文化環境論講読

考古学概論

考古学特殊講義

考古学演習

考古学講読

考古学実習

を受講。

4. カリキュラム以外の活動

3月卒業論文発表会、研究室連絡誌の年4回の発行。

富山大学国際交流基金招聘事業による外国人教師の講演会も実施している。

5. 4年次

考古学演習

卒業研究

・横断的授業(講座共通授業)

情報文化論

都市研究

国際地域研究(地誌学)

マイノリティ研究

国際社会研究(政治学)

民俗学

地球環境研究(自然地理学)

国際動態研究

博物館学

博物館学

博物館学

1. 各授業の位置付け... ()内は順に年間開講コマ数、開講形態。

文化環境論演習(2、半期)：考古学研究入門。講座内教官によるリレー方式で実施。富山県内の遺跡を訪問。遺跡について各自で調べさせ、レポートを提出させる。出席重視。

文化環境論講読(1、半期)：考古学専門書の外書講読。国際的知識を身に付けさせるため。より概説的なものを選択する。

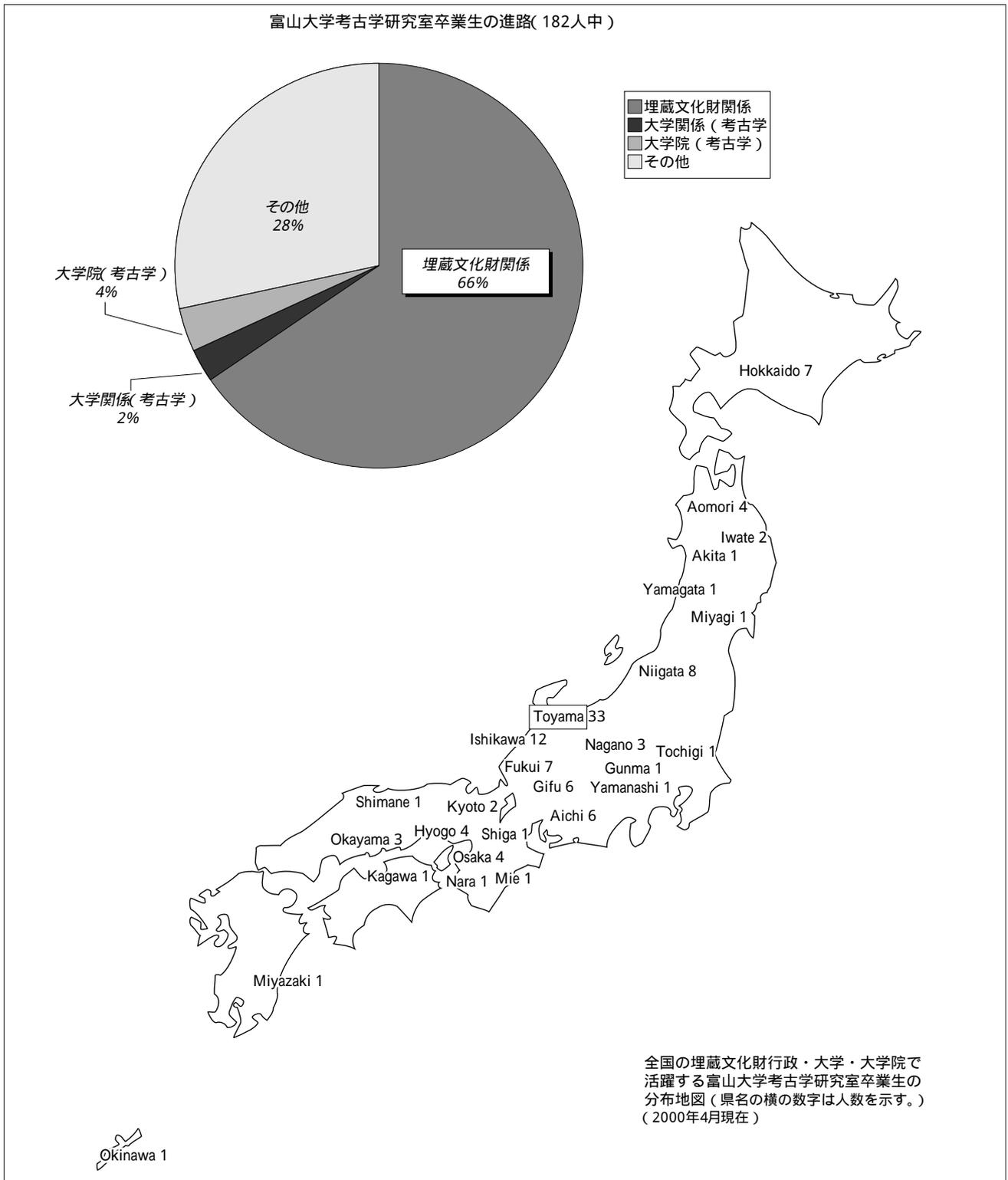
考古学概論(1、半期)：日本考古学概説について論ずる。考古学研究の基礎的方法について講ずる。

考古学特殊講義(4、年間)：非常勤2、現教官2。現教官は最も得意な分野を論ずる。

非常勤教官は、28人の現教官がカバーできない分野を依頼する。

考古学演習(1、年間)：3年生用。前期は、実習旅行のパンフレット作成。時代別に分担。

後期は、夏季実習によって実施した発掘調査の報告



書作成。

考古学演習(卒論指導)(2、年間)：4年生用。

前期1度。後期2度程度。演習による発表を行い、方針や方法について相談する。

考古学講読(1、半期)：文化環境論講読と内容は同じ。考古学専門書の外書講読。国際的知識を身に付けさせるため。

考古学実習(3、年間)：2年生用。夏季実習発表調査に向けて、技術習得のため、厳しいトレーニングを実施。

考古学実習(発掘調査)(3、夏季実習発掘調査、実習旅行)：教育の中で最も重点を置いている。夏季実習発掘調査は、原則的に3週間。実習旅行は、3泊4日。全員必ず参加。

	必修	選択
国際文化入門		4
国際文化概論	2	
文化環境論演習	4	
文化環境論講読	2	
考古学概論	2	2
考古学特殊講義	10	10
考古学演習	8	
考古学講読	2	
考古学実習	6	
情報文化論	2	
都市研究	2	
国際地域研究(地誌学)	2	
マイノリティ研究	2	
国際社会研究(政治学)	2	
民俗学	2	
地域環境研究(自然地理学)	2	
国際動態研究	2	
人文地理学概論		4
文化人類学概論		4
比較社会概論		4
比較文学概論		4
史学概論		2
日本史概説		4
東洋史概説		4
博物館学		2
博物館学		2
博物館学		2
卒業研究	10	

博物館学：非常勤による。現場に立っている方から直接生の声を聞けるように配慮。

卒業研究：考古学演習（卒論指導）によって行う。4年生はじめまでに、題目・参考文献・1,000字要旨の提出を義務づける。

2. 学生の授業実態の把握

学生の指導目標を卒業論文においている。そのための準備を、3年生後半からはじめる。テーマ設定や参考文献の提出を4年生移行時の春休み明けに行い、おおよそ準備をはじめ。演習室・図書館・県埋蔵文化財センターに調査に常時行く。

次に、3年生時には、演習で報告書作成の技術習得にあたるが、演習時間以外に課外課題が多く与えられ、特に報告書執筆の機会が与えられる。前期には、実習旅行のパンフレット作成に多くの労力を使う。

最後に、2年生時には、発掘調査技術習得の基礎段階訓練を考古学実習で受ける。

いずれも、厳しいプレッシャーをかけるためか、学生の授業態度は、真面目で、出席をとらなくとも大半は出席する。

3 人文地理学コース

人文地理学コースは、昭和52（1977）年、人文学部の創設に伴って新設されたコースである。昭和53（1978）年4月に木下良（1922年生）が神奈川大学から教授として着任し、コースの組織づくりと運営に着手された。第1期8名の専攻生が進級してきたのは同年の後期からであった。木下の研究分野は古代歴史地理学であり、国府や古道を主たる研究対象にし、本学着任後も数々の実地調査を精力的に継続し、それら長年の研究成果は、『国府』（教育社・昭和63年）や『道と駅』（大巧社・平成6年）・『古代道路』（吉川弘文館・平成8年、共編著）などに結実している。氏は早くも昭和58（1983）年3月に国学院大学へと離任されるが、5年の間、氏の学究的で温厚な人柄は、コース所属の学生ばかりでなく同僚教官からも大いに慕われ、今なお旧交が続いているようである。氏は6年ほど前に国学院大学も退職され、現在は自適な生活を送られている由であるが、古代歴史地理への情熱は一向に衰えず、やや不自由な身体ながらも、いまもお現地踏査や講演で極めて多忙のようである。（なお、コース設立当時の状況について、木下先生から手記を頂いたので、文末に掲載する。）

昭和55（1980）年4月に、神前進一（1949年生）が助手（のち講師・助教授）として着任し、ここに一応、コースの人的な体制を整えたことになる。神前の専門分野も歴史地理学であり、主に近世村落を対象にしている。氏の関心は広くアジア諸国の現代的問題にも及び、その成果の一端は、『変貌するアジア』（古今書院・平成2年、共著）となって結実している。氏は比類ないほど学生好きの性分で、教育・指導に情熱を注がれた。特に野外実習に熱心に取り組み、在任中は富山県内の朝日町や八尾町大長谷地区・砺波平野などの調査を学生と共に精力的に行った。氏は昭和63（1988）年3月、大阪外国語大学に転出する。任地ではアジアなどからの外国人留学生の指導に尽力されているとのことである。

昭和58（1983）年8月、木下の後任として浜谷正人（1942年生）が山形大学から転任した。浜谷の専門は社会地理学であり、主に日本村落社会を研究対象にしていた。着任後は、やはり学生の野外学習と

して朝日町や八尾町など県内各地を調査し、とりわけ砺波平野の散居村の調査に継続的に取り組んだ。それらの成果は、『日本村落の社会地理』（古今書院・昭和63年）に多く取り入れられている。また、氏は外書講読を殊の外重視し、欧米の著書・論文の翻訳に努力を傾注したが、その成果の一端は『社会地理学の探検』（大明堂・平成3年）に結実している。着任直後に公刊した『最近の地理学』（大明堂・昭和60年、共編著）は、人文地理学の入門書として広く読まれ、今日なお版を重ねている。なお、氏は平成5（1993）年5月から9（1997）年5月までの4年間、富山大学学生部長を務めた。

昭和63（1988）年4月、神前の後任として水内俊雄（1956年生）が九州大学から赴任した。氏の専攻分野は都市社会地理学であり、日本内外の都市の近代化過程や都市問題などを主たる対象にし、斬新な視角からの研究を果敢に推進している。大連やトルコの都市調査にも参画した。その成果の一端は『イスラム都市の変容』（古今書院・平成6年、共編著）に収録されている。氏は平成7（1995）年3月に大阪市立大学に転出し、顕著な活躍を続けているが、剛気で磊落な人柄が魅力であった。この間、教養部の改組に伴って、平成5（1993）年4月、溝口常俊（1948年生）が教養部から配置換えで移り、コースは一層充実した陣容になる。溝口の専門は歴史地理学であり、近世農村を主な対象にするが、長年にわたりバングラディシュの海外共同調査にも参画し多くの成果を上げている。氏は平成8（1996）年、名古屋大学に転出したが、温厚な人柄と抜群の運動神経は比類ないものであった。

平成7（1995）年4月、水内の後任として丹波弘一（1962年生）が着任する。氏の専門は都市社会地理学であり、釜ヶ崎地区を対象として、斬新な視角から貴重な成果を上げている。氏の関心はフェミニズムやマイノリティ研究にも及び、それらの研究成果の一端は、共編著『空間から場所へ』（古今書院・平成10年）に収録されている。

人文地理学コースの常勤教官の動向は上記のようなものであるが、この間、富山大学内外から数多くの非常勤講師に来講していただいた。以下、その方々を開講年度順に列記する（敬称略）。昭和53年度 実清隆・柿本典昭、昭和54年度 二神弘・藤

井昭二・柿本典昭・船越昭雄・藤森勉・岡本・山口恵一郎、昭和55年度 実清隆・高橋正・中藤康俊・浅井、昭和56年度 成田孝三・藤井昭二・柿本典昭・藤森勉・寺坂昭信、昭和57年度 中川・二神弘・中藤康俊・山田誠・守屋以智雄、昭和58年度 松田信・駒井正一・実清隆・鈴木富志郎、昭和59年度 中藤康俊・須原英士夫・中村豊・藤井昭二・中村泰三、昭和60年度 坂本英夫・山野正彦・小林武彦・溝口常俊・藤森勉、昭和61年度 木村辰男、富田暁・藤井昭二、昭和62年度 藤田佳久・中村豊・溝口常俊・小島覚、昭和63年度 実清隆・山田正浩・杉浦芳夫・山形理、平成1年度 小口千明・溝口常俊・樋口忠成・久保幸夫、平成2年度 松原宏・初田亨・藤巻正巳、平成3年度 荒井良雄・酒井富夫・樋口忠成、平成4年度 山岸政雄・千葉立也・大村誠、平成5年度 山田晴通・土屋敦夫・海津正倫、平成6年度 中村豊・内田諭、平成7年度 内田忠賢・広松悟、平成8年度 神谷浩夫・大城直樹・新見浩・堀信行、平成9年度 荒山正彦・渋谷鎮明・太田茂徳、平成10年度 菅浩伸・長尾謙吉・太田茂徳、平成11年度 島津俊之・熊谷圭知・太田茂徳

コースでは創設以来、実地調査や巡検を重視し、国内各地の巡検や実地調査を行ってきた。詳細は割愛するが、巡検先としては、例えば中国地方（島根・鳥取）、四国地方（香川・愛媛・高知）、九州地方（沖縄・福岡・長崎・熊本）、東北地方（新潟・秋田・青森・岩手）や関東地方（千葉・東京・栃木）などに出かけてきた。1回ではあるが、台湾への巡検も行われた。また、インテンシブな野外実習として、当初は富山県内各地、例えば朝日町、砺波平野（砺波市とその周辺町村）、八尾町大長谷、上市町、富山市岩瀬などを共同調査し、また最近では毎年、県外、例えば大阪市近辺、千葉県外房、青森市近辺などを対象にした共同調査を試みている。これらの実習として行われた調査を契機にして卒論を完成させた者もいる。

以上、コースの沿革史を教官中心に叙述してきたが、コース創設以来、教室の主人はあくまでも学生であるとのモットーで運営されていた点では強調されてよいだろう。昭和56年（1981）年3月、7名の第1期生が教室を巣立って以来、平成11（1999）年

3月の第19期生まで、186名が卒業した。内4名が外国人留学生（中国1、台湾2、マレーシア1名）である。専攻課程と大学院修士課程の修了者は13名

で、内3名が他学部・大学からの入学生であったので、実質189名が当コースを巣立っていったことになる。この他、学業途中で自ら命を絶った2名を含

コースの新設のころ

新制大学の発足時に触れて

元教授
木 下 良

1977年、富山大学文理学部の改組によって理学部と人文学部が生まれ、人文学部人文学科に人文地理学コースが設置されることになり、それまで神奈川大学外国語学部で一般教育の人文地理学と地誌学を担当していた私が、その初代教官として1978年4月に赴任することになった。第1期の学生は教養課程にあって、78年度の後期から学部に入ってくるようになっており、前期は未だ学生が居なかったので全く講義のない教官も居たが、私は文理学部文学科の3・4回生を対象とする「人文地理学」を1コマ持つことになった。

教官は勤務地に居住することになっているが、公務員宿舎には入れそうにないので、建築中のマンションを購入することになったが未だ入れないので、形式的に友人の教育学部の藤森勉助教授のお宅に寄寓することにして、神奈川大学在勤当時住んでいた鎌倉から毎週1往復することにした。教授会は水曜に開かれ、講義は木曜午前にも組んでもらったので、水曜に出て1泊し講義をすませて返るのが通常であるが、教授会のある時は火曜から出ることもあった。未だ上越新幹線は開通していなかった時で、信越線・上越線経由の特急を利用することが多かったが、東海道新幹線米原経由をとることもあり、時間に余裕があるときは中央線・大糸線や高山線を通ったこともある。夏休みも終わりに近い9月初めに奥井町にできたマンションに入居した。

後期になって人文学部の第1期生として、人文地理学コースは文理学部史学専攻からの転科生1人を含めて8人の専攻生を迎えた。当初担当教官は私一人だったので、講義は学内の教育学部の藤森・実、教養部の藤井・二神、金沢大学教養部の柿本の諸氏に交替で応援して頂いたが、経済学部の中藤氏が赴任してこられてからは講師陣に加わってもらった。当時比較文化コースには担当教官が居なかったので、その演習も私が担当した。半年の準備期間はあったが、以前からあったコースと違って新たに創設されたコースではあり、教室の備品や図書の整備などもあって、かなり忙しい思いをした。

地方大学の教官は何らかの意味で地域社会への奉

仕が強いられるが、私も赴任と同時にその前年から始まっていた高樹文庫所蔵の資料を対象とする歴史資料緊急調査に調査員として1年間、また1978年度から始まった富山県歴史の道調査には主任調査員として3年間関わることになった。共に県教育委員会文化課の仕事であったが、これらの調査が富山県という地域を理解する手助けになったのは事実であり、また仲間の調査員を通じて広い人脈を得ることができたのも、富山の人達の云う「旅の人」に過ぎない私にとっては有り難いことであった。

1979年3月には最初の見学旅行として、長崎（2泊）平戸佐賀と廻って佐賀で解散した。長崎では今は廃山になってしまった高島炭鉱を見学したが、当時も見学者は殆ど無かったのだろうか、大いに歓迎されて帰りにウイスキーを土産にもらったりした。10月初めに敦賀で4泊して、近江・越前国境の交通路の調査をした。高樹文庫所蔵資料に同地の運河計画の地図などがあり、それらのコピーを基にその跡を辿ろうというものである。格別の成果はなかったが、平清盛が琵琶湖・日本海の運河開削を計画して掘り始めたが巨岩に打ち当たったので掘り止めたという伝説がある深坂峠下の掘止地蔵で、森（現在、角橋）昭代さんが蜂に刺されるというハプニングがあった。

80年度から、神前進一さんが助手として来てくれることになったので、ようやく人文地理学コースも軌道に乗ることになった（ただ残念なことは、春休み中に本永和宏君が自殺したことである。文理学部文学科史学専攻から1年遅れで転科した学生であるが、以前から地理学に関心があり、地理学関係の本もかなり備えていて、これらに御両親からの御寄付を加えた書籍が教室に寄贈されている。）

最初の卒業生が出た81年には、いわゆる56豪雪があり、卒論提出日の1月16日も大雪で、卒論の仕上げに県外の自宅に帰っていた学生が、15日車で戻ってくる途中敦賀で足止めになったと電話してきた。幸いに高速道路が逸早く開通したので間に合ったが、他のコースの学生で郊外の自宅を朝早く出て、正午の提出時間に間に合わなかったということがあった。

めて8名の者が1～5年間在学して教室を去ったし、2名の中国人研究生もいた。これらの若者の顔が、卒業・修了していった者と同様に鮮明に脳裏に浮んでくる。学生間の連絡誌PUPは連綿として書き続けられており、現在(平成11年11月)231号を数える。上記2名の他、卒業・修了・中退生の中で物故した者は現在までいない。

4 文化人類学コース

「山と山は巡り合わないが、人と人とは巡り合うものである」(スワヒリ語の俚諺)

文化人類学コースの草創

文化人類学コースは、昭和52(1977)年の人文学部の創設に伴って新しく設置された。昭和54(1979)年4月に、和崎洋一が天理大学から文化人類学コース(講座)の初代の教授として、また赤阪賢が学習院女子短期大学から助教授として着任し、このペアで文化人類学コースの運営に着手することとなった。

それまで、富山大学には文化人類学を担当する教員はまったくいなかった。経済学部には、アメリカの文化人類学者J・エンブリーの名著“Suye Mura: a Japanese village”を翻訳した植村元覚教授が勤務していたが(邦訳タイトル名は『日本の村落社会 須恵村』)、氏のご専門は地理学であった。教育学部には日本の民族学の泰斗であった岡正雄氏が集中講義で数回来学されたことがあったが、研究教育環境としては、たとえば図書館にも文化人類学関連の書籍がほとんどないといった状況から、文化人類学コースは出発することになったのである。

誕生したばかりの文化人類学コースを担うこととなった和崎は東アフリカ、赤阪は中央アフリカと西アフリカをそれぞれフィールド(調査地)とするアフリカ研究者であった。このことが、その後の文化人類学コースにアフリカ研究という大きな特色をもたらす契機となる。

和崎は京都大学理学部で地球物理学を学んだ後に人類学に転じた異色の経歴を持ち、日本の人類学とアフリカ研究をリードした今西錦司が率いる京都大学アフリカ学術調査隊の初期のメンバーであった。タンザニア国のマンゴラ村における長期の人類学

調査の成果と経験をまとめて『スワヒリの世界にて』(NHK出版会、1977年刊)を出版し、アフリカニストとしてすでにひろく世に知られていた。着任当時は、東アフリカで広範囲に使用されているスワヒリ語の日本語辞典の編纂に没頭していた時期であり、資料整理を手伝っておられた通称「あいさん」こと宮岡あい氏も富山に來られて、編纂作業が続けられた。この成果は『スワヒリ語・日本語辞典』(養徳社、1980年)となって結実した。

赤阪は京都大学文学部の人文地理学専攻の学部生時代に京都大学大サハラ学術調査隊に参加して西アフリカのマリ共和国の調査を行い、サハラ砂漠南縁の西スーダン地方の地域特性・文化・歴史について業績を積んだ後、当時は京都大学のザイル国(現コンゴ民主共和国)東部調査の一員として農耕民テンボ人の研究に従事していた。

文化人類学の研究の伝統がまったくない環境で出発した文化人類学コースであったが、開設当初は学生もまだ在籍していなかった。和崎と赤阪は着任直後は手持ちぶさたの状態、やむなくホタルイカや岩ガキなど富山の珍味の賞味にひたる日々をおくっていた。しかし、5月になると翌年の専攻希望学生が研究室にあらわれ始め、そこでさっそく和崎流の独特の教育がはじまった。学生を引き連れての山登り、河原での焚き火、実習室での鍋料理など、和崎のフィールド・ワーカー(野外調査者)としての自由闊達な資質が存分に学生教育に発揮される幕開けであった。

昭和55(1980)年から昭和63(1988)年まで

コース創立の翌年の昭和55(1980)年、最初の専攻学生10名がそろると、さっそく文化人類学実習の調査テーマをえらぶことになったが、アフリカで「イディ・モハメディ」(お祭り男)の異名を持つ和崎の独断で、県内各地でくりひろげられる祭りの調査をてがけることになった。まず、最初に八尾町の風の盆にねらいをつけ、地元の協力を得ることになった。この町には春に曳き山祭りもあり、さっそく地元の民家を合宿所にして、つばさに祭りの進行を記録した。こうして開始された祭りの文化人類学的調査はその後、富山県内の八尾、伏木、新湊、岩瀬などの祭り調査にひきつがれ、「お祭り研究室」と

いう異名を学内や学界で獲得することとなった。調査の成果は、富山大学文化人類学教室発行の『地域社会の文化人類学的調査』という形で出版されたが、この報告書の刊行は現在に至るまで継続されており、10号を数えるにいたっている（参考資料1）。

実習調査をつうじて学生たちにフィールド・ワークの楽しさを体得させようという和崎と赤阪の教育方針は、理論に拘泥するよりも実際に自分の目と耳で地域の人々と接することを重視するというコースの学風を産み出すこととなった。実際、現在までに提出された卒業論文はすべて、学生たちが自分自身で行った現地調査にもとづいて書かれている。「お祭り研究室」の伝統も脈々と受け継がれ、富山県内の祭りだけでなく、長浜の曳き山、姫路のけんか祭りなどの全国的に有名な祭りを対象とした卒業論文も数多い。このように、和崎、赤阪の2人がタッグを組んで教鞭をとっていた時代に、現在まで受け継がれることになる実習重視の教育と自由でのびやかな気風がしっかりと根をおろしたのである。

コース新設のわずか3年目の昭和56（1981）年に、文化人類学の全国レベルの学会である日本民族学会の研究大会の開催をひきうけることになった。大規模な研究大会の開催をたった2人のスタッフでやりくりするのはたいへんであったが、近隣の金沢大学の教員の援助もあって、開催は成功をおさめることができた。ここで特筆すべきは、文化人類学とは何のかかわりもない朝鮮語や中国語コースなどの人文学部の同僚教員たちからも、開催にあたって援助を受けたことである。新設されたばかりの人文学部には、今から考えれば夢のような同志的な連帯とでも言うべき雰囲気が存在していたのである。

日本民族学会の研究大会に次いで、昭和58年（1983）年に日本アフリカ学会の記念すべき第20回研究大会の開催をひきうけたのも、お祭り好きの和崎の面目躍如と言えよう（ただし、大会事務の当局者はたいへんな苦労をしたようである）。この研究大会に参加した今西錦司をはじめ日本の人類学、アフリカ学を代表する錚々たるメンバーが大会の後に酒興に乗って記した句が、富山駅近くの小さな居酒屋に今も残っている。和崎が好んで使った「Milima haikutani, lakini watu hukutana」（山と山は巡り合わないが、人と人とは巡り合うものである）というスワ

ヒリ語の俚諺も和崎の達者な絵とともに居酒屋の壁面をひそやかに飾っている。また、和崎は東アフリカの民謡「マライカ」を学生たちとともに愛唱したが、この歌はいつしか文化人類学コースの「コース歌」となり、現在でもコースの宴会や卒業式の際に歌われる（参考資料2）。「和崎先生は魚を三枚におるせない学生には単位を与えなかった」などという真贋さだかでない話が今なおコースの「伝説」として語り継がれているが、教授会の席上で突然「もっといいお茶を出してくれ」という提言をしたことなど和崎は在職中に様々な逸話を残すことになった。和崎は昭和60（1985）年をもって停年退官したが、退官を記念して有志によって編まれた文集『故霜集』には、卒業生・在学生やかつての同僚たちによって、和崎の豪放磊落な人柄をしのばせる数々のエピソードが披露されている。和崎は退官後、中部大学に転じて、平成4（1992）年6月29日、享年71歳で惜しまれながら逝去された。平成8（1996）年には富山でコース学生と和崎と縁の深かった方々によって「和崎先生をしのぶ会」が開かれ、地元の新聞に大きく取り上げられた。

7年にわたって大きな足跡をコースに残した和崎教授が停年退官した昭和61（1986）年には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を退職したばかりの富川盛道を教授としてむかえることとなった。これは、人文学部に修士課程を新設するための一種の補強人事であったが、同時に軌道に乗り始めたコースのアフリカ研究の方向をいっそう確立するための布石であった。富川は大阪高等医学専門学校を卒業後、北海道大学文学部で心理学を学び、北大社会学研究室の助手時代にアイヌ民族の自殺研究で医学博士号も取得するという、異色の研究歴の持ち主であった。また、戦前に今西錦司が率いた大興安嶺探検の一員として中国東北部に居住する狩猟民オロチョン人の調査を実施した体験も持っていた。和崎と同様に日本のアフリカ現地調査の草分けのひとりであり、タンザニア国の牧畜民ダトーガ人の研究に長年従事していたが、当時の日本のアフリカ研究者の大半を組織したアフリカ学術調査のプロジェクト・リーダーの任にもあった。在任期間は3年と短かったが、研究一途の経歴の最後に若い学生たちの教育の機会を持ったことを富川は楽しみ、学生た

ちもまた富川の温厚な人柄とダンディな身だしなみに魅了された。退官後は東京国際大学大学院で教鞭をとっていたが、その後、平成9(1997)年9月29日、享年74歳で逝去された。こうして、富山大学の文化人類学コースのアフリカ研究と自由闊達な学風を育てあげた和崎洋一、富川盛道の両氏があいついでともに70台前半にして冥界に旅立たれたが、これは後進にとってはかえすがえす惜しまれることであった。

平成元(1989)年から平成8(1996)年まで

平成元(1989)年、富川教授の退任後は赤阪が教授に昇任したが、在任中に文部省の科学研究費補助金(科研費)によって、中央アフリカのザイル国(現コンゴ民主共和国)や西アフリカのマリ国の現地調査に従事した。また、自身も研究代表者として科研費(国際学術調査)を取得して、新たに西アフリカのギニア国の農村社会と市場経済のかかわりについての調査を開始した。赤阪のアフリカ研究にかける情熱は、在任期間中にコースのために購入したアフリカ関連の書籍類が日本でも有数のアフリカ関連図書のコレクションとなっていることに端的にあわれている。赤阪はアフリカの歴史にも造詣が深く、奥行き深いアフリカ研究の成果は共編著の『アフリカ研究 人・ことば・文化』(世界思想社、1993)、共著の『新書アフリカ史』(講談社、1997)や『世界の歴史24 アフリカの民族と社会』(中央公論社、1999)などの著作に結晶している。アラブ系テロリストの事件が頻発していた時期にパリでアラブ系と間違えられて警官に職務質問されたという独特の風貌を持つ赤阪は、鷹揚で気取らない性格で学生に慕われ、長い在職期間をとおして個性豊かな学生を次々と育てていった。和崎も愛煙家で有名であったが、赤阪もパイプを片時も離さず、演習室にたむろしている学生たちは、パイプの甘い香りが廊下に漂い出すと赤阪が研究室にやってきたことを知るのであった。

富川の後任には、末原達郎を京都造形大学から助教としてむかえた。和崎ももともとは理系の出身であったが、末原も農業経済学から人類学に転じた経歴を持ち、当時はザイル(現コンゴ民主共和国)の焼畑農業を継続的に研究していた。在任中に研究をまとめて博士号を取得し、博士論文をもとに『赤

道アフリカの食糧生産』(同朋舎出版、1990)を刊行した。祭りの調査実習が継続される一方で、末原の指導の下に県内の下村、入善、利賀などの農村調査もてがけられることとなった。その成果の一端は、1994年に報告書『地域社会の文化人類学的調査7 下村の変貌』にまとめられている。末原も研究代表者として文部省の科研費を得て、アフリカの食糧生産の研究プロジェクトを組織して、自身は東アフリカのタンザニア国で農業調査を行った。大柄な体躯に温和な風貌で学生に親しまれた末原は、7年間にわたって研究と教育の両面においてコースに多大の貢献を残し、平成8(1996)年に龍谷大学に転出した。その後、京都大学大学院農学研究科に移って精力的に研究と教育にあたっており、最近では、『アフリカ経済』(世界思想社、1998)を編んでいる。

平成9(1997)年から現在まで

末原の後任には京都大学アフリカ研究センターの研修員であった竹内潔が助教として着任した。竹内は政治学、社会学を経て、生態人類学に転じて京都大学理学研究科で理学博士を取得した経歴を持ち、中央アフリカのコンゴ共和国の熱帯森林帯に居住する狩猟採集民の生業文化を研究している。赤阪、末原はそれぞれ文部省科学研究費(国際学術研究)を獲得してアフリカ調査チームを組織してきたが、竹内も平成10(1998)年から科研費(1999年に国際学術研究から基盤研究Aに移行)を継続して獲得して、主としてガボン国などの中央アフリカ諸国を調査地として研究プロジェクトを進めている。

創設以降、18年の長きにわたってコースを支えてきた赤阪は、平成9(1997)年4月に京都府立大学文学部に新設された国際文化学科に転出した。京都府立大学に移った後も、日本国際文化学会の設立に寄与するなど文化人類学から国際文化学へと関心領域をひろげながら、研究と教育の第一線で活躍している。また、アフリカにかける学問的情熱にいささかの衰えもなく、先述のようにアフリカ史の書物を刊行している。

赤阪の転出と符節をあわせるかのように、コースは老朽化した校舎から図書館脇に建てられた新校舎に移転することとなった。旧校舎では最上階に研究室や演習室があったため、真夏には室温は40度近く

になり、7月に入ると教師も学生も汗を流したたせながらの授業風景が普通であった。しかし、2部屋あった演習室は、学生たちにとっては授業の合間の憩いの場であり、夜ごとに鍋や酒を楽しむ場であり、学年を越えて集い議論する自由な空間であった。アパートに1人で帰ってもつまらないので、炬燵を持ち込んで寝泊まりする学生までいたほどである。新校舎では、空調が付いたものの演習室は一つに減り、多人数が自由に演習室に集うということはできにくくなった。

平成9(1997)年、赤阪の後任として、京都大学人間・環境学研究所の大学院生でアフリカの民族芸術を調査研究していた佐々木重洋を助教授としてむかえた。また、平成10(1998)年には、新しい教育カリキュラムである「情報文化論」の担当教官として動物考古学を専攻する内山純蔵が講師として着任し、文化人類学コースに籍をおくこととなった。内山は、共通科目である情報文化論の教育を担当するとともに、動物残存遺体をもとに、現存の狩猟採集社会との比較から縄文時代の生業生活を復元するという手法で研究を行っている。

平成11(1999)年には生態人類学会の第4回研究大会を主催することとなり、囲碁学会の異名を持つこの学会のために立山のホテルを借り切って大会を開催した。また、コース創立以来、日本民族学会の北陸支部例会である北陸人類学研究会を金沢大学との合同で毎年数回のペースで開催してきたが、平成9(1997)年からは内外の研究者を招いてセミナーを開く『富山人類学談話会』を開催し、現在までに3回開催して、フランス国立科学院のセルジュ・バユシェ博士、エマニュエル・オリピエ博士、ロンドン大学のジェームズ・ウッドバーン教授、ワシントン州立大学のパリュ・ヒューレット教授、ウィーン大学のアーミン・プリンツ教授などの人類学者を招聘して、講演や学生との懇談会を実施した。

卒業生とコースの現況

文化人類学コースが誕生してすでに20年以上が経過し、200人以上の卒業生が巣立っていった。そのなかで、同級生や同窓生同士でカップルが10組ほど誕生していることは特筆すべきであろう。コースの自由でのびやかな雰囲気は知らず知らずのうちに結

婚にいたるような交友を育んだのかもしれない。

卒業生の多くは教職に就いたり一般の企業に就職したりしているが、なかには陶芸や絵画の道をこころざすなど、のびのびと才能をのばしている者もいる。在学中の関心を持続させて海外に出る者もあり、日本語教師として東南アジアで活躍したり、アフリカの日本大使館に勤務したりしている。また、大学院に進学して研究者の道をえらんだ者も少なくない。第3期生の高根勤氏は海外青年協力隊に加わってガーナに赴任した後、イギリスの大学院を終了し、現在はアジア経済研究所に勤務してアフリカ農村社会について着実な研究の成果を挙げて、京都大学で博士号を取得している。現在、大学院に在学して文化人類学を学んでいる者は12名を数える。文化人類学を研究するためには長期の海外現地調査が必須であるため、このうちのほとんどは京都大学大学院などの博士課程を持つ他大学の研究科に在籍している。修士課程しか持たない富山大学人文科学研究科では、文化人類学を究めたいという学生の志望に十分に答えることができないのが残念である。

平成11(1999)年の春にコース創設20周年を記念して、東京外国語大学の院生である檜垣まり氏など同窓生有志の尽力によって祝賀会が開催されたが、富山だけでなく全国から数十名の卒業生が集まって一堂に会し、京都から参加された赤阪、末原の両氏を囲んで青春の思い出話に花が咲いた。最後には赤阪氏がマライカを熱唱されて、「人と人は巡り合う」ひとときの宴は幕を閉じた。

現在、文化人類学コースには、大学院生1名をふくめて28名の学生が在籍している。旧校舎時代のように夜ごと演習室に学生が集まるということは少なくなったが、それでも学生たちは活発に自分たちで様々な行事を演出して、宴会を開いたり、海外旅行の土産を持ち寄って賞味したりと、演習室を大学生生活のベースとしておおいに活用している。突然、ぶらりと卒業生が訪ねてくることも多い。「人間のことは現地で学べ」という和崎以来のフィールド・ワークの精神も、しっかりと今の学生たちに受け継がれている。現3年生は富山の海と山の文化の比較を実習テーマとしてえらび、利賀村と氷見市を調査地として、時間があれば自主的に調査地に出かけて調査を進めている。

富山大学の文化人類学コースは、二十有余年の歴史をつうじて、日本におけるアフリカの人類学的研究の拠点として研究実績を蓄積するとともに、多くの有為の人材を社会の多方面に送りだしてきた。調査実習をとおして、狭い大学のなかではとうてい知り合うことができない多くの人々の語る声に耳を傾けて多様な生活と人生のあり方を理解することが大学において文化人類学を学ぶ原点であり、文化人類学コースは一貫してこの原点に立って教育を行ってきた。価値観が多様化し錯綜する一方で人間的な交流の機会が少なくなっている昨今の社会事情を鑑みると、文化人類学の教育が持つ意義はかつてにもまして大きい。しかし、富山大学は再編・統合や大学の法人化といった組織改変の渦中にあり、その過程で文化人類学コースの存立が危うくなる事態が生じるかもしれない。関係者のご理解とご支援をお願いする次第である。

最後に、卒業生のうちでひとり、折戸千佳子氏が事故で亡くなられたことを記して、謹んで氏のご冥福をお祈りいたします。

参考資料1 文化人類学実習報告書

『地域社会の文化人類学的研究』

刊行年	タイトル
1 1981	『八尾の曳山祭』
2 1982	『八尾の曳山祭』
3 1983	『八尾の曳山祭』
4 1987	『伏木の曳山』

5 1990	『岩瀬の曳山』
6 1991	『岩瀬の曳山 (続編)』
7 1994	『下村の変貌』
8 1996	『新湊の曳山』
9 1997	『猿害と地域社会 - 富山県 大山・上市・立山町の事例から』
10 1999	『海民文化の現在 - 石川県輪島市海士町・舳倉島』

参考資料2 マライカ (Malaika)

Malaika, na kupenda Malaika.
Nami ni fanye je!
Kijana mwenzio!
Nashindwa na mali sina we.
Ningekuoa Malaika.
Kidegee, hukuwaza kidege,
Ningekuoa mamio,
Ningekuoa dada
Nashindwa na mali sina we.
Ningekuoa kidege.

(大意)

私の天使よ
私はあなたを愛している

私はどうしたらいいのだろう
私はあなたと結婚したいのに
お金がない

私のかわいい小鳥よ
くりかえし

MALAIKA

Ma - la - i ka _____, naku penda Mala - i - ka, - ka, Nami

ni - fa - nye _____ je, ki - ja - na mwenzi - o _____, Nashi

ndwa na mali si - na - we, Ningeku - o - a, Ma la - i - ka, Nashi - ka.

教育内容とカリキュラムの現状

1. 教育目標および計画

A. 教育目標

文化人類学は、他者の生きる具体的で多様な現実を対象として、自分もその現実に参加することによって他者を理解しようとする学問である。コースの教育では、既成のもの見方にとらわれず自らの視点で柔軟に対象を捉える態度、対象を観念的にではなく実証的に理解するための調査技法、自分が得た理解や解釈を明快に呈示できる表現力を養成する。このような教育を通して、卒業後の進路に関わらず、どの分野においても実証的かつ創造的な仕事をなしうる人材を育成することがコースの基本的な目標である。

B. 教育計画

他者の価値観や生活様式を十全に理解するためには長期にわたる継続的な現地調査が必要である。また、調査に際しての技術やマナーも一朝一夕に身につくものではなく調査経験の積み重ねを必要とする*。現地調査を継続しながら、先行研究や理論的枠組の研究をおこなって、最終的に調査報告(「民族誌」)をまとめるというのが文化人類学の基本的な手法であり、教育計画もこの学問的特徴にしたがって立てている。

具体的には、2年次から地域社会の諸文化事象を対象として継続的な調査実習を開始し、4年次までに先行研究や諸理論の検討、理論的思考力や明快な表現力の養成のための授業科目を実習の周囲に配置する、という方針でカリキュラムを組んでいる(詳細は下記「カリキュラム」)。3年次後期の実習調査が完了した時点で、文献研究の成果も含めて報告をとりまとめ、公開する。

4年次では、それまでに得た知識や経験をもとに、各自が設定したテーマについて単独で現地調査を行って、その成果の報告を卒業研究としてまとめる。

* 昨今、「フィールド・ワーク」という語が野外科学以外の分野でも流行しているが、本来、「フィールド・ワーク」という調査方法は多様で時系列的な変化を伴う対象に対して、現地での長期継続調査によって精密な一次資料を得る作業であって、対象について概要を把握するための単発的な「ワンショット・サーベイ」とは目的も内容も異なる。

2. カリキュラム

A. 授業科目の教育上の位置づけと開講形態

1で示した教育目標・計画に沿いながら、最終的にコースでの教育成果が卒業研究として結実するよう、各授業科目を有機的に関連させてカリキュラム上に配置している。(下表)

4) 学生の自主的な作業を妨げている事情

実習では各自が自分の関心に応じてテーマを決め、自主的に調査を進める方向で指導を行っているが、この点ではほとんど問題はない。演習でも各自の興味関心に基づいて文献を選択させているが、積極的に取り組んでいる。ただ、新校舎に移転して学生が使えるスペースが減ったため、学生ごとのグループ作業(実習報告書作成など)がスムーズに行えないという事情がある。スペースの問題は如何ともしがたので、学生間の連絡を密にして時間を棲み分けて演習室を利用させるといった工夫が必要だと考えている。また、CL教室ではグループ作業は行いにくいので、コース学生が作業のために自由に使える端末の整備も長年の懸案となっている。

5) 学生の積極性の低下

学生たちは、自主性をもって授業での作業に取り組んでいるが、しかし、4、5年前の学生と比較すると、カリキュラムや単位取得の枠を超えてより広く深く知識を得ようという積極性がなくなっている。以前は、単位を充足して卒業の要件をすでに満たしていても、新しい教官の講義や集中講義などを聴講する学生が多くいたが、最近では、そのような志向を持つのは、大学院志望の一部の学生に限られている。また、卒業研究などでも、個人差はあるが、テーマをなかなか自分で決められず、教官からの示唆やアドバイスに頼って解決しようとする学生が増えてきている。3)で学生の貧弱な読書量について触れたが、積極的かつ主体的な知的好奇心を喚起する環境が学生たちの周囲から欠落していく傾向にあるように思われる。学問の持つ「おもしろさ」を実感させるような、教官から学生への働きかけが、今後、よりいっそう必要になると考えられる。

6) 学生間のコミュニケーションの断絶

前述のように新校舎への移転に伴って、コース学生が自由に使えるスペースが大幅に減った。現在、40名近い学生がコースに所属しているが、演習室に収容できるのはせいぜい十数人である、そのため、異なる学年の学生間でのコミュニケーションが、旧校舎時代に比べてなかなかとりづらいつい状況にある。実習調査の技術やマナー、体験などについて、学年を越えてコース学生の間で伝達共有できる関係が持たなくなっている。この問題については対応を模索している。

B. 学生別の現状と問題点(1~3年次)

1年: 文化人類学は、高校までの学校教科では、その学問的成果や内容がほとんど触れられることのない学問分野である。文化人類学とコースについてのガイダンスを「国際文化入門」で行っているが、この科目は講座内教官のリレー式授業のため、この科目だけでは学生に文化人類学やコースについての基礎的な知識やイメージを十分に持たせることができない。そのため、平成10年度より、コース教官の研究対象や専攻分野の紹介をとりいれながら、文化人類学概論の対象を1年生まで広げて、文化人類学についての理解を促すようにした。しかし、それでもなお、コースの選択に際して準拠するに足る情報、とりわけコースでの授業科目の位置づけや各教官の専門分野などについての情報が、十分に学生に伝わっているとは言い難い。カリキュラム上で処理するか、自主ゼミ的な対応をするか、いずれ

にせよ、文化人類学と文化人類学コースの概要を周知する工夫が必要だと認識している。

逆に、文化人類学という学問の特徴やコースの教育事情をよく理解したうえで、コースに所属することを強く希望する一年生を、コース定員数あるいは自学科優先の規則によって、やむなく受け入れられないことができないケースがほぼ毎年ある。しかし、これは、制度上の問題であるので、とうぜんながら、一コースの裁量では対応できない。

2~3年: 就職状況が、悪化するまでは、教養科目との兼ね合いで2年次後期から文化人類学の本格的な授業を開始していたが、上記1)に挙げた昨今の就職事情のため、2年次前期から実習、講読(文化人類学講読)あるいは演習(文化人類学演習)を開始することを検討している。とりわけ、実習報告書の完成がこの数年就職活動のためにかなり遅れているため、実習調査の開始を早くする必要がある。

C. 4年次卒業研究について

1) 卒業研究の目的と内容
卒業研究はコースの教育で得た知識、技術、経験の集大成である。4年生は、それぞれの関心に応じてテーマや調査地を設定して、単独で現地調査を実施し、収集した資料を先行研究や文化人類学の理論的パースペクティブのなかに位置づけながら、自ら見いだした事実と解釈を、論理的かつ具体的に呈示することが求められる。

B. 授業の分担

1) 文化人類学という学問分野では、研究に際して

	1年次	2年次	3年次	4年次
既成理論・先行研究の理解と論理的思考の訓練	文化人類学概論(2 I 1 JS) 国際文化入門 * [1 JS	文化環境論講読(2 I 1 JS)	文化人類学講読(4 I 2 JY) 文化人類学特殊講義(6 I 3 JS)	卒業研究 (10)
現地調査による一次資料の収集/資料の整理と解釈/資料・解釈の先行研究とのつきあわせ		文化人類学実習(3 I 1 JS(2年)/[2 JY(3年)		
関心領域についての文献研究とディスカッション/論理的・説得的な表現の訓練		文化環境論演習*[2 JS	文化人類学演習(8 I 4 JY)	

下線・コースで開講している必修授業科目
()内数字: コース開講の必修授業科目の必修単位数
[]内数字: コマ数/1年
S/Y: Sは半期、Yは1年を通じての開講
*文化環境論講座共通授業科目(講座内教官によるリレー式授業)

海外ないしは国内における長期の現地調査が必須である。したがって、毎年、その年度の教官各自の調査研究予定や事情を勘案して、各授業科目の分担を決めている(ただし、3 - A - 2)参照。)また、文化人類学の対象は世界の多様な諸民族集団の生活文化であり、またディシプリンにも多くの下位分野(医療人類学、経済人類学、認識人類学など)がある。コース教官ではカバーできない対象やディシプリンについて、毎年、学外の講師に「文化人類学特殊講義」の2コマの授業を委嘱している。

2) 講座あるいは学科に共通する授業科目

講座共通科目

「国際文化入門」, 「文化環境論演習(上表参照)

学科共通科目

文化人類学コースの教官が担当、もしくは学外講師に委嘱している学科共通科目と開講の形態は以下のとおり。

- ・「民族学」：文化人類学の隣接領域。2単位。
2～3年対象。半期集中もしくは通常講義。
学外講師に委嘱。
- ・「自然人類学」：文化人類学の隣接領域。2単位。
2～3年対象。隔年半期集中講義。学外講師に委嘱。
- ・「情報文化論」：平成10年度から開講。生活や生業を情報という視点から捉える新しい授業科目。コース教官が担当。文化人類学特殊講義に読み替え。

(なお、「国際文化概論」は国際文化講座と講座間で、「都市研究」は講座内コース間で、それぞれ輪番で担当している。)

3. 教育の現状と問題点

A. 講義の計画・実施に際しての問題点

1) 最近の就職事情による授業前倒しの必要性

最近の就職事情から、就職希望の学生は3年次後半から本格的な就職活動を開始せざるをえず、また4年次の夏を過ぎないと就職が確定しない。コース学生の大半を占める就職希望の学生に対しては、3年次後半から4年次の前半に

かけては、卒業研究に多くの時間を割いたり、また通常講義への毎回出席することが望めないというのが実情である。こういった事情を踏まえて、授業時間以外にも時間を割かねばならない「実習」や「講読」については、前倒しすることを検討している。

2) 通年シラバス作成の困難

平成12年度から通年のシラバスが学部教育に導入予定だが、2 Bに上述したとおり、文化人類学の研究には、国内外での長期の現地調査が伴う。現地調査は、主として文部省科研費の助成を受けて実施しているが、その交付が内定するのは4月である。交付時期は例年6～7月であるので、採択の可否に関わらず前期の授業計画は立てられるが、後期については、コース教官のそれぞれの科研費(分担者として名を連ねているものも含めて)の選考結果を待って、調査時期と授業の割り振りを調整しなければならないという固有の事情が文化人類学コースにはある。

3) 学生の読解力、表現力の低下

コース学生を見る限り、この2～3年ほどの間に、文章読解力、他者に分かる文章を書く表現力が著しく低下している。コース学生にアンケートをとったところ、月に小説の類を含めて1冊以上の本を読むものは、全体の2割程度であった。支出でいえば、平均して、携帯電話の使用に支払っている料金の十分の一程度しか、書籍購入に充てていない。文章のなかの論理を読みとったり、平明で分かりやすい文章を書く以前の問題として、乏しい読書量を反映して基本的な語彙知識が決定的に不足している。こういった実情を放置すれば、他人が読んで分かるような報告書やレポートまとめることはとうてい無理であるし、また、社会に出て必要な(あるいは就職に必要な)過不足のない表現力を身につけないまま、卒業を迎えることになる。また、英文の読解についても、基本的語彙や表現についての知識が不足しているので、文脈から論旨を類推する訓練を行う以前に、基本的な単語と表現を習得させなくてはならない。以上の問題について、今年度から基礎的なところから読解力と表現力を鍛える方向で演習と講読の授業を

行っているが、1)に挙げたような就職事情もあるので、2年次から読解力と表現力の向上のための授業を開始することを検討している。

2) 卒業研究の問題点

a. 卒業研究には一貫した指導が有効であるので、教官の専攻分野、海外出張などの事情を勘案しながら、指導教官制で指導を行っている。昨今の就職事情を踏まえて、3年後期から卒論で扱うテーマや地域について学生から相談を受ける機会をカリキュラム上に設けることが緊要だと認識しているが、現状では、「卒論指導」はコースごとの裁量に任されてきたという経緯からカリキュラム上での取り扱いが曖昧であるので、どのように対処すればよいのか、よくわからない。

b: 就職活動が始まると、学生たちには卒業研究のテーマを絞るための時間的、心理的な余裕がなくなる。さらに文化人類学の場合は、現地調査をおこなうことが卒業研究の大前提であるから、就職活動が一段落する9月あたりまでは、なかなか卒業研究に本腰をいれることができない。富山を離れて就職活動を行っている間も、学生と連絡をとりながら、テーマについての専攻研究の文献を読むなど可能な方法で卒業研究をすすめさせる必要がある。

3) 発表会

毎年、12月に2・3年生出席のもと、中間発表会を開いて、教官を含め全員で4年生の報告を吟味し、問題や残された課題を指摘している。また、卒業研究提出後の2月に、金沢大学文学部文化人類学研究室とともに合同卒論発表会を開催している。

4. カリキュラム外の教育活動

カリキュラムとは別途に、学生が文化人類学について広く知見を得るために、コースまたはコース教官は以下の活動を行っている。

- 1) 希望者について、国立民族学博物館をはじめとする博物館への見学旅行(随時)
- 2) 希望者について、日本アフリカ学会学術大会など学術集会への参加(不定期)
- 3) 金沢大学文学部文化人類学研究室と共催している「北陸人類学研究会」への参加(年4回)

- 4) 国内外の人類学研究者を招へいして行う「富山人類学談話会」への参加(不定期)

5 比較社会論コース

比較社会論コースは、平成5(1993)年、大学設置基準大綱化にともなう、学部再編に伴って創設された。教養部廃止にともなう、人文学部に移行してきた立川健治(日本史)と筒井洋一(政治学)とが新しいコースの立ち上げを行った。

双方ともに、教養部において大講義の授業だけでなく、コロキウム・教養ゼミの少人数の授業を担当していたが、専門に所属した学生を卒業研究まで一貫して担当するのは公式には初めての経験であった。そのため、教師側もまた学生側もまったく新しい始まりであった。学生の自主性を信じてやってみようということである。

立川は、京都大学大学院文学研究科で、明治の社会労働運動史を専攻、その後、社会労働運動の指導者、思想家らの在米体験の研究から明治期の渡米熱の研究を行い、平成元(1989)年10月富山大学教養部に赴任した。赴任後は、横浜・神戸、函館、長崎等の居留地の研究、あるいは西洋人による日本文化論、日本競馬史研究を進めた。立川の研究の一端については、<http://www.bunkamura.ne.jp/mokichi-club>。

筒井は、神戸大学法学部大学院で国際関係論を専攻し、昭和61(1986)年9月に富山大学教養部に講師として赴任した。本来の専門は、第二次大戦後のドイツ外交史である。ノーベル平和賞を受賞した西ドイツ首相であり、ドイツ社会民主党党首であったW.ブランドのソ連・東欧諸国に対する東方政策の研究から、教養部赴任後は、第二次世界大戦後のドイツにおける英国占領地区の政治運動の分析を行っていた。

ただ、人文学部移動後は、従来の非実験講座の研究手法ではなく、実験講座にふさわしい研究手法を導入することにした。当コースが所属していた環境地域論講座〔現文化環境論講座〕は、考古学、文化人類学、人文地理学などのフィールド・ワークを駆使する研究手法と歩調をあわせ、そのフィールドの対象として居留地を選んだ。それとともに新たな試みを導入することとし、当時の人文学部において他コースにはなく、かつ実験的な手法として、インターネ

ットなどの通信ネットワークを教育に導入するということにした。

立川の教育活動は、他者の目から眺められた日本文化を通して、「日本」および「外」を考えていくこと主眼とした。テキストとしては、幕末から明治期に日本を訪れた西洋人たちが記録したもの、あるいは横浜等で外国人によって発行されていた英字新聞などを使用した。それと関連して居留地に関する授業も行い、学生主導で準備を進め平成6（1994）、平成7（1995）年横浜、平成7（1995）、平成8（1996）年神戸、平成9（1997）年函館、平成10（1998）年再び神戸と、ほぼ全員の学生が参加して、かつての居留地でフィールド・ワークを行った。通常4泊5日という短い日程ではあったが、それぞれのテーマについて調査を進めた。その過程で、かなりの学生が卒論のテーマとして居留地を選択することになった。

筒井の教育活動は、筒井の専門がドイツ研究であることから、インターネットを活用したプロジェクトを始めるときにはドイツの大学との共同授業を始めることにした。海外を対象にして研究している学者が、こうした便利なツールを教育研究に使うことの意味は大きい。このプロジェクト（プロジェクト名：DJ50）は、平成7（1995）年10月から平成11（1999）年2月まで、ドイツのデュイスブルク大学などとの間で約四年間継続された。

<http://www.toyama-u.ac.jp/hmt/scs/dj50/dj50j.html>

なお、このプロジェクトは、当時、文科系分野では先駆的な試みであり、平成8年には日本経済新聞社主催の「カレッジイン 文科系ゼミでのインターネットプロジェクト・コンテスト」<http://www.nikkei.co.jp/rcafe/s/cin/award96.html>において、第1位となった。平成8（1996）年当時の地方国立大学が第1位となることができたのは、こうしたツールは地方でもすぐに利用可能であったことのおかげである。地方大学が都市部の大学や私立大学に負けないで存在意義を見せることができるとすれば、何よりもスピードとアイデアが必要である。この受賞はそれを裏付けている。このプロジェクトと平行して、平成8（1996）年には「国際NGOのインターネット利用調査」を全国的に行った。このことから、当コースのテーマとして、NPO/NGOと情

報化との関係が中心になった。

<http://www.toyama-u.ac.jp/hmt/scs/ggp/zemi96.html>

当時の建物は、エアコンもなく、また学生演習室の場所が4階建ての一番端にあったので、真夏には40度近くになることもあった。エアコンは、当時の建物の電源の許容量の制限によって、使用不可能であった。しかし、こうした劣悪な環境にもかかわらず、学生の熱意はかなりのものであった。インターネットブーム勃発直前でもあり、「なにかすごいことが起こるかもしれない」という予感を感じながら、インターネットという怪物と格闘し、時間と空間を越える快感に魅了されていた。

もちろん、こうしたプロジェクトに関わらなかった学生もいたのも確かである。けれども、就職後に研究室を訪問してくれた時に、「学生時代は興味なかったけど、今ならその意味がわかります。もったいないことをした」と言われた時には救われた気持ちがあった。

立川と筒井の二人の異なる学問手法のいずれか（あるいは双方）を学生は選択しながら、コースの特徴を作り上げていった。

平成5（1993）年創設当初の学生は、バンカラと言った形容がぴったりしていた。先輩がなく、また担うべきコースの歴史もない気楽さからリラックスしていた。もちろん、女子学生もいたが、一緒に楽しく過ごしていた。その一方で、筒井のゼミに集まってくる他学部や他コースの学生は、好奇心と熱意の固まりみたいなところがあり、対照的であった。

それはともかく、コースの学生は、スポーツ大会ではよく活躍していた。筋肉の固まりみたいな学生が多数集まり、実績を残していった。スポーツ大会後の宴会でははしゃぎすぎたこともあったが、総じて面白い学生の集まりであった。

平成10（1998）年9月に、立川が国際文化論講座に移籍したのに伴い、10月に林夏生が講師として就任した。彼は、アジアの国際文化交流をテーマにしている。教育では、国際関係論の基礎を中心にして教えている。

林・筒井共に、国際関係論の出身ということもあり、コース名こそ「比較社会論」であるが、実質的には「国際関係論コース」となった。そもそも「比較社会論」という名称は、学部内事情から国際関係論と

いう名称を使えないという理由であった。しかし、比較社会論という名称で運営することで新しいテーマやディシプリンに自由に接近できるメリットがあったのも事実である。そのなかから、筒井がドイツ外交史から、NPO・情報研究へと転換できたのである。

林が、国際関係論の基礎理論やそれをもとにした富山を対照にした実習を行うのに対して、筒井は、NPOや情報ネットワーク社会といった応用的なテーマを扱った。

こうしたコースの教育方針の延長線上で、多くの学生が米国西海岸NPOへのインターンシッププログラムに参加したり、京都や東京でのボランティア・インターンシッププログラムへも参加した。こうした内外での活動が評価されて、北陸電力への環境インターンへも参加したりといった多彩な活動もしている。

また、個別に海外でのスタディーツアーなどにも参加して、自分の将来との関係で考え始める学生も多数出ている。好奇心に溢れ、活発な活動と勉学熱心なところが当コースの学生の特徴である。

卒業後の進路としては、多くは民間企業、地方公務員などに就職している。北陸地区での就職が多いが、他地区での就職者もいる。また、富山大学の大学院以外にも他大学大学院へも進学している学生もいる。

比較社会論コース カリキュラムの現状

(1) 教育目標

比較社会論コースでは、学生各人がそれぞれひとりの「市民」として主体的に現代国際社会に向い合い、積極的に生き抜くことができるよう、下記の点に特に留意して教育を行っている。

1. 旺盛な知的好奇心と積極的な参加態度の養成：当コースでは、現代国際社会にみられる広汎な現現象の中から、学生各人が関心のあるテーマを自由に選択することを許している。そのため、学生を選択するテーマはきわめて広範囲に分散する傾向にあるが、全員が共有できる方法論を習得しながら、互いの報告や議論を通じ互いの研究成果に関心を持つようにさせることで、むしろ各自の研究テーマに限定されない広い知見の獲得や、研究意欲の維持・向上、より積極的な研究への取り組みを促している。

2. 「知識」と「方法」のバランス（応用力の養

成）：当コースでは、個人研究テーマ以外の問題感心に対しても柔軟に対応できる応用力を身につけさせるため、現代国際情勢や主要な分析枠組みに関する正確な「知識」とともに、直接観察からインターネット上のデータベースの利用まで、様々な情報源を有効に組み合わせた現実観察の手法、分析枠組みの選択や適用の仕方、またグループワークの手法などといった「方法」の取得にも、力点を置いている。

3. プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力の向上：当コースでは、学生が各人の暫定的な研究テーマを比較的早期から決め、調査研究と報告を重ねながら問題意識を深めてよい明確なテーマを決定する、という方式をとっている。また、コース教育で習得した知識や方法を相対化し、さらに理解をふかめることができるよう、コースの壁をこえた共同授業や海外行事への参加を積極的に奨励している。こうした機会を学生に多く与えることで、自分と異なる見地に立つ他者に対して正確に情報を伝達し、有意義な討論を実現する訓練としている。

(2) カリキュラム授業の組立と骨格

2-(1) 組立方（主として所属教官が担当するものについて、年次ごと）

印は標準的な履修のタイミング、 印は履修可能なタイミングを示す。

		1年次		2年次		3年次		4年次	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前・後	
コ ー ス 開 講	比較社会概論								
	比較社会論講読								
	比較社会論実習（ ）								
	比較社会論実習（ ）								
	比較社会社会論演習								
	比較社会論特殊講義								
共 通 開 講	卒論指導								
	国際文化入門（ ）								
	文化環境論演習								
	文化環境論講読								

2-(2). 必修の内訳

	授 業 名 称	単 位 数	小 計
概 論 系	比較社会概論	4	10
	国際文化概論(講座共通)	2	
	指定された5種類の概論(考古学、文化人類学、人文地理学、文化構造、比較文学)の中から	4	
講 読 系	比較社会論講読	4	6
	文化環境論講読	2	
実 習 系	比較社会論実習	4	4
演 習 系	比較社会論演習	8	12
	文化環境論演習(講座共通)	4	
特殊講義等	比較社会論特殊講義	6	12
	その他の特殊講義等	6	
	卒業研究	10	10
総 計			54

2-(3). 各授業科目開講コマ数、および開講形態

	授 業 名 称	前期担当者	後期担当者	備 考
コ ー ス 開 講	比較社会概論	A	A・B	
	比較社会論講読	B	B	
	比較社会論実習()	B	B	
	比較社会論実習()	B	B	
	比較社会社会論演習	A	A	
	比較社会論特殊講義	非常勤	非常勤	(集中)
	卒論指導	A・B	A・B	
共 通 開 講	国際文化入門()	A・B	-	
	文化環境論演習	A・B	-	
	文化環境論講読	-	B	

2-(4). コース横断的授業

講座共通の授業として、「国際文化概論」(前期、1コマ、1年生対象)、「文化環境論演習(前期、2コマ、2年生対象)」。いずれも、各コースの担当教官

が分担して開講。教官ごとに内容がばらばらになってしまわないよう、担当教官が随時会合をひらき、全体としての内容に一貫性をもたせるよう努力している。

	主な授業(カッコ内は単位数)とその位置づけ
1年次後期	比較社会概論(2) 比較社会論の手法や主要テーマについて概説。
2年次前期	比較社会概論(2) 1年次後期から継続。 比較社会論講読(2) 分担枠組み = 方法論の習得のための文献講読と、事例研究の参考例としての文献講読の組み合わせ。 比較社会論実習(1) 基礎技術の習得。情報機器の利用、文献検索、プレゼンテーションの基礎など。 比較社会論演習(2) 3年生と合同でグループワーク(文献講読と発表。)
2年次後期	比較社会論講読(2) 前期から継続。 比較社会論実習(1) 前期から習得した技術をもとに、フィールドワークを加えながら、調査報告・議論の練習を重ねる。 比較社会論演習(2) 前期から継続。
3年次前期	比較社会論実習(1) 個人研究報告 = 各人が関心を持つテーマについて調査を進め、順に報告して全体で議論を重ねる(卒業研究の準備段階)。 比較社会論演習(2) 2年生と合同でグループワーク(文献講読と発表)。
3年次後期	比較社会論実習(1) 前期から継続。報告と議論を重ねる中で、各人の卒業研究の方向性を定めていく。 比較社会論演習(2) 前期から継続。
4年次	卒業研究指導中間報告会を何度か開催しつつ、随時指導。 (卒論提出後に発表会を開催)

4. その他(カリキュラム以外の講義など)

学生の研究活動に資すると判断され海外行事には、積極的に参加を奨励している。近年に参加した実績のある海外行事として、下記のようなものがある。

- ・国際連合大学グローバルセミナー(主催:国連大学)
- ・大学生の外務省訪問(主催:外務省)
- ・アメリカでのNPOインターンシッププログラムへの参加(主催:JUCEE)
- ・イギリスでのボランティア・インターンシッププログラムへの参加(主催:UNAJ)
- ・その他、日本での各種NPO団体・企業におけるインターンシッププログラムへの参加

6 比較文学コース

はじめに

昭和24(1949)年、富山大学文理学部文学科が発足したとき、同文学科に創設されたのは哲学、史学、国文、英文、独文の5専攻で、学生定員は40名であった。その後の26年間に20名の学生定員増が認められ総数60名となった。これに伴い学科目の充実がはかられ、昭和49(1974)年には中国文学専攻の新設が認可され、文学科学生定員80名となった。昭和51(1976)年には文理学部改組の機運が高まり、理学科の全国的な理科教育充実による理学部構想に呼応して、文学科も文系独立学部を目指すこととなり、改組に向けた準備委員会が創設された。学部名称は文学部を希望したものの承認が得られそうにもないとの感触もあって、新潟大学に倣って人文学部とすることに決定した。新学部には哲学、史学を核とした人文学科と国文、英文、独文、中文からなる語学文学科を設置、各学科学生定員80名計160名を想定した。その際、2学科とも各講座が従来の専攻制を廃止し、コース制を採ることにし、近接講座が協力して新コースの学生の教育に当たることとした。また各学科に総合コースを設けることとなり、人文学科には比較文化コース、語学文学科には比較文学コースが構想されたのである。

比較文学コースの成立事情

人文学部語学文学科の総合コースとして比較文学

コースを創設しようという構想は、英語学の平田純提案によるものであった。当時、独文専攻の関連授業科目に世界文学があったことも比較文学にとって有利に作用したかもしれない。ちなみに世界文学という概念は、「各国国民文学が独善に陥ぬためには他国の文学に注目すべきであり、時代の趨勢は国民文学より世界文学へと向っている」とした文豪ゲーテの考えに基づく。もっとも独文コースにおける「世界文学」の授業は、集中講義方式をとらざるを得ず、ドイツ文学以外の外国文学の講義を依頼したが、各国文学を網羅することは望むべくもなく、どうしても英文学関係となり、受講生も独文を除くと英文の学生に限定された。しかし受講生が2専攻の学生に限られたとはいえ「世界文学」が専攻の枠を越えて学生の関心を集めたことの意義は大きく、語学文学科の総合コースにふさわしいものとして認められ、より幅の広い各国文学相互の交流を研究の対象とする比較文学コースの創設が決定された。

手元に日本比較文学会が平成5(1993)年に行った、「大学における『比較文学・比較文化』教育に関するアンケート」の調査結果がある。168の教育研究機関(人文系)から寄せられた回答を集計したものである。そのなかから参考までにいくつかの質問と回答を抽出してみよう。

*現在「比較文学・比較文化」あるいはそれに相当する学科・講座が設置されているか。

いる:44/いない:121

*現在「比較文学・比較文化」あるいはそれに相当する授業科目が設置されているか。

いる:129/いない:37

*「比較文学・比較文化」を担当する専任教官が配置されているか。

いる:77/いない:83

*大学院に「比較文学・比較文化」あるいはそれに相当する専修課程あるいはコースが置かれているか。

いる21:/いない:64

*現在検討されている改組には、「比較文学・比較文化」に関する研究教育領域がまれているか。

いる:71/いない:58

*近い将来「比較文学・比較文化」に関する授業科目が開設される見通しはあるか。

ある:64/ない:51

アンケート実施から数年を経ているので状況も変わっているだろうが、これよりさかのぼること15年も前に、一般にはもちろんのこと、ほとんど認知されていなかった「比較文学」のコース設置を構想した人文学部の諸先輩の先見の明に心からの敬意を表したい。

比較文学コースの幕開け

昭和52(1977)年4月、ようやく人文学部が開設され、教員17名でスタートすることになった。完成年度には41名になるはずであったが、新設コースの教員は4年間の年次計画により順次採用されることになったため、人文学科9コース、語学文学科7コースの同時一斉開講は断念せざるを得なかった。すなわち教員が充当されたコースからの開講となった。語学文学科では、朝鮮語・朝鮮文学とロシア語・ロシア文学が当初から教員の充当により新コースとして発足することができたが、問題は比較文学コースであった。

比較文学コースは、構想の段階から総合コースとして語学文学科の全教官がかかわるものとされ、核ともいべき「比較文学概論」は、当面、非常勤講師に委嘱することにしてスタートした。つまり専任教員を欠いたまま教育組織としては、コースが成立してしまっただけである。しかし専攻学生を採る以上責任をもたなければならず、他コースとのバランスも考慮して各コースからそれぞれ一名の教員を比較文学コース担当とし、学生の教育指導に当ることにした。またこれも他コースに倣ってのことだが責任者を置くことになり、コース設立の計画立案に尽力したドイツ文学の提山淑郎が主任に選ばれた。

このようにして曲がりなりにも比較文学コースは、語学文学科の1コースとして門出することになった。そして翌昭和53(1978)年後期に教養課程を修了した10名の第1期生を迎え入れた。

ちなみに初年度の比較文学関係の「講義題目及び講義内容」は次の通りである。

「比較文学概論」、川本皓嗣(東京大学)「明治の詩人と西洋への憧れ」

「比較文学演習」、提山淑郎、「近代国文学とドイツ文学の接点」

「比較文学演習」、山崎幸雄、「現代比較文学の流派」

「比較文学特殊講義」、山口博(現聖徳大学)「閨情詩と恋歌」

なにごとにおいても創成期は苦労が絶えないものであるが、専任教員不在の新設コースの運営は並大抵ではなかった。比較大学コース兼担となった教員は、所属専攻コースと比較文学コース、両方の授業を受け持たなければならず大変だったにちがいない。しかし英文学の故奥田平八郎、国語学の山崎幸雄(現新潟大学)、ロシア文学の矢澤英一など比較文学に造詣の深い教員がいたことも幸いして、昭和56(1981)年3月には無事に卒業生を送り出すことができた。

専任教員の着任

比較文学コースの専任教員不在が解消されたのは、第1回の卒業生を出した昭和56(1981)年、語学文学科に助手定員1名が認められたことによる。この定員は、便宜上英語・英米文学コースに張りついていたが最終的にどのコースに所属されるかは後日決定することになっていた。専任教員が欠けていたのは比較文学コースであったことから、その配属が正式に決まり、同年6月村井文夫が助手として着任した。専任教員の存在はコースの発展にとって、そしてなによりも専攻学生にとって喜ばしいことであったが、教員1名ではあまりにも負担が大きいということで、これまでのように他コースの教員の支援は継続することにした。

同年11月提山淑郎が在外研究員としてドイツへ赴いたのちは、奥田平八郎がコース主任となり、授業計画から卒業論文指導にいたるまできめ細かくコースの運営に尽した。

その後、比較文学コースは語学文学科における人気学科として、毎年、それ相当の専攻学生を抱え、学内外の教員の協力を得て順調に発展していった。とりわけ亀井俊介(昭和54年)、杉田弘子(昭和55年)、芳賀徹(昭和56年)、仙北谷晃一(昭和57年)、大澤吉博(昭和59年)ら東京大学比較文学・比較文化出身の先生方に出講いただいたことは、専攻学生にとって得るところ大であったことだろう。

また3~5名の学内教員によるリレー方式の比較文学入門講座の開設などコースの充実を図るための工夫もなされた。

しかし教員1名の不完全講座の状態は相変わらず続いた。そしてコース開設当初は支援を惜しまなかった他コースの教員も、本来の所属専攻コースの授業との掛け持ちによる無理、創設時の協力申し合わせ事項の空文化、担当教員の移動など諸事情の変化によって比較文学コースから距離を置かざるを得なくなっていた。どうしても重荷は1名の専任教員の肩に架かった。

完全講座の実現

1日も早い完全講座移行が望まれたがなかなか実現しなかった。ようやく希望が叶えられたのは、大学受験者の大幅増に伴い学生定員も臨時的増員され、これに連動するかたちで教員定員増が認められたことによる。昭和62(1987)年、コース創設以来10年の長年月を経て、渡邊洋が併任教授として着任したのは11月で、翌年4月から専任となったが、このとき村井文夫は在外研究員として渡仏中で不在であった。村井が研究期間を延長したこともあって、名実ともに教授、助教授の揃った完全講座にはなったのは平成元(1989)年4月以降であった。それから5年、平成5(1993)年3月までは、専攻学生の多い、バラエティーに富んだコースとして一応無難に推移してきた。

学部改組に伴い新設国際文化学科へ

ところが比較文学コースは、平成5(1993)年の教養部解体に伴う学部改組により、その所属をめぐって重大な選択を迫られることになった。当初は語学文学科所属の他コース同様、言語文化学科へ移行する予定であった。しかし新に開設される国際文化学科の2講座中、環境地域論は充足しているが、国際文化関係論は手薄なので比較文学コースの参画について考慮してもらえないかとの打診があった。比較文学が「文学の国際交流を研究する学問」という意味では「国際文化関係論」という講座名称が全くそぐわないものではなかったし、授業内容や研究対象が変わるわけでもないので、新学科成立に役立つならばと考えると最終的に国際文化学科国際文化関係論講座への所属を決定した。これに伴い村井が新設の言語文化学科フランス言語文化コースへ、代わって教養部でフランス語も担当していた勝野良一が比

較文学コース所属となった。勝野はイタリア語やスペイン語も解し、長年フランス象徴詩と三富朽葉との関係について研究していたので、比較文学の教員として適任であったが、一般教育のフランス語担当教員が専任では勝野以外にいなかったため、比較文学コース所属でありながら比較文学の授業はをせいぜい1コマしか担当できなかった。したがってこの段階でも、比較文学コースは片肺飛行を余儀なくされたのである。この状態は平成10(1998)年3月、勝野が停年退官するまで続いた。この間、他コースなみに授業を開講するには非常勤講師に依存せざるを得なかった。地元に適任者、〔故布村弘(高岡法科大学)、八木光昭(洗足学園魚津短期大学)〕がいたことは幸いであった。これに前・後学期各1回の集中講義を実施することによってなんとか授業時間の不足を補ってきた。

国際文化関係講座から文化環境論講座へ

そこへ二度目の選択を迫られる事態が生じた。すなわち平成8(1996)年に浮上した小改組における比較文学コースの所属の問題であった。国際文化学科では環境地域論講座を文化環境論講座に、国際文化関係論講座を国際文化論講座にすることになった。当初、比較文学コースとしては、国際文化関係論の発展的解消を機に言語文化学科への復帰を希望した。しかしこれを文部省が認めないとのことで国際文化学科への残留は決まったが、いずれの講座に所属するか、二者択一となった。国際文化関係論から国際文化論への講座名称変更であれば問題なかったのであるが、国際文化論講座は国際文化論コースのみの一講座一コース制を採ることになったので比較文学の名を冠しての参入は不可能であった。その結果、平成9(1997)年4月から文化環境論講座所属となり、先に記したように平成10(1998)年3月、勝野良一が退官し、4月、跡上史郎が赴任し今日にいたっている。所属選択の是非はわからない。少なくとも平成8(1996)年の時点においては「比較文学コース」であり続けたいと思ったからである。比較文学は、国文学を基盤に据えるものの他国文学、他文化領域との関係を視野に入れて研究しなければならないことから、複数の外国語および文学史、理想的には文化史の基礎知識を要求される学問であ

る。そのため学部段階での専門的研究は難しいといわれてきた。しかし昨今、教養教育で比較文学の授業を実施する大学が増えている。アメリカのように比較文学部や比較文学科の設置の望めないの、せめて教養課程でこの学問の概略だけでも知ってもらおうということなのか、あるいは学際化、国際化を標榜する大学にとって格好の授業科目、名称だからだろうか。理由はさておき比較文学が立派に市民権を得て、年々学習人口を増やしていることは事実である。なににつけても陽あたりのよくない北陸の一地方大学にせつかく灯されたこの学問の灯を消すことはないとも思っている。もっとも今後についてはのちの人が考えることだろう。

卒業生の動向

昭和56（1981）年3月に最初の卒業生10名を送り出してから本年（平成11年）3月第19回卒業の1名を加えて総数171名に達した。平均するとちょうど年に9名が比較文学コースから社会へ巣立ったことになるが、かつて英文、国文コースに次ぐ15名の卒業生を数えたことなど信じられないほどのこの2、3年は専攻学生が激減している。現在、比較文学コースに在籍しているのは、大学院生1名、4年生4名、3年生3名、2年生2名の計10名である。なお大学院修士課程で比較文学を専攻し、修了したのは6名で、このなかには他大学出身者もあり、また修了後、他大学の大学院博士課程へ進学した者もいる。

ところで「卒業生の動向」という見出しを掲げたものの、171名の消息を把握しているわけではもちろんない。もっぱら手がかりは人文学部同窓会発行の卒業生名簿である。最新の平成10年度版を一瞥したところ、なんとといっても一番多いのは各種民間企業への就職であるが、卒業生の大半が女性であることからその後家庭に入った者も多いことだろうし、現時点においてどのように変動しているかわからない。卒業年次が比較的古い時期、平成2（1990）年ころまでの場合、これは他コースについてもいえることだろうが教職関係に携わる者が目立つ。教員採用が難しくなっている近年は、公務員志望者が増え、難関を突破しているものもある。変わったところでは公認会計士、歯科医師、スチュワーデス、俳優などであろうか。

卒業生と教員および在校生との親交は、個人的なものにかぎられているようである。平成4（1992）年8月、はじめての同窓会が開催されたが出席者は少なかった。しかし昨今の「藤村を訪ねて」のゼミ旅行への卒業生の参加希望は数名あった。実際には仕事の都合などで参加できたのは2名だけだったが、今後、様々な機会をつくり、同窓生の交友の輪が広がることを期待している。

比較文学コース カリキュラムの現状

・教育目標

比較文学は、大半の学生にとって大学入学後にはじめて接する学問であるうえに、影響、受容、ジャンル、翻訳、さらには諸芸術および他学問分野と文学との関係と研究範囲は多岐にわたる。したがってまず「比較文学とはどんな学問であるのか」、「なぜ文学研究にとって必須の基礎的学問であるのか」について認識してもらい、グローバルな観点に立って「文学を総合的に把握する」学問であることへの理解を目指す。さしあたっては比較文学的方法論を用いて卒業論文を執筆できるようにすることである。

・授業の組み立て

(1) 折衷方式

(2) 必須の内訳

概論（4）

演習（8）

講読（8）

特殊講義（10）

卒業研究（10）

(3) 開講コマ数および開講形態など

上記のとおり研究の対象範囲が広いと専任教員2名では到底そのすべてをカバーすることはできない。現状は専任教員各3コマ、非常勤講師（毎週1コマと前・後期集中）、原則として全授業半期制。

(4) コース横断的授業

学科、講座共通授業として「国際文化入門」、「文化環境論演習」がある。

・各授業の位置付け、受講実態および卒業研究

概論：広範囲にわたるこの学問の全容を詳細に述べることはできないので主として1年次学生を対象に「比較文学とは何か」について講義している。受講生数は年によって異なるが平均して70～80名で総

じて熱心に聴講している。

演習：国内外の比較文学に関する論文を題材に学生に発表してもらい、テーマを選んで討論する。受講生はほとんど専攻生。

講読：日本文学と外国との関係を取り上げたテキスト（たとえば太田三郎『近代作家と西欧』、村松剛『西欧との対決』など）を読みながら、わが国文学と外国とのかわりについて考察する。使用テキストによって他コース学生が受講することもある。

特殊講義：先に掲げたように影響、受容、ジャンル、翻訳などこの学問の幅広い研究対象のなかからひとつを選択し、順繰りに講義している。また集中講義の場合、依頼した教官の研究課題に則した講義をしてもらうことが多い。

おおむね授業態度は真面目であるが、とりわけ専攻生以外の受講が少ない演習、講読は少人数クラスで、それだけによく勉強したうえで出席している。

卒業研究は、2年次および3年次において演習や講読の授業を通して学生各自が関心を抱いた作家を取り上げているようである。昨今の就職難のため取りかかるのがかつてに比べ大幅に遅くなっている点が懸念されるがこれはやむを得ないことだろう。したがって就職活動と同時平行的に参考資料のリストアップ、収集に努め、就職決定後ただちに執筆できるよう指導している。しかし実際には10月になって書きはじめ期限ぎりぎりに提出しているのが実情のようである。

卒業研究に関しては、4～5月は作家あるいはテーマ選択の動機について、6～7月は参考文献、資料の収集について、9～10月は章分けおよび構成、最後に論文の書き方について指導している。

・その他

卒業論文の中間発表、完成発表、またゼミ旅行は何度か試みたことはあるが、残念ながらコースの公式行事として定着するにはいたっていない。

第3節 言語文化学科

1 日本言語文化コース

富山大学が発足した当初、文理学部には古典文学

第1・第2講座が設けられた。古典文学は、国文学と中国文学を併せ称するもので、第1講座は国語学と国文学、第2講座は中国文学と中国思想を内容としていた。

旧制富山高等学校に在職した教官は、昭和24年度と25年度にわたり、富山大学の教官として発令されて、文理学部に所属した。国文学には大島文雄教授と村上広之助教授、中国文学には下斗米晟教授と毛利勉助教授がいて、さらに中塩清之助教授が富山薬学専門学校から転じた。大島と下斗米が24(1949)年6月30日、村上が25(1950)年3月31日、中塩が同4月1日、毛利が26(1951)年3月31日に着任している。

大島は、明治35(1902)年に富山市で生まれ、旧制富山中学から旧制四校を経て、東京帝国大学の国文科を卒業。翌年、旧制富山高等学校教授になった。研究は、『万葉集』を中心に行い、『万葉集』を精神史あるいは思想史の観点から考究している。また、『源氏物語』や国学にも研究が及び、主な論文に「国学思想研究」(昭和8年)、「下河辺長流の万葉研究」(同26年)、「下河辺長流の歌」(同27年)、「下河辺長流の古典註釈」(同27年)、「国文学の精神」(同42年)、「俳人浪化」(同43年)、「大伴家持の歌」(同43年)などがある。昭和43(1968)年に停年退官した後は、富山女子短期大学教授を務めた。富山市名誉市民に選ばれている。また、大島は歌人でもあり、昭和38(1963)年には還暦記念の歌文集『冬』を上梓している。平成2(1990)年の米寿を記念した文集『卯の花月』が最後の著作になり、翌3(1991)年9月5日に没した。

村上広之は、昭和26(1951)年8月28日まで在職し、逝去している。

中塩清之助は、号を清臣という。大正2(1913)年に富山市で生まれ、国学院大学の大学院を修了。折口信夫から国文学や民俗学を学んだ。富山薬学専門学校教授を経て、文理学部助教授になった。主な論文に、「巫祝文学史の回転軸」「女神考」「古代結婚の文学形象」「古典文芸の構造変容」「源氏物語の発生学」「夕顔の巻から天の夕顔へ」「枕草子の座標」「清少納言の流離譚」「平家物語の伝承構造」「常磐姫物語の発生基層」「好色一代男の民俗学」などがあるが、これらの多岐にわたる成果は、昭和43

(1968)年に『日本文学構造論』(角川書店)として刊行された。ほかに、『芸能構造史の研究』(風間書房)がある。この間、昭和35(1960)年には文学博士の学位を得ている。また、歌人としての活動も豊富で、昭和27(1952)年に「日本歌人」の同人となり、昭和40(1965)年には歌集『方円抄』を残している。昭和32(1957)年5月31日まで在職して北海道学芸大学へ移り、昭和46(1971)年2月15日に病氣のために急逝した。

さて、文理学部では、昭和30年度に講座の改称と改組を行い、古典文学は「国文学及び中国文学」と改められた。昭和36年度になると、「国文学及び中国文学」はさらに名称を変更して、「国文学」と改められた。これは、中国文学を担当していた下斗米晟教授の停年退官を機に、国文学・中国文学並列の形から国文学を中心とするものに改め、後任を国文学担当の教員にしたことによる。その後、昭和38(1963)年に文部省は従来の講座を省令によって認めることとし、これによって講座の名称を「国語学講座・国文学講座」と改めた。

手崎政男は、大正3(1914)年に婦負郡四方町(現在は富山市)に生まれ、昭和12(1937)年に東京帝国大学の国文科を卒業。昭和32(1957)年4月1日に助教授として着任した。日本文学史論を研究テーマとし、その対象は専攻する中世から広く古代に及んでいる。著書に、『有心』(八雲書林、昭和19年)、『西行・定家・実朝』(さえら書房、昭和33年)、『有心と幽玄』(笠間書院、昭和60年)などがあり、殊に藤原定家の有心の研究に成果を上げた。また、国語教育に関する業績も多い。その一方で、文理学部から人文学部にわたり学部長を務めている。昭和55(1980)年に定年退官の後は鶴見大学教授を務めた。

山口博(1932年生まれ)は、東京都立大学大学院博士課程修了後、昭和36(1961)年4月1日に講師として着任した。平安朝の和歌や物語を中心にしながら、万葉集の成立論にも言及している。主な著書には、学位論文になった『王朝歌壇の研究・村上冷泉円融朝篇』(桜楓社、昭和42年)以下、『同宇多醍醐朱雀朝篇』(同、昭和48年)、『同桓武仁明光孝篇』(同、昭和57年)の三部と、別巻『同蔵人補任』(同、昭和54年)がある。山口は、王朝歌壇を撰閲家の歌壇と下級官僚の歌壇の二潮流から成ると考え、歴史

社会学な視点と考証による大きな成果を得た。そのほかにも、『閨怨の詩人小野小町』(三省堂選書、昭和54年)、『万葉集形成の謎』(桜楓社、昭和58年)、『万葉の歌 人と風土・北陸』(保育社、昭和60年)、『古典でたどる日本サラリーマン事情』(PHP研究所、昭和63年)、『愛の歌 日本と中国』(新典社、平成元年)など、著作は多方面にわたっている。近年は、日中比較文学論研究にも意欲を示す。高岡市の万葉歴史館の設立に尽力し、また狂言にも造詣が深かった。平成3(1991)年3月31日まで在職して新潟大学人文学部へ移り、停年後は聖徳大学教授を務めている。

山崎幸雄(1945年生まれ)は、東京大学大学院博士課程を修了後、昭和49(1974)年12月1日に講師として着任した。専門は言語学だが、その対象は広く一般言語学・比較言語学・国語史・意味論・変形文法から比較文化論にまで及んだ。助教授に昇任し、昭和57(1982)年9月30日まで在職して新潟大学人文学部へ転出した。

昭和55(1980)年4月1日には、都竹通年雄と山口幸祐が着任した。都竹(1920年生まれ)は、東京都立大学大学院修士課程を修了し、また三省堂の国語辞典や古語辞典の執筆にも携わっていた。教授として迎えられ、国語学を担当したが、その方言区画論は高く評価された。著書に『文字教育』、論文に「日本語の方言区分けと新潟県方言」(『国語』第3号、昭和24年)などがある。停年を翌年に控えた昭和59(1984)年8月2日、郷里の川で遊泳中に不慮の死を遂げた。

山口幸祐(1949年生まれ)は、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程の単位取得後、講師として着任した。山口は、明治・大正時代の作家・作品・文学史研究を領分とし、小説言語の分析方法、作家論と作品論の関係を中心に、ことば・文学・文化の諸相を視野に入れて考えている。著書に、『現代日本文学の流れ』(桜楓社、昭和59年、共著)、『芥川龍之介事典』(明治書院、昭和60年、共著)論文に、「『暗夜行路・前篇第一』の世界 謙作と阪口(または、冒頭と末尾)」(『日本文学』平成4年9月号)、『志賀直哉「和解」 鎮魂 のモチーフによる試論』(『近代文学作品論叢書・志賀直哉「和解」 作品論集成』大空社、平成10年)などがある。また、

近年は、宮沢賢治のほか明治期少年文学史や大正期児童文学研究にも関心を寄せている。平成5(1993)年4月1日付けで教授に昇任した。

山崎の後任には、釘貫亨(1954年生まれ)が昭和57(1982)年4月1日に講師として着任した。釘貫は、東北大学大学院文学研究科博士課程を修了。専門は、国語史と上代音韻で、平成8(1996)年に『古代日本語の形態変化』(和泉書院)を上梓している。また、教養部へも長く出講し、『万葉集』を講じた。助教授昇任後、平成5(1993)年9月30日まで在職して、名古屋大学文学部へ転出した。

都竹の後任には、半年後の昭和60(1985)年4月1日に川本栄一郎(1927年生まれ)が教授として着任した。川本は、東北大学大学院を修了し、金沢大学および弘前大学の教授を務めている。国語学を専攻し、青森県や富山・石川両県の方言の言語地理学的研究をテーマとした。主な論文に、「幕末の『獄中記』に見られるズーズー弁とガ行鼻濁音」(『国語学』第91号、昭和47年)、「東北方言の感情語・形容語彙・青森県大畑町赤川方言」(『講座日本語の語彙』8、明治書院、昭和47年)、「富山県における『ぶり』の成長段階名の分布と変遷」(『富山大学人文学部紀要』第14号、平成元年)などがある。また、授業では近世の洒落本を取り上げて国語学的な分析を行っている。平成5(1993)年3月31日で停年退官した。

山口博の後任には、京都大学大学院文学研究科博士課程の単位を取得した田村俊介(1961年生まれ)が講師として着任した。田村の専門分野は日本古典文学で、『源氏物語』『伊勢物語』『白露』などを研究課題としている。殊に、『源氏物語』では、昭和25(1950)年に『文学』に発表され、以後学会の注目を集めた武田宗俊の玉鬘系後記説を、『伊勢物語』や『宇津保物語』との比較検討などによって、批判的に発展させることを目指している。また、従来ほとんど知られることのなかった中世の擬古物語『白露』については、『北陸古典研究』に評釈を共著で連載している。平成6(1994)年に助教授に昇任した。

平成5(1993)年4月1日には、教養部の廃止に伴って二村文人助教授(1952年生まれ)が着任した。二村は、東京都立大学大学院人文科学研究科を単位

取得満期退学後、高等学校の教員を経て、平成3(1991)年4月1日に教養部へ助教授として赴任した。近世文学を専攻し、主に落語・講談を中心とした舌耕文学と、連句を中心とした俳諧を研究している。編著に、『連句 理解・鑑賞・実作』(おうふう、平成11年)、叢書江戸文庫『原典落語集』(国書刊行会、同年)などがある。また、平成4(1992)年には富山出身の国文学者志田延義氏を会長に迎えて富山県連句協会の設立に参加している。平成9(1997)年に教授に昇任した。なお、教養部には二村の前任に稲田篤信(現東京都立大学人文学部教授)、その前任に木越治(現金沢大学文学部教授)が在職した。いずれも近世日本文学を専攻し、学内非常勤として人文学部へ出講している。

川本の後任には、平成5(1993)年4月1日に齋藤孝滋(1962年生まれ)が講師として着任した。齋藤は、東北大学大学院文学研究科博士後期課程を退学後、東北大学文学部日本語学科の助手を務めていた。専攻は日本語学で、社会言語学的方法と記述的方法による方言学を研究テーマとしていた。平成7(1995)年に助教授に昇任し、平成10(1998)年3月31日まで在職してフェリス女学院大学文学部へ転出した。

釘貫の後任には、平成5年10月1日に小助川貞次(1956年生まれ)が助教授として着任した。小助川は、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程を中途退学し、北海道大学文学部の助手を務めていた。専門分野は国語学で、上野本漢書楊雄伝天曆二年点の総合的研究、平安鎌倉時代における漢文訓読の方法についての実証的研究、日本国内に現存する文選古鈔本の原本調査に基づく文選訓読についての総合的研究を課題としている。平成7(1995)年には、「上野本漢書楊雄伝の声点について」(『国語国文研究』第86号、平成2年)ならびに「文選テキストとして見た上野本漢書楊雄伝天曆二年点」(『訓点語と訓点資料』第94輯、平成6年)に対して、第13回新村出記念財団研究助成金が贈られた。

齋藤の後任には、天理大学附属天理参考館博物館学芸員の中井精一(1962年生まれ)が、平成10(1998)年5月1日に助教授として着任した。中井は、大阪外国語大学大学院日本語学専攻を修了し、言語地理学と社会言語学を専攻している。前者では

日本語の地域的変種（方言）を、日本の地域性や歴史、文化に照らし合わせて考えること、後者ではことばの社会的変種、特にマイノリティ集団の言語行動に注目し、その運用や体系について考えることを目指している。編著の『「奈良県風俗誌」(26類)言語 国中地域編』(平成10年)が、新村出記念財団刊行助成図書になった。また、平成4年には「奈良県南部の過疎対策について」で毎日新聞郷土提言賞(奈良県知事賞)を受賞している。

以上のように、現在は山口幸祐・二村文人・小助川貞次・田村俊介・中井精一の5名が日本言語文化コースの運営に当たっている。

学生は、各学年ともコースの定員あるいはそれを超える十数名が常時在籍し、近年は文学だけでなく、語学にも関心を寄せる者が増えている。卒業生の中には、中学校や高等学校の国語の教員として活躍している者も少なくない。また、大学院は日本語学と日本文学の二つの研究分野から成るが、すでに十余名の修了者を送り出している。

日本語文化コース カリキュラムの現状

(1) 教育目標

日本語学と日本文学の二つの専門分野について、古い時代の日本語から現代語および方言、古典から明治・大正の文学まで、幅広い知識を身につけた上で、自身の関心に則したテーマを選んで卒業研究を行う。卒業研究の課程では、方法論や研究史に目を配り、資料の扱い方に習熟し、またフィールド・ワークを行うなど、個別の問題に応じた指導を通して、学部学生として一定の到達点を目指すことができるように心がけている。

(2) 授業の組み立ての骨格

組立方

- 1年次 概論
- 2年次 概論・文学史・演習・講読・特殊講義
- 3年次 概論・文学史・演習・講読・特殊講義
- 4年次 卒業研究

* 積み重ね方式と分散形式の折衷と思われる。

必修の内訳

概論(4)、文学史(6)、演習(14)、講読(10)、特殊講義(12)、卒業研究(10) 計56単位

各授業科目開講コマ数、および開講形態

原則として、教員は毎期、演習・講読・講義(概論・文学史を含む)を各1コマ担当する。

日本語学概論と日本文学史については、それぞれ、日本語学と日本文学の教員が交代で担当している。

非常勤講師は、古代・中世・現代文学や文法など、専任教員の専門分野以外の領域を補うことを第一義に考えている。

コース横断的授業

日本語学概論は、従来高等学校で学ぶ機会の少ない日本語の歴史や方言についての理解を深めることを目指しており、入門・紹介的な意味合いを持たせている。

また、中国言語文化コースの非常勤枠の1つを「日本東洋言語文化特殊講義」として、講座に共通する性格を持たせた授業科目にしている。

(3) 各授業の位置付け

本コースには、専任教員が5名おり、原則としてそれぞれが演習・講読・講義を開講している。それに非常勤を加えると、常時15コマを超える授業が行われており、学生は、その中から自分の興味に応じて自由に選択している。

授業の内容は、各教員の専門分野、あるいはそれに隣接する領域が取り上げられることが多く、それ以外に格別の調整はしていない。むしろ、同じ授業に2年生から4年生まで学生が参加することによって、上級生が指導的な姿勢を示し、下級生の意義が高められることを期待している。

数年前までは、専門移行の時点で語学専攻と文学専攻に分けて受け入れていたが、現在は卒業研究の題目を提出する段階で選択させている。2・3年次に幅広く授業を受ける中で、学生が自覚的に専攻を決定するのがよいと考えている。なお、必修科目については、語学と文学のどちらかを主にして履修するよう指導している。

卒業研究は、各教員が個別に指導し、演習形式による中間発表などが行われているが、コース全体での発表会は、現在のところない。

(4) その他

合宿などは行っていないが、方言調査のフィールド・ワークが、全員参加ではないものの、それに近い役割を果たしているかと思う。

2 朝鮮語・朝鮮文学コース

(1) 朝鮮語・朝鮮文学コース沿革概観

日本と朝鮮は一衣帯水を隔てるのみ、古代より深い関係にあった。古代はもとより、近世に至るまで、日本は朝鮮の文化的影響を深く受けて来た。両国は善隣友好の関係の方が長かったのであるが、豊臣秀吉による16世紀末の朝鮮侵略や今世紀前半の朝鮮支配は、朝鮮側に大きなしこりとなって残っている。日本の敗戦後は朝鮮学はほとんど等閑に付され、僅かに歴史学、そしてさらに少なく語学・文学の火種が存するような状態であった。

昭和40(1965)年に断交状態にあった日本と韓国との間に国交が開始された。これが戦後の朝鮮学研究を進める、大きな契機となった。すでに同38(1963)年に大阪外国語大学に朝鮮語学科が創設され、仄聞する所では同年に東京外国語大学に同学科が設けられる予定であったが、諸般の困難な事情のために、同52(1977)年に実現した。私立大学では昭和元(1926)年より天理大学に朝鮮語学科があり、朝鮮語の命脈継承に大いに寄与して来た。国立大学では3番目として、富山大学に朝鮮語・朝鮮文学コース(以下「朝文コース」と略称)が昭和53(1978)年に発足したのである。両外国語大学が朝鮮語学科で、専ら実用を旨とするのに対して、わが朝文コースは、語学と文学の研究が主眼であり、性格を異にする。

従来富山大学には文理学部があったが、52年度に人文学部と理学部に改組するに当たって、今後は日本海対岸の国々を重視する学科を作り、それを人文学部の一つの柱にしようということで、すでにある中国語・中国文学コース(以下「中文コース」と略称)の他に、朝文コースとロシア語・ロシア文学コース(以下「ロ文コース」と略称)が設けられたと聞く。

当時朝文コースの人選に当たられた方によると、容易ではなかったという。藤本幸夫(昭和16年生)

は京都大学文学部言語学科博士課程を修了し、ハングル学会およびソウル大学校文科大学言語学科に3年間留学、オーバードクター2年を経た後、大阪大学文学部国語学講座の助手として勤めていた。当時朝鮮語学の研究者は、藤本より年上に数名おられたが、いずれも職に就いておられた。そこで助教授として藤本の採用は、比較的容易に決まった。問題は教授であった。文学研究者は語学研究者よりも少なく、2名ほどおられたが、やはり職を得ておられて就任は無理であった。そこで探し求めた結果、梶井陟(昭和2年生)が浮上した。梶井は東京第一師範学校卒業で、理科の教諭として中学校に奉職し、当時東京都練馬区立貫井中学校の教諭であった。梶井は東京都立朝鮮人中学校教諭時に朝鮮語の学習を始め、『朝鮮語入門』(日朝協会、昭和27年)『新しい朝鮮語の学習』(学友書房、昭和29年)の著書や、現代文学関係の論文があった。梶井の遺品中には、刻苦精励して朝鮮語を学ぶ痕跡を止めるノートがあり、見る者の心を打つ。聞くところによると、中学教諭を大学教授に迎えることに反対する向きもあったようだが、期日も迫り、適者もないので梶井を迎えることに決定した。赴任直後の「富山新聞」と「毎日新聞」に、中学校教師から大学教授にと紹介されている。

梶井と藤本は互いに名前を聞いていたが、昭和53(1978)年4月1日赴任後に初めて面晤を得た。両人はこのコースを日本の朝鮮学研究の中心とし、学生の教育に力を注ぐことを話し合った。梶井は為人温厚で、学部内の信望厚く、学生を可愛がり、学生からも慕われた。

担当は梶井が文学、藤本が語学で、それぞれが講読・演習・概論を持ち、文法は交互に、会話は藤本が担当した。梶井は近・現代朝鮮文学と在日朝鮮人文学を、藤本は中世語を中心に授業を行った。その他に集中講義があり、後述のごとく学部より種々の配慮に与った。4月1日に赴任したが、専門移行は10月のため、半年は準備期間に充てた。当時教養部新校舎建設中で、経済学部向かいの旧人文棟には教養部の教官も同居しており、我々は仮の部屋を与えられた。秋の校舎完成と共にまた部屋を移らねばならないため、荷はほどかずにそのままにしておき、9月に3階の部屋に落ち着いた。着任の時に与えら

れたのは、スチール製の机・椅子・ロッカー・本箱各1基で、書籍を多く所有する兩人にとっては置き場もなかった。幸い教養部の方々が新校舎には新しい本棚があるため、旧制高校時代の木製本棚を置いてゆかれた。8段の前後両面に棚のあるしっかりしたのも多く、持ち主と交渉して入手した。

当時学生は2人・2人・1人・0人という状態で、今日とも大きくは異なっていないが、授業は個人授業のようであり、錚々たる講師の方々に来ていただいたが、誠に贅沢なことであった。学生が少ないだけに相互間の接触も厚く、和気藹々たる雰囲気自然と醸成され、それは今日まで伝統として続いている。当時人文学部教官は40人と今日の半分であり、中文コースと隣接しているため、教官学生間に交流も頻繁であった。口文コースとは野球大会の時合同でチームを形成したため、行き来があった。梶井は還暦間近まで野球大会に出場していたが、ゴロを拾い損ねて指を折り、数日入院したこともあった。

中文・口文とはカリキュラムの面でも歩調を揃え、改定がある時には鳩首して商議した。

コース運営も順調に軌道に乗った昭和63(1988)年9月9日に、梶井が長逝するという思いもかけぬ不幸に見舞われた。昭和60(1985)年ころより時に下腹部の疼痛を感じていたが、それも一過性であったため、大病とは見做されなかった。7月15日に入院、8月8日に手術、そして重陽の日に逝去した。葬儀は12日午後1時半より、セレモニーホール富山でとり行われた。梶井については『季刊ソウル 東京』第12号に9人の哀悼文や略歴・業績が収められている。コースにとってはもとより、学部にとっても大きな損失であった。しかしコースや学生のためには、次の人事を至急に進めねばならなかった。平成元(1989)年1月1日付で藤本を教授に昇任せしめ、2月の教授会で後任には油谷幸利に決まった。

元来文学担当の後任者であるため、文学研究者を採るべきであったが、適任者がいず、語学専攻の油谷となったのである。油谷は当時天理大学朝鮮学科の講師であった。元年の4月は無理としても、後期の赴任を希望した。しかし天理大学では授業は通年のため、学期中の転出は認められないということで、結局平成2(1990)年4月1日助教授で赴任した。

油谷は京都大学文学部言語学科博士課程を2年で中退し、天理大学に奉職した。その間韓国ソウル大学校文理工科大学国語国文学科に1年留学している。油谷は現代語学が専門で、特にコンピュータによる朝鮮語研究の先駆者と言える。学生にはコンピュータの指導も行った。油谷が言語担当となったので、藤本は文学担当となった。

梶井の多数の蔵書は、令夫人梶井チカ子氏および御遺族の御好意で、昭和63(1988)年10月中旬朝文コースに寄贈されることになった。研究室および西田地方官舎の御蔵書をすべていただき、その上整理費として5万円いただいた。これはなしくずしに使うべきではないと考え、コース用の写真機を購入した。従来藤本が個人の写真機でコースの記録写真をとって来たが、その後はこの写真機によっている。蔵書は図書館最上階に置き、教官と学生とで図書カードを作り、油谷の指導下にコンピュータに入力した。作業は平成元(1989)年から始めて同4(1992)年秋には、一応すべての入力は終了した。しかしその後修士課程に入学した植田晃次が現物と対照すると、甚だ不完全な箇所が多く、同君がすべて訂正してくれた。その成果は6(1994)年3月に『梶井文庫目録』として出版された。本目録の出版に際しては、学部より出版費をお出しいただいた。これまた梶井の人徳の致すところであろう。この目録は国内外の研究機関や個人に配布し、好評を得た。今も目録の請求を受けることがあり、その蔵書は学外者の閲覧希望がある。雑誌類だけはまだ箱詰めの状態にあり、利用に供し得ない。これら書籍は当初より図書館側に「梶井文庫」として一括別置を希望して来た。図書館側からは特別扱いはむつかしいと難色を示されたが、今日ようやくその実現を見ることになり、誠に喜ばしく、故人および御遺族の好意に副い得たと思う。

油谷は学生をよく指導し、学生もよく慕ったが、平成4(1992)年10月乞われて愛知教育大学に移った。これまた学部およびコースにとって痛手であったが、現代日本語研究者の多い同大学で、互いに研磨しつつ朝鮮語の研究を深めたいと希望する同氏を、止める訳にはゆかなかった。油谷は同大学に居ながらも、『梶井文庫目録』の完成に尽力してくれ、その貢献は甚だ大きい。

油谷の後任として平成4(1992)年11月15日付で、岸田文隆が講師として赴任した。岸田採用時には、訳学関係(満州語)の論文が多くを占めているため、選考委員中の某教授より、これは満州語学であって朝文に採用はならぬと強硬なる反対を受けて、一悶着があった。藤本は教授会において、訳学研究でソウル大学校国語国文学科より博士号を取得している幾例かを挙げ、訳学研究も朝鮮語学の一分野であることを説明し、ほとんど満場一致で教授会の承認を得た。岸田は大阪外国語大学朝鮮語学科出身で、同大学修士課程を終えた後、京都大学文学部言語学科で修士・博士課程を修了している。岸田は近世朝鮮語、訳学(満州語)や漂流民の言語等を主に研究し、授業を行った。やはり人柄がよく朴訥で、学生に好まれた。学科の運営によく協力し、後述の朝鮮学会大会時には諸事に尽瘁してくれた。

ところが平成11(1999)年4月1日より岸田は母校の大阪外国語大学朝鮮語学科に助教授で転任することになった。朝文コースにとっては傷手ではあるが、母校にとっては誠に希ましいことと賛意を表した。その後任として和田とも美が11(1999)年4月1日付で赴任した。和田は東京外国語大学朝鮮語学科を卒業し、修士課程を修めた後、ソウル大学校人文学部国語国文学科の博士課程に4年間学び、11年2月に修了した。専攻は近・現代文学で、これで梶井以来10年ぶりに文学研究者を得たことになる。藤本は文学担当から言語担当にもどった。

朝文コースは口文コースと共に、外国人専任講師を得たいと申請を続けて来た。口文コースより昭和末年か平成の初めころに、外国人非常勤講師が非常に求めにくいので、是非専任講師を得たいので、朝文コースは申請を見合わせてほしい旨の申し出があった。口文コースの窮状に同情すると共に、当時朝文・口文を人文学部の大きな柱として充実させたいという動きがあったので、日本人教官のもう一人の獲得に方向を転換することにした。というのは、同一コースに教官が3名いれば、課程認定が得られ、朝鮮語の教員免許がとれるからである。直ちには教員として採用が困難であっても、将来どのように社会が動くか判らず、是非それを実現したいものと望んでいるが、現在の状況では困難としか言えない。

藤本は朝文コース創設時より今日に至るまで奉職

しているが、その間昭和54(1979)年9月より翌年2月まで東洋文庫に内地留学、また59(1984)年4月より翌年3月まで、日本学術振興会流動研究員として東京大学東洋文化研究所に行く予定であったが、その間の4月から6月までは持病を悪化させて入院した。梶井逝去後の激務によって、平成元(1989)年4月から7月にかけて再入院した。平成3(1991)年9月より翌年2月にかけて、やはり東洋文化研究所に内地留学した。内地留学時にはその前後の学期に余分に授業したり、帰富後に集中的に授業したりしたが、何かと学部より配慮に与っている。これらの内地留学は、東京にある朝鮮本の調査であり、どうしても原本を見なければならぬからであった。

岸田は平成9(1997)年後期に、ソウル大学校文科大学言語学科に6カ月出張した。

さらに一言付すべきは、平成8(1996)年10月5日(土)・6日(日)の両日にわたって、第47回朝鮮学会大会が開催されたことである。5日の午後は黒田講堂で、藤本の「朝鮮書誌学の諸問題」、次にかつての同僚であった秋山進午氏の講演がそれぞれあった。夜は生協会館で懇親会が催され、学生たちにとっても多くの朝鮮学の学者に接するよい機会であった。翌6日は朝9時より語文棟で2会場に分けて研究会があり、朝文演習室は休憩場となった。

朝鮮学会大会は通常は天理大学で催され、他所に出たのは20数年ぶりであった。梶井在世中に富山で開こうという声が幹事会で上がり、藤本は梶井が停年になる前に富山で実現し、講演に臨んでもらうつもりでいたが、諸般の事情でそれが実現できなかったのは残念に思っている。富山での大会時には、在学生の他に先輩も駆けつけ、岸田の尽力も大きかった。

(2) 非常勤講師について

朝文コースで迎えた非常勤講師は次表の如くである。

昭和53年度後期より朝文コースの授業は開始した。朝文コースの授業内容は、教官4人と外国人専任講師のいるコースと同様に定められていたため、梶井・藤本で担当するのは随分な負担であった。そこで手崎政男学部長をはじめとする学部の御配慮

年 度	講 師 名
昭和53年度後期	大江孝男・井上秀雄・渡部学
54年度後期	旗田魏・中村完・大谷森繁
55年度前期	梅田博之・三枝寿勝
後期	濱田敦・長璋吉・梶村秀樹
56年度前期	金泰俊(会)
後期	金泰俊(会)・菅野裕臣・大村益夫・北村直人
57年度前期	成百仁(会)
後期	李(会)・青山秀夫・大谷森繁・三浦国雄
58年度前期	李元植(会)・武田幸男
後期	崔応久(会)・三枝寿勝・吉田宏志
59年度前期	尹学準(会)
後期	康仁善(会)・油谷幸利・大村益夫・西谷正
60年度前期	康仁善(会)・宮嶋博史(史共)
後期	康仁善(会)・大江孝男・長璋吉・菊竹淳一
61年度前期	梁昊淵(会)
後期	金周源(会)・安田章・白川豊・西田宏子
62年度前期	鄭光(会)・平木実(史共)
後期	金周源(会)・油谷幸利・成沢勝・泉澄一
63年度前期	金東俊(会)
後期	鄭堤文(会)・菅野裕臣・三枝寿勝・長節子
平成元年度前期	李賢起(会)・白川豊・田中俊明(史共)
後期	李琺錫(会)・油谷幸利・大谷森繁・吉田宏志・鶴園裕
2年度前期	任洪彬(会)
後期	崔明玉(会)・成沢勝・大村益夫・三浦国雄
3年度前期	成百仁(会)・濱田耕策(史共)
後期	劉孝鐘(会)・三枝寿勝・大谷森繁・嶋陸奥彦
4年度前期	安慶華(会)
後期	南星祐(会)・梅田博之・白川豊・河内良弘
5年度前期	李承宰(会)
後期	金星奎(会)・安田章・宮田節子・濱中昇(史共)
6年度前期	李浩權(会)・李基文
後期	成煥甲(会)・波田野節子・草野妙子
7年度前期	俞在弼(会)・油谷幸利・坂本孝夫・吉田光男(史共)
後期	李浩權(会)・大谷森繁
8年度前期	俞在弼(会)・申東旭
後期	鄭光(会)・三浦国雄・安田章
9年度前期	李琺錫(会)・朝倉敏夫・芹川哲世
後期	尹容善(会)・鶴園裕・早乙女雅博(史共)
10年度前期	尹容善(会)
後期	韓在永(会)・吉田宏志・菅野裕臣
11年度前期	南潤玖(会)・志村哲男
後期	高東昊(会)・梅田博之・鈴木靖民(史共)

(会)は会話講師、(史共)は史学科共通

で、53・54年度は各3名、55年度は5名の講師を許された。県内には適任者がいないために、県外から集中で招かざるを得なかった。56年度からは原則的には3人(日本人)、平成10年度以降2人に減らしたが、毎年3人という講師数は他コースよりも多く、学部各位の好意に感謝する。招聘講師はコース内で商議の上、決定するが、斯学の代表的研究者であることを第一とした。集中講義の時期は、講師の都合を優先するが、可能な限り後期に依頼した。当時専門移行は2年生後期であったため、後期に開講した方が、多くの学生が聴講できるからである。平成5年度からは2年生前期移行となったため、後期に拘

ることはなくなった。

3名の講師の内訳は、語学・文学・朝鮮事情(語学・文学以外)各1名である。日本の朝鮮学界の事情から述べれば、歴史研究者がほとんどで、語学・文学およびその他の分野に携わる者は僅かであった。この10年ほど以前より、絵画・彫刻・陶芸・音楽・思想・文化人類学等、広い分野の研究者が輩出し始めた。語学の分野でも古語を専攻する者は特に少なく、菅野氏に3回、文学の分野でも古典研究者は稀で、大谷氏には4回の出講を願っている。他に油谷氏に4回、梅田・大村・三枝・三浦・安田・吉田(宏)各氏には3回の御出講、すべての講師に御礼を述べたい。

外国人講師については、昭和53年度赴任直後から2年間申請書を文部省に提出したが、認められなかった。学部長および事務部より専任は困難であろうとの助言を得、非常勤講師の申請に切り換えた。その結果56年度より、前期・後期各60時間の外国人会話講師枠を獲得し得た。問題は優秀な外国人講師を如何に得るかであった。幸い東京外国語大学の菅野氏を中心となって同大学および神田外国語大学に、若くて優秀な人々を会話講師として招聘しておられ、菅野氏等の御好意でそれらの方々をお招きした。その他に慶應大学・天理大学・広島女子大学からも来ていただいた。それらの方々の多くが、今日韓国語学会の第一線で活躍しておられる。

外国人講師の中で、崔応久・成百仁・李基文氏に言及する。崔応久氏は中国延辺朝鮮族出身で、北京大学朝鮮学研究所教授である。かつて金日成総合大学留学生であり、現代語の研究者である。成百仁氏はソウル大学校人文大学教授で、言語学・満州語学の権威である。李基文氏も同大学教授で、アルタイ語学・朝鮮語学の権威である。御二方とも国際的に活躍しておられ、藤本の留学時代の恩師にあたる。特に李教授には、人文学部主催の講演会でお話いただいた。

異色の講師としては、坂本孝夫氏を挙げ得る。同氏は大阪外国語大学朝鮮語学科第1回卒業生で、「赤旗」の記者として平壤での生活も経験されている。アメリカに所蔵される北朝鮮文書160万頁を2年半にわたって調査し、朝鮮戦争は北朝鮮が始めたことを実証されて、『朝鮮戦争』(文芸春秋社、1993)

を刊行された。また『北朝鮮に消えた友と私の物語』（文芸出版社、1998）で、第30回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞されている。

前表で（史共）と注記したのは、日本史・東洋史・西洋史の史学科共通の「朝鮮史」の授業（隔年）であるが、朝文に講師依頼を委嘱された。それ以降朝文で斡旋しており、厳密には朝文の授業ではないが、前表に収めた。

平成元年度に非常勤講師が多いのは、前年9月に梶井氏が長逝され、藤本が同氏担当の朝鮮文学の授業・教養学部の授業、また同氏が出講しておられた敦賀女子短期大学の授業、そして諸公務をも担うようになったため、宿病が抬頭して4月から7月まで入院したからである。平成元年度は藤本一人であったため、学部の御好意で例年以外に、急遽金沢大学の鶴園氏に依頼した。同氏は数年前に同大学に赴任しておられたが、窮状を見兼ねて学部後期1コマ、教養部前期3コマを担当して下さった。また言語学浅井亨氏の御好意で、同コースの集中枠で油谷氏を招いて下さった。それらの御好意には深く感謝している。

（3）学生について

朝文コースの学生数は、次のごとくである。

年 度	学 生 数	年 度	学 生 数
昭和52年度	2	昭和63年度	12
53年度	2	平成元年度	8（退1、学1）
54年度	1	2年度	2
55年度	0	3年度	5
56年度	6（退1）	4年度	6
57年度	5（退1）	5年度	4（社1）
58年度	4	6年度	4（社2）
59年度	6（退1）	7年度	2
60年度	2	8年度	2
61年度	3	9年度	2
62年度	7	10年度	4（社1）

（退）は退学者、（学）は学士入学、（社）は社会人入学

以上のごとく、総数は89名で、その内退学者は4名である。退学者には卒業するようにと説得を重ねたが、遂に及ばなかったのは不徳の致すところで誠に残念である。学士入学生が1名、近年は社会人入学生が4名いるが、通常の学生よりも一般的には遙かに向学心がある。一度社会に出た人が入ってくれるのは、他の学生によい影響を与えるように思われる。

朝文コースを希望して来る学生は、必ずしも多くはない。教養部と合併する以前は、コース数が少なかったため、英文や国文に希望者が殺到し、それらを落ちた学生が止むを得ず朝文に来ることが多かった。昭和63年度の12名中、朝文志望者は3名のみで、他のほとんどは英文志望者で、泣き顔で朝文に入ったが、笑顔で卒業してくれたのは嬉しかった。

卒業生の多くは朝鮮語とは関係のない所に就職し、多数を占める女学生は結婚して家庭に入っている。

ソウル大学校人文大学国語国文学科の博士課程を修了した女学生が1名、在学中または卒業後に語学研修で韓国へ行った者は7、8名を数える。大学院へは内部より1名進学したが、途中で退学した。大阪外国語大学より来た植田晃次は修士を終えた後、名古屋大学の博士課程に進学し、大阪大学に職を得た。他大学進学者としては、東北大学大学院に2名が進んでいる。

外国よりの受け入れは、昭和58年度に李氏、平成2年度にロシア人アンドレ・エファーノフ氏、平成5（1993）年7月より1年間全南大学日本語教授李漢昌氏およびその家族、平成8年度は漢陽大学学生崔炳美氏がいる。

（4）教養部の朝鮮語について

教養部における朝鮮語の授業・単位数などは、次のごとくである。

年 度	開講有無	単位数	開講時期
昭和53年度 ～55年度	無		
56年度	有(卒業要件単位外)	2	(1) (1)
57年度 ～59年度	同	4	(2) (2)
60年度 ～平成4年度	有(卒業要件単位)	8	(2) (4) (2)
5年度 ～11年度	同	A4 B4	(2) (2) (2) (2)

梶井・藤本は昭和53（1978）年4月に赴任し、後期より専門の授業に備えた。当時教養部は1年半で、半期ずつの3期に分かれていた。当然のことながら教養部に朝鮮語の授業はないために、藤本が10月専門移行に備えて教養部に張り紙をし、朝文希

望者を対象に朝鮮語を教え始めた。その状況を見て教養部で朝鮮語を設けるべきだとすることで、56年度に自由単位で、第 期に1単位ずつ、翌年度より59年度までは同じく自由単位であるが、第 期に各2単位となった。これらの授業は内地留学等で不在時以外は藤本が担当した。60年度より平成4年度にかけては、卒業単位としての外国語に認められ、第 期各2単位、第 期4単位となった。こうなると藤本一人では負担が多すぎるので、梶井と担当することになった。教養部の配慮に感謝している。平成5年度からは教養部廃止と共に、教養教育は1年となり、2年から専門移行となった。1年生はAで第 期各2単位、Bは2年生以降であるが、これは専門の授業と兼ねて行っている。ただBを取る学生は皆無に等しい。

平成元(1989)年藤本入院時は、金沢大学鶴園裕氏に教養部および学部の授業をお助けいただき、誠に有り難かった。

(5) 蔵書について

赴任して当面した問題は蔵書である。当時朝鮮関係の書籍を有する所はほとんどなく、研究者はそれぞれに専門の書籍は備えていた。しかし研究室用の書籍は、また性格の異なるものである。学科新設には初度用弁費が出ると、東京外国語大学の知人から聞いたが、富山大学にはないとのことで、梶井・藤本合わせて60~70万円のコース費しかなかった。藤本のトヨタ財団の研究費の一部20万円を書籍に充てた。九州大学文学部朝鮮史講座や東京外国語大学朝鮮語学科では、韓国の書店から直接購入しており、そのようにすれば同一金額でも3倍は購入できるので、会計に相談したができないと言われ今日に至っている。もし当初よりそれが実現できていれば、現在の3倍以上の蔵書を擁している訳で、コースや大学のために残念なことこの上ない。

昭和54(1979)年からの特別図書費で朝鮮学の基本資料である『承政院日記』130冊165万円を申請した所、全学の御好意で購入が実現した。

昭和54から56年度の3年間にわたって、梶井を代表として、「朝鮮をめぐる中国と日本、その三国間の語学・文学の相互交渉に関する総合的研究」を行い、3年間630万円を得た。研究分担者は、永田英正・三

宝政美・佐藤進・鎌田元一・山崎幸雄・寺津典子の諸氏と藤本で、格別の御好意に与ったことを感謝している。学習院版の『李朝実録』は所蔵されていたが、韓国国史編纂委員会本『朝鮮王朝実録』を50万円で購入するなど、かなりの資料を購入できた。

昭和末年に5年ほどにわたって、人文学部を中心に「東アジア研究センター」を創立しようという構想の下に、特定研究が行われた。初めは東アジア学科が中心、後には全学部で行った。この研究会から研究費を得、かなり基本的な資料を購入した。『備辺司膳録』『韓末外交資料集成』『私撰邑誌』『高麗大蔵経』、また『植民地資料集成』は出版社と交渉して、毎年30万円ずつの支払いで4年ほどかけた。

御寄贈いただいたものとしては、黒川勇氏旧蔵書がある。『富山大学人文学部紀要』第19号所収の梶井陟『黒川文庫』についてによれば、黒川勇氏(1946~1984)は朝鮮に関心を持ち、10年程の間に集められたという。同氏は研究者でもないので、一般人向けの日本語の書籍がほとんどである。単純に点数にすれば、642点に上る。梶井は黒川氏とは文通によって資料上の交渉があったが、ついに対面の機会はなかったという。梶井の斡旋で御遺族より寄贈されたが、分散されて文庫として別置されていない。

また梶井の旧蔵書は先に触れたが、平成6(1994)年3月に目録が出、学生が頻用する基本資料を若干演習室に置くのみで、他はすべて図書館にある。当初文庫としての別置は困難という話であったが、どうやら実現を見た。内容を一瞥すると、和書3,394点、朝鮮書1,121点、その他(洋書・中国書等)29点、和雑誌423点、朝鮮雑誌126点となる。梶井が黒川氏御遺族より寄贈されたものもあるというが、それらも上記に含まれるのであろう。梶井文庫の特徴は、朝鮮あるいは朝鮮文学と日本人とのかわり、在日朝鮮人文学がその中心を成していることと言ってよかろう。黒川氏遺書も梶井文庫も、特に高価なものが多い訳ではない。古書の残り方を見ると、廉価で庶民の身近であるものほど残りにくい。高価で堅い内容の書籍は処々に保存されている。そのような意味で両者の遺書には、金銭では購い得ないものが甚だ多いのである。これらの書籍の存在は富山大学にとってのみならず、日本の朝鮮文学界にとって

も貴重な存在である。

その他に集中講義で来られた濱田敦氏より、京都大学文学部国語国文学研究室刊の朝鮮資料一式をいただいた。かなり後のことであるが、すでに臨川書店に移っていたものを購入して下さったことを知り、恐縮した。やはり非常勤講師を勤めていただいた成百仁氏は、後に韓国を代表する学会である震檀学会の会長になられたが、特別に依頼して『震檀学報』のバックナンバーを多量にいただいた。文化人類学和崎洋一教授は、永らく『朝鮮学報』を取っていたが寄贈するとして、バックナンバーを数十冊下さった。また非常勤講師であった吉田光男氏は、東京大学文学部朝鮮文化研究室の重複本の中から、『明代満蒙史料』一式・末松保和『青丘史草』・藤田亮策『朝鮮史論考』等を寄贈された。

平成初年と記憶するが、朝鮮学会幹事会で、天理教中山正善二代真柱の蔵書中より『朝鮮学報』2セットが出たとの報告があり、東京外国語大学の菅野氏と藤本が名乗り出て寄贈を受けた。

油谷幸利・岸田文隆・藤本は、それぞれに得た科学研究費の中より書籍を購入した。藤本は韓国での知人等を通じたり、直接訪問依頼したりして、韓国の国史編纂委員会・精神文化研究院・学術振興財団・文化交流協会・文化財管理局・国会図書館・ハングル学会等より書籍の寄贈を得ている。近年は『韓国歴代文集叢書』の蒐集に努め、100冊40万円で1,300冊を集めた。科研費と講座費で購入しているが、これは朝鮮学研究の基本資料と言い得よう。

近年韓国の出版書は多く、購入が追いつかないが、基本資料は今後も充実に努めるつもりである。今後は雑誌の購入を計るつもりである。北朝鮮の資料は、購入方法の困難さのために、偶々購入したものがあるのみで、計画的購入はしていないし、またそれは不可能な状況にある。

朝文コース カリキュラムの現状

1. 教育目標

朝鮮（・韓国、以下同様）語を精確に理解し、その語学・文学に対する理解・知識を深めること。

朝鮮の歴史・文化などを理解せしめること
相手の発話を理解し、己の意志を筆記及口頭で



昭和62年2月24日



平成2年10月27日



平成4年3月25日



平成5年2月24日

伝えられること

2. 授業の組立

< 1 年次 >

教養 朝鮮語 (1 年前期および後期、各 2 コマ)

専門基礎 朝鮮学入門 (1 年前期 1 コマ)

< 専門 >

講読

演習

概論

集中 < 語学または文学・朝鮮学・朝鮮史 (隔年) >

会話

作文

< 卒論 >

卒論テーマ決定 卒論指導 中間発表 (10月初)

3. 必須の内訳

日本東洋言語文化講座

朝鮮言語文化コース

卒業に必要な専門科目の単位数は84単位である。その内訳は、

授業科目名	単 位 数	
	必須科目	選択科目
朝鮮言語文化演習	6	2
朝鮮言語文化講読	6	2
朝鮮言語文化概論		10
朝鮮言語文化特殊講義		10
朝鮮語会話		10
朝鮮語作文		2
朝鮮史		2
* 朝鮮学入門		2
日本東洋言語文化特殊講義		4
卒業研究	10	
計	22	44

必須科目22単位

選択科目44単位の

その他の人文学部専門科目 } から併せて62単位

3 中国言語文化コース

中国言語文化コースは日中国交回復後間もない昭和49 (1974) 年に、それまで国語国文学の中に置かれていた「漢文学」から分離独立する形で設けられた。当初の名称は「中国語中国文学コース」であり、平成5 (1993) 年の大学改組の際に「中国言語文化コース」と改められた。以下、いずれも「中文コース」と略称する。

昭和49 (1974) 年当時、人文系学部で中文コースを有する地方大学は稀であった。なぜ富山に中文が設置されたかについての詳細は不明であるが、コースの十周年を祝した記念文集『中文拾年』(佐藤進ほか編、1985年9月15日発行)に寄せた三宝政美の「中文十年を迎えて」には次のように記されている。

ところで当時全国の地方大学に先駆けて、本学に中文が新設された経緯については、私の赴任前のことでもあって実は定かではない。その頃の教授会議事録をひもどいて見る限り、文理学部が主体的に文部省に要求した末に獲得したものではなく、どうも棚ぼた式に文部省から貰った風が強い。だから、時の永井文部大臣が、戦後不正常な関係にあった日中問題に政治生命を賭けて貢献された故松村謙三氏の徳を多として、郷土の富大に新設したのだという秘話も生まれたのであろう。事の真相はともかくとして、捨て難い粋な話と思えるので敢えて記し留めておきたい。

昭和49 (1974) 年創設時のスタッフは毛利勉 (漢文学、在職期間は1951.3.31 ~ 1976.4.1) ただ1名であったが、翌年三宝政美 (中国近現代文学、在職1975.4.1 ~ 1997.3.31) が赴任する。三宝はこの新しいコースのために秋田大学から呼び寄せられた。毛利は昭和51 (1976) 年に退官したため、中文コースの実質的な形成は三宝と毛利の後任である佐藤進 (中国語学、在職1976.4.1 ~ 1989.3.31) の手に委ねられることになる。

三宝と佐藤はいずれもスポーツを好む明朗な性格であり、学期の最初の授業をつぶしてソフトボールの紅白試合を行うのが、当時の中文コースにおける親睦の図り方であった。なお、現在も続く毎年2回の人文学部ソフトボール大会は、中文コースのこのような慣例と無関係ではない。三宝の「中文ソフトボール史回顧」(前掲『中文拾年』所収)に次のような記述がある。

[昭和54 (1979) 年の] 夏休みが過ぎて、そろそろ秋風もたとうという頃、文理学生最後の甲斐、笠井らは、来春の卒業になり、新しい人文学部の未来につながるような置きみやげをしたいと思いたった。彼らのごく自然にソフトボール大会を考えついたのは、中文という風土が大きくあざかつ

ていたにちがいない。

また、この記述に呼応するものとして、当時の学生で、ソフトボール大会企画者の一人である甲斐勝二の「あの頃のこと 第一回ソフトボール大会始末紀」(同上所収)は以下のように書き出している。

我々が四年にいるうちに、各演習室間で学部長杯のソフトボール大会をやろうと言い出したのは哲学専攻の中川恒夫であったと思う。そのころ、我々は文理学部文学科の最後の入学生として最終学年にいた。我々が入学した翌年には、文理学部の門は閉ざされ、新たに設けられた人文学部の門が開かれている。新たな学部には新たな学科・専攻が設けられ、人員も年々増加しており、各演習室間のつながりもそれにつれて少しずつ疎遠になり始めていた。我々が中川の提案に同意したのは、確かに遊び好きであった事がその第一の理由であったとしても、やはり疎遠になりかけていた各演習室間の交流からだと思う。もとより、来者を拒まぬ中文演習室は、国文の藤井、東洋史の車、西洋史の石井等、当時各演習室での世話人クラスの人物が出入りし、演習室を超えた何事かを為すには誠に好都合であった。

中文コース設立当時の、そして文理学部から人文学部へ変わる当時の演習室の雰囲気をよく伝えている。昭和54(1979)年の時点ですでに各演習室間のつながりが疎遠になり始めたと感じていたことは些か意外の感もあるが、その後、昭和63(1988)年の語文棟完成、平成5(1993)年の大学改組による学部の拡充等を経て、演習室相互のつながりは(とりわけ語学文学系では)一層弱まったように思われる。

昭和56(1981)年には磯部彰(中国古典文学、在職1981.4.1~1996.9.30)が赴任する。佐藤が神奈川大学(のち東京都立大学)へと転出した平成元(1989)年までの8年間は三宝・佐藤・磯部による3人体制であるが、四半世紀に及ぶ中文コースの歴史の中で、この3人による期間が最も長い。佐藤の転出以後、数年ごとにスタッフはめまぐるしく変わり、学生が入学してから卒業するまで教官スタッフが一定していた時期はほとんどない。

佐藤の後任として中村雅之(中国語学、在職1989.4.1~現在)が赴任したのは、語文棟完成間もない頃である。旧校舎では同じ階で相互に交流のあった国語国文学や朝鮮語朝鮮文学の研究室・演習室は、語文棟への移転によってそれぞれ異なる階に配置され、相互の交流は徐々に希薄になった。

平成5(1993)年の改組によって、三宝は中文コースを離れ、国際文化学科の中にただ一人で「日中文化関係論ゼミナール」を組織することになったが、平成9(1997)年には淑徳大学へ転出している。また、改組により、旧教養部から上野隆三(中国古典文学、在職1993.4.1~1997.3.31)と伊藤美重子(中国語学・敦煌俗文学、在職1993.4.1~1998.3.31)が中文コースのスタッフに加わった。

ここにおいて、中文コースは磯部・中村・上野・伊藤の4人教官体制になったが、平成9(1997)年の学部改組により、上野は国際文化学科の「国際文化論コース」へ移り、再び3人体制へと戻った。

磯部は平成8(1996)年9月に東北大学に転出し、後任として大野圭介(中国古代文学、在職1997.4.1~現在)が半年後に赴任した。伊藤は平成10(1998)年3月にお茶の水大学へ転出し、後任として梁有紀(中国現代文学、在職1998.4.1~現在)が赴任した。

なお、平成2(1990)年からは、念願かなって外国人教師の枠を確保している。歴代スタッフは以下の通り。

馬列 (中国語、在職1990.11.1~1992.9.30)
 呉麗艷 (中国語、在職1992.10.1~1994.9.31)
 彭国躍 (中国語、在職1994.10.1~1997.3.31)
 朱継征 (中国語、在職1997.4.1~1999.3.31)
 時衛国 (中国語、在職1999.4.1~)

学生数は、平成5(1993)年の改組以前は各学年平均15名程度であったが、改組以後はコースの数が増え、また語学文学の人気急落もあって、平均8名程度にとどまっている。

1990年代に入ると、三宝の企画により中国への語学研修が始まった。毎年夏休みの約3週間を費やして、前半は遼寧大学で中国語の授業を受け、後半は北京・上海等へ旅行する。メンバーは中文コースの3年生を中心に、東洋史コースの学生や時には他学部の学生が加わることもあった。平成5(1993)年に三宝が国際文化学科に日中文化関係論ゼミナール

を組織した際、この語学研修を教育の大きな柱とし、参加した学生には単位を認めることになった。現在では日中文化関係論ゼミナールから発展した国際文化論コースによって、この語学研修は企画実行されており、中文コースの学生も多数参加している。

以上、中文コースの沿革をごく大雑把にたどったが、創設から四半世紀を経て、中文コースの前途は多難であると言わざるを得ない。否、中文コースのみならず、言語文化学科あるいは人文学部全体の未来も不安なしとしない。伝統的な語学文学という学問分野には、学生の多くが魅力を感じていないようであり、社会的な期待も大きいとは言いがたい。効率性と実用性を最重要とする現代の風潮にあって、伝統的な学問は訴えるべき何かを示しうるであろうか。

中国言語文化コース カリキュラムの現状

(1) 教育目標

本コースは、中国語の習得を基礎として、東アジア漢字文化圏の中心をなす中国の言語文化について、漢文という枠を超え、古典文学・現代文学・文字学・音韻学などの領域から、その性格の解明を目指す。古典中国語（漢文）や現代中国語の原典によって行われる授業を通して、辞書や工具書（参考書）を駆使した資料読解の技法を学び、同時に、原典に忠実な読みや、引用された原典に当たって確認するといった学問的態度を身につけることを目標とし、また中国人教師による中国語会話作文の授業を設けて、中国語運用能力の向上にも意を注ぐ。

(2) 授業の組立ての骨格

組立て方

概論を1～4年生対象の科目とした上で、中国語会話を2・3年生対象、中国語作文を3・4年生対象とした積み重ね方式をとる一方、講読・演習・特殊講義を2～4年生対象の科目として用意し、全体としては折衷型の組立てとなっている。

必修科目

中国言語文化演習	6単位
中国言語文化講読	6
中国言語文化概論	2
中国言語文化特殊講義	4
卒業研究	10

開講コマ数および開講形態とその位置付け（カッコ内は担当（ABC））

	前期	後期
中国語文化演習	2(BC)	3(ABC)
中国言語文化講読	2(BC)	3(AB)
中国言語文化概論	1(B)	0
中国言語文化特殊講義	2(A、非常勤(集中))	1(C)
中国語会話	2(外国人教師)	2(外国人教師)
中国語作文	1(外国人教師)	1(外国人教師)

B担当は通年、その他は半期

中国言語文化演習...古典文学・現代文学・中国語学の各方面の原典を読み、研究に必要な古典・現代中国語の読解力の向上を図り、辞典・参考書類の使用に習熟する。

中国言語文化講読...古典中国語および現代中国語の基礎的な読解力をつける。

中国言語文化概論...古典文学・現代文学・中国語学の各分野の基本的知識を身につける。

中国言語文化特殊講義...各教官の研究分野の特定のテーマについての講義。

中国語会話・中国語作文...外国人教師による中国語会話・作文の授業により、コミュニケーション能力の向上を図る。

このほか後期に3年生対象の「卒論ゼミ」を、卒論のテーマを決める準備作業の授業として、A～Cの3人の分担により単位認定なしで行っている。

コース横断的授業

日本東洋言語文化講座の共通科目として、後期集中の特殊講義がある。

(3) 学生の受講実態の概略

概論・講読および中国語会話・中国語作文は本コースでの学習の基礎知識を得る授業であり、ほとんどの所属学生が出席する。特殊講義と演習は古典文学・現代文学・中国語学の各分野への関心に応じて受講するが、おおむね真面目に出席している。卒論指導は関心のある分野に応じて3教官に分かれて指導を受けるが、授業の時以外も各教官のところへ相談に来る学生は多い。10月中旬に卒論中間発表を行い、卒論提出後の口頭試問の予行演習としている。4年生前期になっても卒論のテーマを見つけれない学

生が少なくないのは最近の傾向である。

本コースで開講する授業のほか、国際文化論講座において「国際文化論実習」として行われている、中国遼寧省への短期留学にも、主として3年生が多く参加している。

(4) その他

本コース在学中に自費で短期または長期の中国留学に行く者もいる。

4 英米言語文化コース

昭和24(1949)年に、新たに富山大学が発足したとき、文理学部は文学科と理学科で専門教育を行うと同時に、文理学部、教育学部、工学部、薬学部の全学部学生の一般教育を担当する学部として、蓮町の元の富山高等学校の校舎で教育研究活動を始めた。文学科の英語専攻コースの教官としては、東宮降、板巻俊平の両教官がそれぞれ東京工業大学と熊本大学に転出されたほかは、富山高校の英語教授陣がスタッフとして残された。吉川美夫、清水輝次、守屋獅郎、佐伯彰一、吉田三雄、小森典、須沼吉太郎の諸先生たちである。

当初は、新しい大学としてありきたりの専攻コースではなく、斬新な構想に基づいて、西洋文学第一、第二、第三、第四講座が設けられ、英語とドイツ語の教官陣が一緒になった形で講座を編成して発足した。内容的には、第一では西洋文学一般が対象となり、第二が英語学、第三が英文学で、第四はドイツ文学であった。教官陣の意気込みが伺えるであろう。しかし、外部からは中身が不明瞭であるという批判もあり、昭和30年度から講座の改組・改革が行われ、名称が中身を表すようにされた。すなわち、英語学・英文学とドイツ語学・ドイツ文学の2コースになった。結局文学科は哲学コース、歴史コース、国文コース、英文コース、独文コースの5専攻をもつことになった。

主任教授の吉川美夫は、かねてから三省堂の『クラウン英和辞典』と研究社の『英和大辞典』の執筆者として、また『英文法詳説』などの英文法に関する著述で有名な英語学者であり、同時に、旧制高校時代以来、学生の面倒見もよく、信望厚い教育者で

あった。清水輝次は英文学への造詣が深く、英文学史を担当、綿密な英文の読みの指導で定評があり、日本文化に対する蘊蓄も深かった。守屋獅郎は吉川教授と共に『クラウン英和辞典』、研究社の『英和大辞典』の執筆に当たると共に、英語史、英語学、語彙論等の講義を担当した。佐伯彰一はヘミングウェイ(E.Hemingway)などのアメリカ現代文学研究のみならず、広く批評家としての活動を始めていたが、現代英米文学思潮など、刺激的な講義で学生を引きつけていた。吉田三雄はフィッツジェラルド(Scott Fitzgerald)をはじめとするアメリカ現代文学の研究を行っていた。小森典は英詩、M.アーノルド(Matthew Arnold)の研究者であったが、フォスター(E.M.Forster)、ハックスレー(Aldous Huxley)などイギリス現代小説の研究もあったが、教室ではシェイクスピアの作品講読を担当した。須沼吉太郎は本来は英文学研究者であったが、主として会話・作文を担当、プラクティカルな教育のほうを専門とするようになっていた。

昭和25(1950)年、アメリカのガリオア奨学生として、佐伯、吉田両教官がアメリカに留学し、「新批判」の洗礼を受けて帰国、『文学科紀要』第一号に発表された佐伯の論文「リシダスをいかに読むか」は、英文学会に新風を吹き込んだと高く評価された。昭和28(1953)年、佐伯、吉田両教官はそれぞれ東京都立大学*(その後東京大学、中央大学、芸術院会員)と名古屋大学に転任、後任として森谷はシェイクスピア(W.Shakespeare)学者であり、榎本はリチャードソン(S.Richardson)、フィールディング(H.Hieling)を始めとする18世紀イギリス小説の研究者であった。

*注 以下()はそれ以降の移動を示す。

昭和31(1956)年に吉川教授が東洋大学に、榎本が名古屋大学に転任し、そして、平田純と後藤和夫が着任した。平田は初め現代英文学に関心を持っていたが、守屋教授の元で英語学講座に属して、文体、スタイルという面からの研究に取り組み始めた。後藤はミルトン(J.Milton)の研究者として英詩を講義し、T.S.エリオット(T.S.Eliot)についての研究に活躍した。

昭和37(1962)年3月末にそれまでの蓮町を離れ、五福の新築校舎に移った。英語専攻とドイツ語専攻

の教官研究室は3階に置かれたが、それは、一般教育に出講する時間数が大きいからであった。同37(1962)年4月から清水主任教授は大学附属図書館長を併任していたが、昭和39(1964)年1月19日狭心症の不帰の客となった。その3月末に須沼教授が東洋女子短期大学(大妻女子大学)に転出し、宇尾野逸作が着任し、英作文、英語音声学を担当した。清水の後任として、同40(1965)年に吉田和夫が着任した。

かねてから大学における教養教育の重要性が力説されていたが、昭和42(1967)年ついに懸案の教養部が発足し、それに伴って従来の教官から小森、宇尾野、吉田が教養部へ配置換えとなった。また沢田(後藤)和夫が広島大学に配置換えとなったため、英文コースは守屋、森谷、平田が担当することになった。折から学園紛争が富山大学でも始まり、学部学生のストライキがあって授業のできない日々が続く、学生との団交があり、対策のための会議がよく行われた。

幾らか紛争が収まりかけた昭和45(1970)年3月をもって、守屋教授が停年退官(富山女子短期大学、金沢医科大学)されて、後任に稲積包昭が着任。構造主義言語学から新しい生成文法などの英語学を研究・教授した。昭和48(1973)年に専攻科が開設されている。昭和51(1976)年に稲積が神戸大学に転出した後、同じく生成文法の研究者である寺津典子が昭和52(1977)年から跡を継いだ。初めての女性教官であった。昭和53(1978)年3月で森谷教授が停年退官となり、大妻女子大学に移った。そして5月にイギリス文学、特に浪漫派の詩を専門とする奥田平八郎が教養部から後任として配置換えになった。

その秋初めて英語英文学コースに外国人教師が来ることとなり、ロンドン大学ユニヴァシティ・カレッジのクワーク(Randolph Quirk)教授の推薦でアメリカ人ブラウン(James Baxter Brown)が赴任した。彼はアメリカユタ州の出身で、アメリカの大学を終えた後フランスのリヨン大学に学び、ロンドン大学で修士号を取った研究者で、コミュニケーションを研究していた。フランス人の夫人とともに富山に2年在任した後アメリカに帰ったので、後任としてイギリス人でオックスフォード大学終了後アメリ

カのマサチューセッツ工科大学のチョムスキー教授の下で学んだオストラ(Nicholas Ostler)を招聘した。

昭和52(1977)年5月に文理学部の改組があって、文学科は人文学科と語学文学科の2学科からなる人文学部と改められた。英文専攻は英語学講座、英文学講座、アメリカ文学講座の3講座からなり、アメリカ文学のみが教授1名の不完全講座であった。英語学は平田、寺津、英文学は奥田、草薙太郎(昭和55年着任、シェイクスピア専攻)、そしてアメリカ文学は石田安弘(昭和54年着任、ホイットマン(Walt Whitman)をはじめとするアメリカ詩専攻)のスタッフ構成であった。

昭和56(1981)年には外国人教師オストラがイギリスに帰ることとなり、その後任にホフマン(I.R.Hofmann)が島根大学から招聘された。彼はモダリティの研究者として優れた論文を発表しており、学生の教育にも熱心であった。

寺津は昭和57(1982)年に母校のお茶の水女子大学(東京大学)に配置換えとなって、後に教育学部から、新しい英語学の研究者である小川洋通が移行して着任した。

石田が昭和61(1986)年に東京医療短大(創価大学)に転出した後、岐阜大学から福田立明が配置換えとなって着任した。福田はアメリカ文学、特に小説の研究に取り組んでいた。

このころ、人文学部では大学院人文科学研究科の設置に取りかかっていたが、昭和61(1986)年に日本・東洋文化専攻と西洋文化専攻の二本立てで開設されることとなった。この前後からいわゆる18歳人口の増加が社会現象として問題となり、学生の定員に臨時増募することが求められ、それに伴って教官定員増が認められた。その結果、アメリカ文学講座に助教定員が来ることとなり、平成元(1989)年の秋から大工原ちなみが着任した。大工原はアメリカの現代文学、特にミニマリズムとユダヤ系作家についての研究者である。

昭和62(1987)年からは、金沢の北陸大学に転出したホフマンの後任として、筑波大学岩元教授の斡旋によって、アメリカ、ウィスコンシン・ミルウォーキー大学でクリエイティブ・ライティングによりPh.Dを取得したエリザベス・バレストリエリ

(Elizabeth Balestrieri) が来日した。詩人であり、批評家、作家でもある彼女は、夫とともに進んで学生たちとも付き合い、学生たちに人気があった。

昭和59(1984)年から63(1988)まで大学附属図書館長であった平田が、平成3(1991)年、人文学部長に選出されて、奥田が主任教授となった。折しも、大学の大綱化が決定されて、教養教育と専門教育の見直しが始まるとともに、教養教育の重要視された教養部が、教養部所属教官の強い意志から廃止、所属教官が専門学部へ配置換えを求める動きが激しくなり、結果として平成5(1993)年4月1日をもって教養部が廃止され、それに伴って、専門性を重視し、希望に添うようにするという一般原則の下に教養部教官の各学部への配置換えが行われた。当時、人文学部は焦眉の急として、学生の臨増募に伴う教官増の定員を返却しないために、学科をそれまでの2学科から、人文学科、国際文化学科、言語文化学科の3学科編成に変えること、併せて大講座制を取ることで人事の風通しをよくすること、を図っていた。しかし、改変が急がれて結局29名の教養部教官の「専門性」を生かすことで転入することになった。

英語・英米文学コースについて言うと、鈴木孝志(イギリス文学専攻)、奥村譲(英語学専攻)、神徳昭甫(アメリカ文学専攻)、高安和子(英語学専攻)、佐藤清人(イギリス文学専攻)が参加したことを意味する。佐藤は9月末をもって山形大学に転出し、後任として垣川正巳(イギリス文学)が着任した。そのため、英語学関係者が4人いることになったので、平成6(1994)年3月に平田が停年退官(富山女子短期大学、富山芸術文化協会会長)した際、後任補充にアメリカ文学関係者を採用することになった。採用されたのは藤田秀樹である。

また同年、外国人教師バレストリエリは年齢的に言って高給受領者であり、同人の受け取る給与で若者を2人以上も雇えるからというような文部省の言い分を受けて、学長より同人の契約を行わない旨の話があった。バレストリエリは城西国際大学に教授として採用され着任したが、教育者として、研究者として、惜しむべき人物を(たかがなにがしかの金のために)失ったことは、極めて残念なことであったと言わねばならない。後任としてキャレン・フェダーホルト(Karen Fedderholdt)が来た。福田が平

成7(1995)年に跡見学園女子大学に転出し、後任として赤尾千波が着任した。

平成9(1997)年3月で奥田教授が停年退官したが、健康を損ね、同年8月亡き人の数に入った。そして10月、西村隆が着任した。なお、内部の学科編成の変更があって、神徳は同9年4月よりアメリカ言語文化から国際文化論に移動した。

時期的な変動があったと言わねばならないが、学生数から見れば、英文コースは常に国文コースとともに、多くの学生が志望する学科であった。発足以来40名という学生定員であったが、時にはその半数以上が希望し、やむなく選考することもあった。学生の希望コースの偏りから、5コースの内、志望学生数の少ないものを廃止することが、真剣に会議で議せられたことさえあった。また、いわゆる学園紛争中、ストライキに突入したとき、学生大会を開いてストライキ解除に向けて努力した学生諸君の姿は忘れられないものである。

英文コースは、女子学生が多く希望するコースであったし、いまもそうである。卒業生の中にはジャーナリズムで活躍している人、翻訳で名をなしている人、教育者として小学校、中学校、高等学校で、素晴らしい成果を上げている人たちはもとより、それぞれの校長職にある人、大学で研究職にある人、その他あらゆる分野で活躍中の人たちが多士済々である。なお平成11(1999)年3月現在、英米コースの卒業生は998名である。また文学専攻科・英文学課程修了生は13名、大学院人文科学研究科修士課程・英語英米文学専攻修了生は18名である。

寺津教官は、着任以来、学生指導の一つとして、教官と学生の2泊3日のセミナー合宿を計画し、新しく2年生が専門移行する後後学期の初めに実施することとしたが、それが久しく英文コースの伝統的行事となってきた。

また、学外から非常勤講師として多くの方々を招いている。吉川美夫、佐伯彰一、平野敬一、外山滋比古、亀井俊介、川本皓嗣、高村勝治、岩元巖、工藤好美、吉田三雄、榎本太、野島秀勝、寺沢芳雄、繁尾久、富原芳彰、宇賀治正朋、上田和夫、池上嘉彦、羽矢謙一、小池滋、島田太郎、井出弘之、道家弘一郎、千石英世、平石貴樹など、各方面の第一人者の方々の講義を学生たちにして貰えたことは特に

述べておきたい。

なお、平成5(1993)年より、英語・英米文学コースは、英米言語文化講座のもとに、イギリス言語文化とアメリカ言語文化の二つのコースに分れている。教育研究スタッフとその領域は次のようである。

イギリス言語文化コース。小川洋通は、現代英語の体系を記述的に研究しているが、特に主語・動詞を中心として新しい文法理論に基づいて分析している。鈴木考志は現代英文学の潮流をジェイムズ・ジョイスを軸として、主としてアイルランドの視点から研究している。草薙太郎はシェイクスピアの『ソネット集』とドラマの作品の相関から、英米言語文化の思想性、社会性の究明を目指している。奥村謙は後期中世英語で書かれた写本を対象とし、そこに見られる方言、写本転写の様式、写本の派生関係を研究している。恒川正巳は構造主義以降の現代文学理論の成果を踏まえ、知の諸相について考察している。

英米言語文化講座：イギリス言語文化コース、アメリカ言語文化コース カリキュラムの現状
英米講座の授業科目はすべて講座共通科目。

1. 教育目標

多様な言語資料の研究を通じて、英語、英米文学のみならず広く英米文化を学び、豊かな国際感覚を身につけることを目標とする。あわせて、外国人教員による授業や視聴覚教材の活用によって英語運用能力の向上も目指す。

2. 必修科目(計46単位)の学年進行(数字は単位数)

- 1年...英米文化論(2)、英文法(2)、英語史(2)
- 2年...英米言語文化基礎講義(2)、英米言語文化講読A(4)、同演習A(2)、イギリス文学史(2)、英語学講読A(2)、同演習A(2)、英語コミュニケーション(作文)(2)
- 3年...英米言語文化講読B(4)、同演習B(4)、英語学講読B(2)、同演習B(2)
- 2~4年...アメリカ文学史(2)
- 4年...卒論(10)

3. 各授業(すべて半期ずつ開講)の位置付け

- * 1年...基礎的な知識を得る。
- 2年...基礎的な英語力をつけ、各研究分野の概略を知る。どちらかと言うと講読中心。

学 年	授 業 科 目 名	開講コマ数	位 置 付 け
1	英米文化論	1	英米の文学、文化の基礎的、常識的知識
	英文法	1	英文法の基礎的知識
	英語史	1	古代、中世英語概論
2	英米言語文化基礎講義	1	英米の文学、文化研究の手法入門
	英米言語文化講読A	4	英米文学の講読、演習。主として英文読解力をつけることが目標
	英米言語文化演習A	2	
	イギリス文学史	1	英文学史の基礎知識としての英国史
	英文法	1	英文法各論
	英語史	1	初期近代英語概論
	英語学講読A	1	英語学文献の講読、演習。主として英文読解力をつけることが目標
	英語学演習A	1	
	英語コミュニケーション(会話)	2	
英語コミュニケーション(作文)	1	初級の会話、作文	
3	英米言語文化講読B	6	卒論のテーマを見つけるための英米文学の講読、演習
	英米言語文化演習B	8	
	イギリス文学史	1	英国史をふまえた英文学史
	英語学講読B	2	卒論のテーマを見つけるための英語学文献の講読、演習
	英語学演習B	4	
	英語コミュニケーション(会話)	1	
英語コミュニケーション(作文)	1	中、上級の会話、作文	
2~4	英米言語文化特殊講義	6	英米の文学、文化の特定のテーマについての講義
	アメリカ文学史	1	米文学史
	英語学特殊講義	2	英語学の特定のテーマについての講義

3年...多様な分野に触れ、卒論に向けて関心を絞り込む。演習中心に移行。後期には卒論指導を希望する教員の演習科目を必ず受講する。

4年...主として卒論。教員有志による卒論中間発表会(11月ころ)。

4. 各授業の分担

各学期において、1人の教員は1年生または2年生以上を対象とする科目1コマと3年生以上を対象とする科目1コマ、および複数教員のリレーによる科目1コマを担当。

例

A教員 英米言語文化講義A、英米言語文化演習B、英米文化論(リレー)

B教員 英米言語文化特殊講義、英米言語文化講読B、英米文化論(リレー)

C教員 アメリカ文学史、英米言語文化演習B、英米文化論(リレー)

D教員 英文法、英語学演習B、英語学講読A(リレー)

5. 学生の受講実態

専門基礎科目(英米文化論、英文法、英語史)の受講態度は概ね積極的で、1年生の専門科目に対する期待が大であることがわかる。1年生秋の専門移行期の面接では、特に英米文化論の内容が学生に与える影響が強いと感ぜられる。2年生以降の学生の動向は2分化が進む。2年生後期から明確な関心を持って特定のテーマの授業や特定の教員の授業に傾倒する学生がいる反面、ただ漫然と単位を揃えることに終始し、4年生になっても卒論のテーマを見つけれない学生も多い。狭義の実用英語への要望が多く聞かれるが、現実には会話、作文の授業で積極性が見られないのも最近の特徴である。

5 ドイツ言語文化コース

昭和24(1949)年の富山大学発足時において、旧制富山高等学校所属の外国語担当教官は文理学部文学科西洋文学講座に配属されることとなったが、当時のドイツ語教官の一人であった結城謙治教授の言葉によれば、文理学部の中に「独文専攻課程」を創

設するについては学部内で「予想外に困難して」容易に合意が得られず、「学校の内外に渦巻く錯雑なる潮流に翻弄され」、「いつ果てるともない討議の繰り返し」の末、ようやく厳しい定員枠の中に6名の教官定員を確保してとにかくにも発足にこぎつけたが、「いうなれば、生まれ落ちた赤子は全くの月不足のため、大先生や大先輩が心から愛情を以て養い育てて下さった^{注1}」ものであるという。並々ならぬ難産の末に誕生したドイツ語教官の顔ぶれは、西洋文学第1講座(西洋文学一般)に黒石源太郎教授、西洋文学第4講座(ドイツ文学)に結城治教授、平岡伴一助教授、岡崎初雄助教授、余川文彦講師が所属し、また富山薬学専門学校から配属された平田一郎助教授がここに加わった^{注2}。こうして第一歩を踏み出した独文専攻課程は、再び結城教授の弁を借りれば「北陸の厳冬において、炭火がなくとも、なんのその、若い情熱を傾けてご専門を講義された^{注3}」幾多の若い教官によって着実に育まれていく。

昭和26(1951)年、黒石源太郎教授は佐賀大学に転任した。同教授にはハンスレール著『独逸文学史』(訳)の業績がある。昭和27(1952)年には坂上泰助助教授が着任した。昭和28(1953)年、ゴットフリート・ケラー(Gottfried Keller)を主な研究対象としていた余川文彦講師が島根大学に転任し、猿田恵講師が着任した。この年、これまでの西洋文学第一~第四講座の体制は、英文学第一・同第二、ドイツ文学第一・同第二の四講座に改められた。改正後の顔ぶれは、第一講座が平岡伴一助教授、坂上泰助助教授、猿田恵講師、第二講座が結城謙治教授、岡崎初雄助教授、平田一郎助教授であった。

昭和29(1954)年、坂上泰助助教授は熊本大学に転任している。同助教授の研究対象はヘルダーリン(Holderlin)であった。同年に佐藤自郎助教授が着任し、第一講座に所属する。昭和30(1955)年に初めて、一般教育充実のための非常勤講師として松沢芳郎(昭和31年から専任講師)、大谷重彦(昭和33年から専任講師)が着任した^{注4}。

昭和30(1955)年に初めて集中講義が行われた。この年の集中講義の担当教官とテーマは塩谷饒「近代独語の成立」、野島正城「シラー(Schiller)研究」、大沢峯雄「教養小説」であった。以後、毎年3・4

名の教官により集中講義は途切れることなく行われることとなる。その後の講師の顔ぶれはドイツ文学関係では伊藤武雄、成瀬無極、内山貞三郎、玉林憲義、大野俊一、相良守峯、秋山六郎兵衛、佐藤通次、菊池栄一、工藤好美（英文学）、田中健二、ドイツ語学関連では倉石五郎、小島公一郎、福本喜之助、真鍋良一、木村昭男、浜川祥枝である。（昭和47年まで。）

昭和31（1956）年にはゲーテ（Goethe）を研究対象としていた猿田恵講師が金沢大学に転任し、続いて翌昭和32（1957）に結城謙治教授もまた金沢大学に転任した。同教授は文理学部発足時から8年間在職したことになるが、主な研究対象はヘッベル（Hebbel）で、『富山大学文理学部紀要』2・4・5号、日本独文学会編『ドイツ文学』18号等にその業績を発表している。

昭和34（1959）年、片山操助教授が着任し第一講座に所属した。この年度より教官定員は1名増加し7名となっている。

昭和35（1960）年3月、文理学部発足以来11年間在職した平岡伴一教授が停年を迎えた。同教授はドイツ語学研究を主とする業績を富山大学文理学部紀要3・5号、日本独文学会編『ドイツ文学』16号に発表している。停年後も同教授はドイツ語史をテーマとしての集中講義を数回行っている。同年8月、上野英雄助手が着任した。上野助手はヘルダー（Herder）、ハーマン（Haman）研究を主とし、その後富山大学教養部に移籍ののち、金沢大学に転任している。

昭和36（1961）年には佐藤自郎助教授が名古屋大学に転任した。佐藤自郎助教授の研究対象は Grillparzer で、『富山大学文理学部紀要』4・7・9・10・11号にその業績がある。9月に松井巖助手が着任した。

昭和37（1962）年、4月に文理学部は蓮町の旧富山高等校舎より現在の五福へ移転した。この年9月に松沢芳郎講師が信州大学に転任し、10月に奥貫晴弘講師が着任している。松沢芳郎講師の研究対象はクライスト（Kleist）で、在任中の多くの業績が『富山大学文理学部紀要』（6～11号）に残されているが、その後信州大学教授となり、同大を停年退官後、福井工大教授として勤務する傍ら、非常勤講師

として本学教養教育のドイツ語を平成6（1994）年から平成10（1998）年まで担当した。

昭和38（1963）年、従来「講座」と称したものを「学科目」と改め、ドイツ語学・ドイツ文学の2学科目となった。ドイツ語学は、片山操助教授、奥貫晴弘講師、松井巖助手、ドイツ文学は岡崎初雄教授、平田一郎助教授、大谷重彦講師、上野英雄講師であった。なお、この年には日本独文学会秋季研究発表会が、富山大学を会場として開催された。10月19日から21日の3日間にわたり、300余名の会員を迎えて好評裡に終えた。

昭和40（1965）年、片山操助教授が城西大学へ転任した。同助教授には『英独比較ドイツ文法ノート』、『英独比較文章論ノート』などの著書がある。また松井巖講師は静岡大学へ転任した。同氏の研究分野は中世ドイツ文学である。10月には上村直巳講師が着任している。昭和41（1966）年には山本篤司助教授が着任した。

昭和42（1967）年4月、文理学部の改組が行われ教養部が設置されたのに伴い、平田一郎、大谷重彦、奥貫晴弘、上野英雄、山本篤司、上村直巳が教養部に移籍し、その専任となった。文理学部にはドイツ語学（教官定員1名）、ドイツ文学（同）の2講座が認められたが、ドイツ語学講座所属教官は未定、ドイツ文学講座には岡崎初雄教授一名のみが所属ということになった。しかしながら、教養部に所属した教官はこれ以降、全員が文理学部に非常勤講師として出講することとなり、講義、卒業論文指導なども担当していくこととしたので、移籍以前と変わらぬ状況を維持し、その体制は平成5（1993）年3月の教養部廃止まで続く。従って改組等による影響は、ドイツ文学研究室としては最小限にとどまったといえよう。なお、教養部においてはその後、平田一郎教授が昭和45（1970）年に病没した。同教授の主な研究分野はカロッサ（Carossa）であった。また上野英雄助教授は昭和47（1972）年に金沢大学へ、山本篤司助教授は昭和48（1973）年に愛媛大学へ、上村直巳助教授もまた同年に熊本大学に転任した。また教養部に移籍した大谷重彦教授は平成元（1989）年から教養部長の職につき、大学設置基準の大綱化を受けての教養部廃止問題の処理に力を尽くし、教養部廃止と同時に停年を迎えている。同教授はトー

マス・マン (Thomas Mann) をその研究対象とした注5。

昭和43 (1968) 年4月には中川英世助手がドイツ文学講座に着任するが、翌昭和44 (1969) 年3月には国立富山工業高等専門学校へ転任する。このころ、大学紛争の混乱期となり、授業が行われない状況が長期にわたって続いたが、ようやく紛争が終息に向かいつつあった昭和45 (1970) 年5月、ドイツ人教師、Dr. ヴォルフガング・ヴィルムヘルム (Wolfgang Wilhelm) がドイツ人教師として着任した。富山のみならず、北陸では最初のドイツ人講師であった。

昭和46 (1971) 年、吉田清教授がドイツ語学講座に着任する。昭和47 (1972) 年5月、ヴィルヘルム離任、後任としてDr. エーバーハルト・シャイフェレ (Eberhard Scheffele) が着任した注6。

昭和48 (1973) 年、岡崎初雄教授が退官した。同教授についての詳細は後述する。同年、後任として提山淑郎教授が着任する。

昭和52 (1977) 年、文理学部が理学部と人文学部に分けられることとなったのに伴い、ドイツ文学専攻は、人文学部語学文学科ドイツ語ドイツ文学コースと称することになった。この年10月、北村純一助教授 (現教授) が着任した。

平成5 (1993) 年3月、吉田清教授が停年により退官する。吉田教授の主な研究分野はトラークル (Trakl) であるが、シラー、シュタードラー (Stadler) に関する論攷もある。同年4月、教養部が廃止された。これに伴って学科改組が行われ、ドイツ語ドイツ文学コースは言語文化学科ヨーロッパ言語文化講座ドイツ言語文化コースとなった。このとき教養部から奥貫晴弘教授、山本孝一教授、別本明夫助教授 (現教授)、成田節助教授、宮内伸子助教授、またあわせて、この年3月教養部で採用された佐藤朋之助教授の6名の教官が人文学部に移籍した。なお同じく教養部にいた瀧澤弘教授はこのとき教育学部に移籍している。教養部廃止で慌ただしい中、平成5 (1993) 年10月、富山大学の独文としては2度目の日本独文学会秋季研究発表会を開催した。この時は500余名の会員が参加して盛会であった。

平成6 (1994) 年、成田節助教授は大阪市立大学

に転任した。成田助教授の研究分野は、ドイツ語学で、ドイツ語構文論のための基礎的研究、特に動詞の結合価を中心に格および前置詞の用法を実証的に明らかにしようとしている。後任として、中村靖子講師 (現助教授) が着任した。

平成9 (1997) 年、提山淑郎教授が停年退官した。同教授の研究分野はドイツ演劇で、特にシラー、ホフマンスタール (Hofmannsthal) さらにルネサンス期のドイツ演劇が対象であった。また翌平成10 (1998) 年には奥貫晴弘教授が停年を迎えて退官した。同教授の研究分野はドイツ近・現代文学で、特に小説、エッセイ等の散文形式に対する関心を軸にして、ホフマン (E.Th.A.Hoffmann)、カフカ (Kafka)、ムジール (Musil) 等を主な考察対象としていた。

平成11 (1999) 年、佐藤朋之助教授が上智大学に転任し、その後任として黒田廉助教授が着任、現在に至っている。佐藤朋之助教授はノヴァーリス研究をその出発点とし、1800年前後のドイツ文学界の動向を知識社会学的な立場から研究している。

現在 (平成11年) のスタッフは山本孝一、北村純一、別本明夫、宮内伸子、中村靖子、黒田廉の6名である。各教官の研究分野を簡単に列挙すると、山本教授はドイツ現代文学、特にヘッセ (Hesse) について、北村教授はピュルガー (Burger) 以降のクンスト・バラードの歴史的展開について、別本教授は詩的リアリズムの文学、特にシュティフター (Stifter)、シュトルム (Storm) について、宮内助教授は文学作品の意味論的、あるいは語用論的分析について、中村助教授はリルケ (Rilke) の詩作品に関して、黒田助教授はドイツ語の複合動詞について、特に分離・非分離前綴りの機能についての研究を主としている。

さて、ここで、以上の50年にわたる沿革史のほぼ前半分を占める24年間を文理学部に在籍した岡崎初雄教授についてやや詳しく触れておきたい。

岡崎初雄は戦前の京都大学に学び、成瀬清 (無極) 教授に指導を受け、その後、昭和33 (1958) 年に成瀬教授が逝去するまで公私にわたり師弟関係は変わることなく続いた。その主な研究分野はゲーテであった。昭和31 (1956) 年には文部省内地研究員として慶應義塾大学において相良峯教授の指導を受け、

「ゲーテ昨年の抒情詩」というテーマで研究している。その他にハウプトマン (Hauptmann)、トーマン・マン、ヘッセなども扱い、多数の論文を発表している。彼のゲーテ研究の成果は、その研究論文もさることながら、なによりもゲーテ協会富山支部の設立にあるといえよう。昭和38(1963)年に富山で日本文学会が開催されたのを機に、すでに大阪に昭和36(1961)年以来置かれていた阪神支部とならんで、地方都市では唯一、富山支部が岡崎初雄の尽力で設置されることとなった。もともと日本ゲーテ協会は昭和6(1931)年、成瀬無極、雪山曉村の発起で発足しゲーテの紹介と研究に寄与したが、第二次世界大戦のころは一時その活動を停止、戦後新たに再興されたもの、という。昭和38(1963)年当時、日本ゲーテ協会会長であった相良守峯は、富山支部は「岡崎君と私との友情が基になって設置されたものと思う^{注7}。」と述べている。折からの三八豪雪に富山大学もすっぽり閉ざされた昭和38(1963)年1月のある早朝、着任3年目の上野英雄助手は岡崎初雄教授からはじめて「日本ゲーテ協会の富山支部を作るといふ腹案」を聞かされた、設立当時を振り返ってのある文章で記している。それは「余りに唐突な話」だったが、「非常に具体的に、諭すように語られた」という^{注8}。設置に際しては、日本独文学会開催前日、10月18日、富山市公会堂にて支部設置記念「講演と演劇のつどい」が催された。演劇はゲーテの『ファウスト』第二部第一幕で、構成・演出は岡崎初雄、スタッフ、出演者はすべて富山大学独文専攻生およびその他の富山大学生であった。以後毎年、日本ゲーテ協会富山支部の催しは岡崎初雄亡き後も引き継がれ、現在もなお、大谷重彦支部長のもと、ドイツ語研究室の教官を中心に常に変わらぬやり方で現在に至るまで継続して開催されている。富山支部における主な活動は、毎年秋、ゲーテ研究のオーソリティを招いての講演と、ドイツ演劇上演、ドイツ映画上映、あるいは室内楽の演奏会などで、単に大学関係者のみならず広く一般市民を対象として行っている。

ところで、岡崎初雄教授の演劇への情熱はただ単にゲーテ協会のためのみならず、その研究教育活動全般と密接に結びついたものであったことを付け加えておきたい。ゲーテ協会富山支部発足以前から、

岡崎教授は富山大学文理学部演劇部の顧問となり、昭和28(1953)年5月30日富山大学開学記念祭の演劇として、ハウプトマン作・成瀬無極訳『寂しき人々』が電気ビルホールで上演された折、その解説・指導に当たった。翌年富山大学演劇部が創立されるに及んでその指導教官となり、独文専攻の学生を中心に文理学部学科の学生をも巻き込む形で、昭和29(1954)年7月7日、クライスト作『壊れ甕』が上演されたが、これは富山市公会堂のこけらおとしとして、また開学5周年記念富山大学文化祭の一つとして企画されたものであった。これ以降に行われた上演を列挙すると、昭和30(1955)年11月22日(富山市公会堂)、ハウプトマン作・岡崎初雄訳『ウィッテンベルクのハムレット』、昭和32(1957)年5月30日(富山市公会堂)、ヘッベル作『マリア・マグダレーナ』、昭和37(1962)年6月1日、ボルヒェルト(Borchert)作・岡崎初雄訳『戸口の外で』がある。当時、学生として『寂しき人々』、『壊れ甕』の演出を担当し出演、また『ウィッテンベルクのハムレット』にも出演し、後に岡崎初雄の後任として富山大学教授となった提山淑郎は、このような演劇活動について「まさに生きた独文学講読となって深い感動を覚えた^{注9}」と述べている。昭和38(1963)年以降はゲーテ協会富山支部の開催行事として上演されるようになり、昭和41(1966)年12月7日、ゲーテ作『エグモント』、昭和43(1968)年10月11日、岡崎初雄演出、ゲーテ作『ファウスト第一部』、昭和50(1975)年10月11日、成瀬無極訳で素演、ゲーテ作『イフィゲーニエ』が上演された。いずれも独文専攻の学生と劇団「ふだい」の協力を得ての上演であり、特に学生にとっては授業以上に忘れがたい経験であったであろう。このような中で独文の学生時代を送り、現在金沢大学教授の上田弘は「少人数ながらも、ドイツ文学研究室という一つの共同体のような雰囲気」があった^{注10}、と後に述べている。岡崎初雄はこのような活動を通じて大学におけるだけではなく、富山県内の演劇活動の戦後の一時期、その発展にも多大な貢献をしたといえよう。

ここで卒業生について述べる。卒業生の進路について一つの特徴を述べるとすれば、卒業後、他大学の大学院に進学し、そのまま大学の研究者として、ドイツ文学、ドイツ語学の専門家として現在なお活

躍中の者を、地方大学の小規模な独文専攻としてはかなり多く輩出したということであろう。旧文理学部発足時からの卒業生は、現在の富山大学同窓会会員名簿によれば、昭和28（1953）年の第1回卒業生以来、平成9（1997）年までで、225名であるが、そのうち、大学院に進学した後、大学の教員としてドイツ語学文学研究に携わった者は32名である。また小中高等学校等の教員になった者は16名である。一般企業等への就職者は91名、公務員関係が13名、その他73名である。これを 文理学部時代（昭和28年～55年、卒業者数100名）、人文学部語学文学科時代（昭和56年～平成8年、卒業者数118名）、人文学部言語文化学科時代（平成9年、卒業者数7名）の三つに分けてみると、大学教員になった者全32名中、 の時期に属する者が27名で、つまり全体の87%が文理学部時代の卒業生であり、残り5名が の時期である。これと相対的に、 の時期においては一般企業等への就職率が伸びていることになる。これは、大学生の資質の変化、ドイツ語教育に対する周囲の環境の変化とも大いに関連があるものと思われる。なお、現在のドイツ語スタッフのうちでは、山本孝一、別本明夫、教育学部の滝沢弘が文理学部の卒業生であり、数年前に退官した、吉田清、提山淑郎、また中川英世もまた本学の卒業生であった。

現在のドイツ言語文化コースにおいてはかつてのようなもっぱら文学、語学を中心とし、演劇活動等を基盤にするような雰囲気はなくなったが、ドイツ人スタッフ等を中心にして、幅広く文化、ひいてはヨーロッパ分化への眼を開かせるための授業、あるいはドイツ語によるコミュニケーション能力の育成に力を置き、近辺の大学と協力してのドイツ語強化合宿、ドイツ語弁論大会への参加、ドイツ語検定の積極的な受験などに励み、新しい伝統作りに邁進しているところである。

（注）

- 1 結城謙治「万象流転」、同学社『ラテル記念綜輯号（1）』1974年、62頁
- 2 独文コースの沿革を記した資料としては、故岡崎初雄文理学部教授著『木蓮の花咲く頃』、および『続木蓮の花咲く頃』がある。故岡崎初雄教授は旧制富山高校から新制富山大学に移行した1949年から24年間、1974年、停年を迎えるまで、

幾多の後進の指導にあたった。『木蓮の花咲く頃』は岡崎初雄の還暦記念として、論文、エッセイ、ドイツ語教室の歴史等をまとめて1967年に発行された文集であり、同じく『続木蓮の花咲く頃』は古希を迎えた1976年に発刊した続編である。岡崎初雄は続編刊行直後、1977年9月7日に没した。この命日には今なお岡崎初雄の後輩、教え子等数名が当時から変わらず枝を広げる木蓮の木陰の墓前に花を手向け、故人をしのぶの会を催していることを付け加えておきたい。1949年の富山大学発足以来、ドイツ語研究室の教官の陣容も幾世代かの交代を見、現在の人文学部のスタッフで最も年数を経ている者もせいぜい1977年の着任である。したがって、文理学部発足以来の歴史をじかに知る者もない中で以下に述べるドイツ語コースの、1977年以前の沿革は大部分、この二著のおかげをこうむっている。

3 結城謙治、同上、62頁

4 その後、1967年までに更に次の教官が非常勤講師として本学のドイツ語の専門教育、教養教育の両面にわたりその発展に寄与した。西義之、堀田俊夫、永崎徹、森田弘、沢井宗隆、藤代幸一、田中道夫、滝澤弘、雪山俊之、布谷昭美、稲垣大陸、中川英世

5 なお、ここでその他の教養部に在籍した教官は、飯盛米蔵教授（1972～1992年、停年退官）、小坂光一助教授（1971年～1976年、名古屋大学へ）、本田陽太郎助教授（1973～1982年、奈良医科大学へ）、丸山桂一助教授（1973年～1978年、金沢大学へ）、小林正幸助教授（1978年～1985年、中央大学へ）である。また、教養部に着任し、教養部廃止時まで在籍した教官は、瀧澤弘教授（1974年～）、山本孝一講師（1976年～）、別本明夫講師（1982年～）、成田節講師（1985年～）、宮内伸子講師（1991年～）である。いずれも文理学部、人文学部の専門教育に非常勤講師として関わった。

6 その後の、現在に至るまでのドイツ人教師の氏名を列挙すると、ローラント・シュミット（Roland Schmidt）、グレゴール・ヘーフリガー（Gregor Hafliger）、メヒティルト・マリア・クーゲルマイヤー・ヴァルター（Mechtild Maria Kugelmeier Walter）、ウルリーク・エンドレス（Ulrike Endres）、エーバーハルト・ライヒェル（Eberhard Reichel）、ゲオルク・ヨーゼフ・アンカー（Georg Josef Anker）、バルバラ・ロジーナ・ライヒル（Barbara Rosina Reichl）である。現在のドイツ人教師はザビーネ・エーディト・ローベ（Sabine Edhith Lobe）である。

7 相良守峯「岡崎部長追悼号に寄せて」、日本ゲーテ協会編『ペリヒテ』19号、朝日出版ザビーネ・社、1978年、5頁

8 上野英雄「富山支部設立の頃」、日本ゲーテ協会編『ペリヒテ』39号、東洋出版社、1998年、2頁

9 提山淑郎「思い出」、同学社、上掲書、69頁

10 上田弘「恩師還暦の寿によせて」、『木蓮の花咲く頃 岡崎初雄教授還暦記念文集』岡崎初雄教授還暦記念事業会編、1967年、111頁

ヨーロッパ言語文化講座・ドイツ言語文化コース
カリキュラムの現状

1. 教育目標

基本的なドイツ語運用能力を高め、ドイツ語学・文学を学ぶことを主眼とする。あわせて、ドイツ言語文化、現代のドイツについて理解し、ドイツ語圏のみならず、英、米、仏、露などの文化圏との交流にも資することのできる人材育成を目指す。

2. 授業の組み立ての骨格

組み立て方、および各授業科目開講コマ数、および開講形態

以下の表において、授業科目名の次の数字は1年間の開講コマ数、次のカッコ内は順に、開講時期、担当教員を示す。Gはドイツ人教師。すべての授業は一期完結を原則とする。

学生は学年別開講科目と共通開講科目の両方を各学年ごとに履修する。

必修(64単位)の内訳

演習14、講読16、ドイツ文化論4、ドイツ文学史6、ドイツ言語文化特殊講義6、ドイツ語会話6、独作文2、卒業研究10

各教員の担当状況

各教員の担当状況は下の表に見るとおりである。各教員は前期2コマ、後期2コマ担当を原則とする。これにドイツ語教科教育法(4年前期1コマ、3年後期1コマ)、さらに工学部からの依頼による、工学部専門課程向け工業ドイツ語2コマ、卒論指導が加わる。卒論指導については各教官週1コマの卒論指導の時間の他、さらに各教官が空き時間を利用して適宜行う。なお、全教官がこれに加えて教養教育のドイツ語を前期3コマ、後期3コマ担当していることを付言しておく。

コース横断的授業

現在、ヨーロッパ言語文化講座会議などで検討

中。

3. 各授業の位置付けおよび学生の受講形態の概略
専門基礎ドイツ語

教養教育としての初歩的なドイツ語から専門教育のドイツ語への橋渡しの役割を担う。

通常の教養の授業では不十分な点を補い(発音、文法知識、辞書の活用法など)、さらにドイツ紹介的な内容も加味して、将来必ずしもドイツ語を専門としない学生も興味を持てるような授業を行う。

ドイツ言語文化演習

次の講読とならんで、もっとも重要な授業科目である。扱う教材は文学作品や語学テキスト等々であるが、主としてドイツ語文法の確実な理解を基本としてのドイツ語運用能力育成訓練を目的とし、学生に練習問題や、レポートを課し、その解答例、報告例などを可能な限り教師からの一方通行にならない形で検討し、総合的なドイツ語力の向上をはかる。

ドイツ言語文化講読

上記の演習とならんで、もっとも重要な授業科目である。扱う教材は文学作品や語学テキスト、新聞、雑誌等々である。少しでも多くのドイツ語に接し、辞書を頼りに読むことに重点を置く。語学力は、どれほど多く読んだか正比例してついてくると言っても過言ではなく、実際的な会話能力なども含んでの総合的な語学運用能力は、優れたドイツ語を多読していなければ所詮は浅薄なものに過ぎぬ、という認識に基づく。訳読を基本とする。

演習、講読共、各学年ごとに開講されるものと、2年生から4年生までの全学生に向けて開講されるものとの2種類ある。学年ごとのものは、易しいものから難しいものへと、学年進行につれて無理のない教材を選ぶ。全学年向けのものに関しては、多少2年生には難解な場合もあるが、3、4年生が2年

学 年	学年別授業科目	学年共通授業科目
1 年	専門基礎ドイツ語。(後-A)	
2 年	演習4(前-E、F 後-E、F) 講読4(前-E、F 後-E、F) 会話4(初級)(前-G、G 後-G、G) 3、4年共通	講読2(前-A、後-B) 独作文1(後-G) ドイツ文化論1(後-A)、 ドイツ文学史2(前-C、後-C) 特殊講義2(前-B、後-B) 集中講義(特殊講義)1(後)
3 年	演習4(前-C、D 後-C、D) 講読2(前-D、後-D)	
4 年	演習1(前-B) 講読1(前-A) 卒業研究(全教員)	

生を啓発し得る機会にもなっている。4年生は、3年次までにはほとんどの必修単位数を確保できるため、4年次には出席しない学生がほとんどである。従って教官の判断により、4年次の演習、講読は卒業研究指導にあてることが多い。

以下の授業科目は、演習、講読という基盤の上の築かれて初めて効果を発揮するであろう科目である。つまり、演習、講読訓練で鍛えた力を、様々な応用的な分野でさらに一層伸ばすためにある。また、そうすることで新たに養成された力、あるいはドイツ言語文化に関する識見は翻って基礎力を確実なものにしていかんとする意欲をも生み出す。当コースのカリキュラムはそのような相乗効果を期待しての仕掛けである。(しかし現実には、笛ふけど踊らず、という嘆き節、も聞こえてくる)

ドイツ文化論

ドイツ文化の諸相を、個々の教官がそれぞれの研究テーマに応じて学生にわかりやすい形で伝える。毎年、後期に1コマ開設される。

ドイツ文学史

ドイツ文学史の流れを理解し、主な時代の文学思潮や歴史的背景、個々の代表的な作家と作品について多少の知識を与えることを目的とする。毎年、前・後期、1コマずつ開講しているが、2年前期から3年前期までの3期間で古代から現代までの流れについて一通り知りうるような形にしている。とはいえ、わずか3期でドイツ文学史を通観すること(過去においてそんな芸当をした大家はほとんど皆無であるにもかかわらず)は容易な業ではなく、教官に相当の工夫が要求されるかなりしんどい授業科目である。

ドイツ言語文化特殊講義

各教官がそれぞれの専門研究分野に応じて、語学、文学関連の入門的テーマを選択し、講読する。また、毎年後期に1コマ、学生がより広い視野でドイツ語を学べるようにすることを目的に学外講師に集中講義を依頼している。

ドイツ語会話(初級、中級)

ドイツ人教師による会話授業で、初級は2年生、中級は3・4年生を対象とする。

初級では、日常のコミュニケーションに必要な基礎単語の習得と文法練習を行う。

中級では、現実的なテーマ(環境問題や教育問題など)を選んで、学生のコミュニケーション能力の拡大と高度化をはかる。

ドイツ語作文

ドイツ人教師によるドイツ語作文、2年生は後期から、3・4年生と一緒に受講する。したがって前期は3・4年生のみが対象となる。

この授業では、簡単なテキストのドイツ語による要約や現実的なテーマに関しての自分の意見などをドイツ語で書くことの練習を行い、創造的なドイツ語作文能力を育成する。

卒業研究

卒業研究については4年生に対してできるだけ早い時期(4月下旬ころまで)に研究テーマを提出させ、テーマに関連するか、できるだけ近い分野を研究領域としている教官を、2名ずつ指導教官として配置する。卒論の書き方の細かいノウハウは、4年生対象の演習、あるいは講読などの授業時間、あるいは授業外の時間に適宜指導する。

最低2冊のドイツ語のテキストを読むことを前提とし、本文は日本語、引用文に関してはドイツ語の場合は必ず自分の日本語訳を添えること、さらにドイツ語によるレジюмеを添えることが条件である。

11月中旬から下旬にかけて、卒業論文中間発表会を行う。2・3年生の学生と教師が聞き役となり、質疑応答をする。これは、学生が論文の清書にかかる直前の時期で、論文の最終的な点検と詰めを行うきっかけとなる。

・問題点

1. ほとんどの単位がほぼ3年次で完結できるので、4年生になると、ほとんど授業に顔をださなくなる。しかしながら、3年次までに開講されている授業を終えたころに初めてドイツ語のなんたるかを漠然とながら感得する時期を迎えるので、本格的な力はこのあとの訓練でようやく身につけてくることを思えば、中途半端なままで終わる状態はなんとも残念である。また、特に演習、講読の単位数は1コマ2単位であることから、実質的な力をつけるにはまだまだ時間数が不十分であると言わざるを得ない。そこでドイツ語コースでは、2年生には、教養ドイツ語のBを必ず2コマは履修するよう指導して不足

を補っているところである。

学生には必要単位をただ終えるだけで事足りりとするのではなく、そのあとも少しでも多く授業にできるように説得するか、あるいはそのようなモチベーションが生まれるような工夫、あるいはカリキュラムの工夫、をしなくてはならない。

2. 4年次においては就職活動に専念するあまり、卒業研究がおろそかになる傾向がある。7月近くまで就職活動に費やし、そのあとようやく卒論にとりかかる、という事例も多く、畢竟、成果にも今ひとつ、の観が否めない。

3. 近年、ドイツ語のみではないだろうが、文学離れの傾向が著しく、「ドイツ文学にはなんの興味もないが、ドイツには興味があって、…」という程度のモチベーションしかない学生が増えた。もちろん文学のみが目標ではなく、ドイツとそれを取り巻くヨーロッパのあらゆる文化事象に対する興味は良しとしなくてはならないが、あくまでも言語学習を通じてそれがなされる以上、言語芸術としての小説、詩、あるのみならず、当然の基礎的知識に欠ける学生が多い。このような学生にどのように対処していくかが大きな問題である。しかし、逆に教師の側も、文学的なもの以外にも教育素材を求める努力をしなくてはならない、ということであろう。学生は本来の自学、自習を全くしなくなった、というわけでもないだろうが、それが我々の要求する分野とかなりずれたところで行われているということは言えそうである。このあたり、今後大いに検討を要することではある。

4. その他(カリキュラム以外の講義、補講、合宿など)

北陸地域ドイツ語強化合宿

毎年、富山大学、金沢大学、北陸大学のドイツ語を学ぶ学生が参加して、石川、富山両県内を隔年で会場とし(国立青年の家などを利用)、2泊3日でドイツ語強化合宿を行っている。各大学からのドイツ人教師、ドイツ語教官、学生など多数が一体となって、テーマ別授業、討論、ドイツ語ゲーム学習、パーティーなど、でドイツ語漬けの数時間を過ごす。本学からは、2年、3年生全員が参加する。実施時期は大体7月初旬の土、日である。専門課程に入って間もない2年生にとっては、濃厚なドイツ語

の場に侵るこの体験がその後の学習に効果的な刺激を与えているようである。

ドイツ語弁論大会

毎年北陸大学が近隣の大学に参加を呼びかけて行っているドイツ語による弁論大会に、2、3年生全員参加している。12月初旬に行われることが多いので、後期の授業開始早々にドイツ人教師の指導のもと、授業の空き時間などを利用して学生は練習に励む。平成9年は残念ながら、開催大学の都合により中断したが、今後とも継続される予定である。本学の学生は平成8年、一位に入賞した学生もあり、例年好成績をおさめている。

6 フランス言語文化コース

はじめに

およそ大学における学部の改革や改組というものは、現状を踏まえ、将来を見据えた深い熟慮と、そこで働くことになるスタッフに対する十分な配慮の上になされてしかるべきであることは、改めて断るまでもないはずである。

ところが、人文学部におけるフランス言語文化コース誕生に関する限り、ことはまさに正反対であったと言わざるをえない。コースの誕生は何の計画もなく突如まにあわせたに提案され、そして人員は事前の相談もなく、本人の意思と無関係にそれまで比較文学の担当であった村井がその任にあたることになったからである。人文学部五十年史が歴史的事実を記述するものである限り以上の点ははっきりさせておきたい。

しかし、人文学部改組に伴うコースの発足後は、幸いにも、こうした事情と無関係に活発で意欲的な学生を毎年定員もしくはそれ以上迎えることができ、スタッフと協力しあってコースの運営を軌道に乗せることができた。現時点では第7期生から9期生までの20名ほどが在籍している。

当初から「フランス言語文化」ということを、1. 現代において実際に使われているフランスおよびフランス語圏の言語、2. そのフランス語による言語文化(広い意味での文学)、3. フランス語圏の文化という3つの分野にひろがるものととらえ、それ

それに触れ学ぶ機会を可能なかぎり沢山提供しようと言う方針をたてた。この点で一番苦労させられたのは、富山県のみならず、一般に太平洋側と比較して日本海側には居住するフランス人が極度に限定されており、「なまの」フランス人やフランス語に接する機会が余りにも少ないということであった。1. それでも(1)の方針を実際に実行に移すべく、およそ考えられるあらゆる手をうって、「なまの」フランス人ないしフランス語圏の人材をさがしてくる、2. ラジオやテレビのフランス語のニュースや映画などに接してもらう、3. フランス語検定試験を半ば強制的に受験させる、4. 短期長期をとわずフランス留学(それが無理なら見学、遊学、それも無理なら見物でもよい)をすすめるようにしようと考えた。

しかし、1. は予想したよりはるかに困難で、きれいなフランス語を話すフランス語圏の人材探しには莫大な時間と労苦を費やすことになった。それでもようやくごくわずか(一時期はあらゆる努力と時間を投入してもなお適当な人材が身近にみつからず、やむなく毎週定期的な授業を断念し、集中講義をするしかなかったこともある)みつかった人たちは、幸運にも親切で熱心であった。パリ育ちのスマツジャさん、地中海クラブで働いていてホスピタリティあふれるフォルタンさん、カナダで演劇活動もしていた教養あふれるカレさん、金沢在住の典型的な現代フランス都会派人間のサヴォワさん。素朴でまじめなカナダ人ゲーさん。こちらの勝手な要求にもかかわらず、皆さん、学生と接触するのは楽しいとあって、熱心に会話の相手をし、作文を直してくださった。とくにフォルタンさんは、学生がフランス旅行を計画した際、ご親切にもご自宅に宿泊するように申し出てくださり、おかげで第1期生は楽しい滞在の思い出とともに、おいしいお土産をかかえて帰国することができたのだった。

とはいえ、コースの学習においては、専任の日本人担当者が1人だけでは、到底じゅうぶんな教育の機会も教育の効果もあげられるものではなく、苦闘の日々が続いたが、同じ苦しみをなめたロシア言語文化の矢沢先生のご好意で一足早く平成9年に中島先生を専任教官としてお迎えすることができた。才気煥発、才色兼備。大人の女性の魅力と実力を発揮

し、フランスの魅力を語りだすととまらず、学生に強い刺激をあたえ、意欲をかきたてた。さらに発足当初から大谷(富山国際大学)、近藤(金沢大学)両先生に非常勤講師をお願いし、専任教官では手薄な分野を補っていただいている。

こうしてようやく片肺飛行の不安定は脱出したものの、しかし専任スタッフが3人、それに外国人教師が1人という体制こそ本来有るべき姿であると言う点は改めてここに指摘しておく必要がある。

教育内容と目標

在学中に語学の面では中等レベルのフランス語を身につけることを目標(誤解のないようにあえて付け加えておくと、ここでいう中等とは日常の意思疎通に全く支障がなく、高校程度の文章読解、理解能力を備え、ある程度自分の考えや意見を言語化する相当高い能力をさすもので、これはいわゆる「中級フランス語」より数段上である)にし、フランスで出版されている外国人向けフランス語教育テキストを使用、これと日本的語学教育のテキストを併用するというやりかたにしている。そしてその成果をある程度客観的にはかるためにフランス語検定を受験を半ば強制的に推奨している。在学中の2級取得を目標としており、これまで実際に数名がクリアしたほか、さらに準一級の獲得者を1名だしている。検定を主宰する団体からも近年における富山県の受験者数の増加と成績の向上は注目されており、これは本コースの努力の成果と自負している。

留学に関してはフランス、スイスの各大学、その他教育機関から送られてくる案内書類、日本の幹旋会社のパンフレットを学生の目に触れるところにおき、時に応じて(また経済的事情と本人の熱意を勘案しつつ)長期短期の留学の意義を説明し、具体的なアドバイスも提供している。これまでも夏春の短期留学に毎年2、3名が、1年以上の長期留学には合計4名ほどが赴いている(最長は2年)。行き先はパリ、リヨン、ヴィシー、グルノーブル、シャンベリーと広範囲にわたり、たまにトラブルを経験するものもあるが、全体としては有意義に過ごし、また各国の留学生やそのフランクでかけひきなしの言動に接し、多いに刺激を受け、ものの見方を広げてくる者も多い。こうした学生の土産話を聞くのはスタ

ップにとっても楽しくかつ有益でもあり(送りだすにあたっては、土産は話だけで十分と常に言い聞かせていることをお断りしておこう)、また在学生の刺激剤ともなっている。ともすると掛け声だけの「国際化」が声高に叫ばれ、頭でっかちの独善的な解釈が幅をきかすなか、こうした小さいけれども具体的に外にでかけ、その国の言葉でその人々と接した経験こそ、内容のある本物の『国際化』にささやかながら寄与することになるのではないかと考えている。

言語文化の側面では従来からの文学的なテキストを正しく読み理解する能力の養成ばかりでなく、あるいは歴史の新しい研究方法やその成果を導入し、あるいは犀利なテキスト・クリティックを援用し、さらにはまた比較文化、比較文学の研究成果もとりいれ、広義の文化テキストの多角的批判的な理解、批判、検討の能力を養成することを目標としており、そのために講読、演習、文学史を用意している。

その他の文化的側面では、歴史的、現代的双方の面からフランス語圏の多様な文化問題を可能な講読や特殊講義において限り扱うようにしているが、ここでは思想哲学や、美術芸術の歴史的理論的な補強がさらに必要であると痛感させられている。

卒業生とその後の進路

制度としての本コースの卒業資格取得が、専門をいかした職業へと直結するわけではないことは改めて断るまでもないだろう。語学的にはさらに高度で徹底した訓練を積まないことには仕事の入り口にもたどりつけないことは、他のコースの場合と同様である。

第1期から第6期まで30名ほどの卒業生をだしてきたが、大学院に進学した者1名以外は、留学等やや長めにコースに「滞在」したものも含め、順調に社会に巣立っていったが、そのほとんどはフランス語やフランス文化との関係が薄いといわざるをえない。

しかし卒業後数年して改めてフランス語に取り組みもうとする卒業生がでてきていることも述べておかななくてはならない。人生の選択はむしろ大学卒業後から始まるともいいうるのではないだろうか。

20代を各人の人生の広い基盤と展望の形成期とと

らえるなら、およそ日本や日本的センスとはかけ離れた文化との接触を通して、世界の広さの一端と具体的に触れ、そこで頭を悩ませ、考え、意見をぶつけてみる経験を重ねた本コースの卒業生は、これからの生き方を模索する上ではかけがえのない経験を持っているといえるのではないだろうか。会社名や職種名だけではうかがいしれないところで、本コースに在学し、また学んだことが一人一人の将来に益するところがあらんことを祈念してやまない。

7 ロシア言語文化コース

コース発足のころ

ロシア言語文化コースの前身であるロシア語・ロシア文学コースは、昭和52(1977)年に人文学部が創設されるとともに誕生した。旧文理理学部の改組に伴う人文学部創設の概算要求書には、「殊に、日本海を隔てて隣接する諸国との関連交渉が日海にその緊急度を増しつつある本県の立地条件から見て、これら諸国との産業面、文化面の交流に資する人材の養成が急務とされている。この要望に応える内容を備えた人文学部の創設は、まさに今日的課題であるといわなければならない」と記されている。このように、ロシア語・ロシア文学コースは朝鮮語・朝鮮文学コースなどとともに、来るべき環日本海時代に備えて新設されたのである。当時はロシア語やロシア文学の専攻コースがある大学は外語大系を除けばきわめてまれで、地方大学における本コースの新設は世間の注目を集めた。

人文学部第1期生が専門課程に進む翌53年度に、コース担当教授として藤井一行が金沢大学から、助教授として矢沢英一が着任した。藤井の研究分野は19~20世紀のロシア社会・思想史であり、矢沢の研究分野は19世紀のロシア文学である。

発足時の本コースの主要授業科目は以下の通りである(カッコ内は必修単位)。

- ロシア文法(2)ロシア語作文(2)ロシア語会話(4)ロシア語学特殊講義(6)ロシア語学演習(2)
- ロシア文学講読(8)ロシア文学史(6)ロシア文学特殊講義(6)ロシア文学演習(2)ロシア事情(2)ロシア語史 卒業論文(10)
- (会話、演習、講読の諸科目は30時間の授業で1

単位、その他の科目は2単位)

語学文学部に所属する本コースの学生は、卒業に必要な専門科目78単位のうち、上記の主要授業科目50単位のほかに、学科共通の必修科目として「言語学概論」2単位「文学概論」2単位、関連科目として他の語学文学コースの「文学講読」2単位「文学史」4単位を修得することが義務づけられていた。これは、専門的知識や技能を深めるとともに、人文科学の幅広い教養を身につけることが必要である、という新人文部部の教育理念に基づくものであった。この理念は現在も失われていないが、具体的な履修方法は上記のように規則で義務づけるといった形から、次第に学生の自由意思に委ねるような形に変わっていく。

さて、本コースの学生は2年次後期から上記の専門科目を履修するのだが、当時はその前提となる教養課程のロシア語の教育環境が整っていなかった。学生が2年次前期まで在籍する教養部にはロシア語専任教官はおらず、ロシア語も自由選択科目として2単位しか開講されていなかったのである。したがって、学生のほとんどは専攻コースに進んでからロシア語の初級文法を学ぶという状態だった。

また、専攻コースの授業にしても、非常勤講師による授業は、地域にロシア語の専門家がいなかったために、すべて(会話さえ)集中講義という形をとらざるをえなかった。それでも地域でロシア語・ロシア文学を専門に学べる大学はめずらしいとあって、本コースへの希望者は毎年一定数を下らず、教員・学生ともに少人数の、厳しいながらも一面家庭的ともいえる親密な人間関係の中で、コース発展のために努力した。藤井と矢沢はやがて教養部のロシア語の授業(昭和58年度から4単位)も担当し、学部の教育に連動させた。上に掲げたコース発足時の授業科目や単位も、こうした実情に合わせて漸次修正していった。一方、学生たちはラジオやテレビのロシア語講座や短波放送を聴いたり、富山港に停泊中のロシア船に出向いて生きたロシア語にふれたりすることで、授業の不足を補った。

第1期生が巣立つ昭和56(1981)年3月にコース誌『CAMOBAP』が創刊された。発刊の言葉に「ロシアの家庭ではサモワールが楽しい団らんの雰囲気醸し出す演出家となっているように、我が露文が

機関誌『サモワール』を媒介として心を通いあわせ発展することを願って名付けた」とある。卒論ノート、短編の翻訳、随想、詩などを掲載し、コースの知的団らんの場としての役割を担いながら、『CAMOBAP』はほぼ毎年度末に発行されるようになる。恒例の学部球技大会には学生、教官が一丸となって参加し、スキー合宿、夏山登山、卓球大会などスポーツを通しての親睦もコースの伝統となった。

研究と教育、多彩な非常勤講師

コース発足当時、ロシア語の図書は大学附属図書館と旧日本海経済研究所に多少所蔵されているに過ぎなかった。しかし、その後学部内の協力もあり、ロシア語・ロシア文学関係の基本図書を計画的に収集することができた。各種辞典、百科事典、『トルストイ90巻全集』『文化遺産』をはじめ、刊行中のドストエフスキイ、トゥルゲーネフ、チェーホフ、ゴーリキイなどの全集を購入、ほぼ10年間で語学関係の基本図書、主なロシア作家の全集、著作集などを揃えることができた。新聞雑誌類は『文学新聞』『外国のロシア語』『ノーヴィ・ミール』『ロシア文学』『文学の諸問題』『ズナーミャ』『演劇』『現代演劇』などを購入した。

すでに述べたように、藤井はロシア社会・思想史を研究分野とし、19世紀ロシアの文化思想とロシア・マルクス主義について研究を行ってきた。すなわち、ベリンスキイ、チェルヌイシェフスキイ、ドブロリューボフ、ピーサレフなど体制変革を志向した思想家たちについて、彼らが体制変革という課題とのかかわりで文化(主に文学や知的活動)のあり方をどのように位置づけていたかを歴史的に追求した。また、スターリン体制成立以前のロシアのマルクス主義者たち、とりわけレーニン、トロツキイ、ルナチャルスキイ、ヴォロンスキイなど初期ソヴィエト政権を担ったマルクス主義者たちについて、その社会主義的自由の理念と展望を探った。さらにソヴィエトにおけるペレストロイカから国家崩壊にいたる激動の時期には、つねにその動向に注目し、その運動の担い手であるゴルバチョフやエリツィンの発言を、上記マルクス主義者たちの理念と比較、対照することによって検証した。

矢沢の研究分野は19世紀ロシア文学であり、その

中でもチャーホフを主な研究対象としているが、これまでの研究の軌跡を大別すれば 1. チャーホフ作品研究：チャーホフの作品世界を、言葉、文体、構造、モチーフなど主として創作方法の分析を手がかりにして捉える。2. 日本におけるチャーホフの受容。3. ロシアにおけるチャーホフ劇：チャーホフ劇演出の規範として名高いネミロヴィチ＝ダンチェンコの『三人姉妹』演出をはじめ、トフストノーゴフ、エーフロス、リュビーモフらのチャーホフ劇演出の理念と方法を探る。4. ロシア演劇史の研究：とくに18世紀末から19世紀はじめにかけて広まった農奴劇場に関する研究。5. チャーホフ関係の文献その他の翻訳。

藤井と矢沢の主な研究成果については『富山大学人文学部の現状』（1994）および『富山大学研究者総覧』（1999）に掲載されているので、参照されたい。

教育面においては、藤井と矢沢は各々の研究分野を中心に据えながらも、可能なかぎり語学・文学の広い範囲にわたってコースの授業を担当したが、さらに多彩な内容を提供するために、第一線で活躍している各地の研究者たちに出講を委嘱した。以下にこれまで出講を委嘱した学外講師の氏名と講義題目（出講複数回の場合は主な題目）を示す。

- 1978年度 原卓也「ロシア文学史」中村喜和「ロシア古代・中世文学」今井義夫「19世紀ロシア思想史」
- 1979 中条直樹「ロシア語史概説」高山旭「19世紀ロシア文学」宮沢俊一「ロシア演劇文化の歴史」
- 1980 江川卓「20世紀ロシア文学」金子幸彦「18世紀ロシア文学（カラムジーンを中心に）」中条直樹「現代ロシア語の統辞論」森本良男「ソ連の政治、経済体制と国民生活」林甲之助「初歩ロシア語作文」
- 1981 藤沼貴「19世紀ロシア文学（トルストイを中心に）」上島武「ソヴィエト事情」中条直樹
- 1982 小平武「20世紀初期詩文学」中条直樹 林甲之助 今井義夫
- 1983 佐藤清郎「19世紀ロシア文学」沓掛良彦「プーシキンと西欧文学」中条直樹

- 1984 大塚明「ロシア文学と音楽」森本良男「10月革命後の政治、経済、文化」中条直樹 中村喜和
- 1985 佐々木照央「余計者 知識人と弱者」岩浅武久「現代ソヴィエト文学」中条直樹 左近毅
- 1986 中条直樹 佐々木照央
- 1987 中村健之介「ドストエフスキイ」中条直樹 森本良男
- 1988 水野忠夫「ロシア世紀末の文化」外川継男「近代ロシアの文化と社会」中条直樹
- 1989 中条直樹 岩浅武久
- 1990 藤沼貴「18世紀ロシア文学概説」中条直樹
- 1991 坂本博「19世紀ロシア社会思想史」中条直樹
- 1992 左近毅「日露文化交渉史」中条直樹 坂本博
- 1993 中村健之介「ドストエフスキイとロシア文化」中条直樹 中村喜和
- 1994 中条直樹 坂本博 藤沼貴
- 1995 V.カザケーヴィチ「現代ロシアの文化と文学」中条直樹 坂本博
- 1996 宮沢俊一「ロシア現代演劇・映画」中条直樹 坂本博
- 1997 中条直樹 坂本博 水野忠夫
- ロシア人講師（会話・作文）
- 今井イリーナ（1981 - 84）M・マグルドゥーモワ（85 - 89）A・シゴルツォフ（89 - 91）A・イエファーノフ（作文、91）A・グアドチェンコフ（92）ペ・チュン・ジャ（作文、92）・コチェトコーワ（93 - 95）O.ボンダレンコ（95）O.トカチェンコ（96）
- こうして振り返って見ると、今更ながら講師陣の多彩さに驚かされる。そして、言語・文学・芸術・思想などロシア文化の各分野を代表するこれら講師の方々の協力なしにコースの専門教育が不可能であったことを痛感するのである。とりわけコース発足の翌年から現在まで20年間出講を委嘱している中条直樹名古屋大学教授には、語学関係が手薄の本コースはどれほど恩恵をこうむっていることか。会話の授業については、ほぼ10年間東京在住のロシア人に年4回の集中講義をお願いしたが、平成4（1992）

年からは近隣に人を得、通年講義に切り替えることができた。平成3(1991)～4(1992)年には本学に研修中のロシア人研究者に作文の授業を委嘱した。

状況の変化

昭和60(1985)年、教養部のロシア語はそれまでの自由選択科目(4単位)から必修選択科目(8単位)に「昇格」した。ソヴィエトでペレストロイカが進むこのころから、それまで常時10名前後であった教養部のロシア語履修者は急に増え始め、ソヴィエトが崩壊する平成3(1991)年には70名を超過するほどになり、2クラス編成となった。もっとも、この激増傾向は数年で激減傾向に転じてしまったが。

昭和61(1986)年に富山大学大学院人文科学研究科(修士課程)が設置され、「ロシア語・ロシア文学」が西洋文化専攻の1研究分野となる。

平成5(1993)年、教養部廃止に伴う大幅な学部改組で、本コースは「ロシア言語文化コース」(ヨーロッパ言語文化講座)に名称を変更、藤井は新設された国際文化学科に「日ロ文化関係論ゼミナール」の担当者として移籍した。

平成8(1996)年、本学部とイルクーツク外国語教育大学(現言語総合大学)英語学部との間で学術交流協定が結ばれ、毎年相互に学生を派遣するようになった。これは、後述するように、本コースと同学部日本語学科との数年にわたる学生交流の実績が基盤になっている。この協定による派遣留学生は留学期間が在学期間に含まれ、留学先で履修した授業科目の単位が一定程度本学の単位に換算されるため、一般学生と同様4年間で卒業できるようになった。

同年10月、長年の念願であったロシア語の「外国人教師」の定員がつき、N.ロゴズナヤが着任した。ロゴズナヤはイルクーツク大学国際学部で長年外国人留学生を対象とするロシア語の教育・研究に従事してきた。その主な研究成果は『富山大学研究者総覧』(1999)に掲載されている。

平成9(1997)年、大学院人文科学研究科の改組により、研究分野「ロシア語・ロシア文学」は「ロシア言語文化」(地域文化研究専攻)に名称を変更した。

平成10(1998)年、ヨーロッパ言語文化講座の停年退官教授(ドイツ言語文化担当)の後任として、

武田昭文(ロシア言語文化担当)が着任した。この人事により、本コースでは5年ぶりに複数教官による指導体制が復活できた。武田の研究分野は20世紀ロシア文学であるが、具体的には 1. フレーブニコフ研究: フレーブニコフの作品を通して、現代の「芸術の思想」を考える。2. ロシア・アヴァンギャルド研究: ロシア文化における理性と狂気の芸術止場の問題をフレーブニコフとマレーヴィチの超意味芸術論からあとづける。3. ロシア現代文学論: 20世紀のロシア文学を、物語論、比喩論、ドラマトゥルギー論等の視点から論じる。以上の研究の成果は『富山大学研究者総覧』(1999)に掲載されている。

その他コースにかかわる特記事項

平成9(1997)年9月に日本ロシア文学会第47回総会・研究会が本学で開催され、コース教官、院生、学生、卒業生が事務局裏方として協力した。

平成9(1997)年から毎年コース主催の「富山ロシア語コンクール」を実施している。コースの学生のほか県内のロシア語学校の生徒など、毎年十数名の参加がある。優勝者は、ローゴズナヤの前任校であるイルクーツク大学の夏期ロシア語研修会に派遣される。

卒業論文、日露学生交流、卒業生の進路

学生は専門的知識と技能を身に付け、最後にその成果を「卒業論文」(学部改組以後は「卒業研究」)の形でまとめていく。コース発足から現在(平成11年4月)までのコース卒業生は104名であるが、提出された論文をテーマ別に分類すれば以下のようになる。

語学	8	
文学	49	チェーホフ(7)、ドストエフスキイ(6)、トルストイ(5)、プーシキン、ゴーゴリ、トゥルゲーネフ(以上4)、パステルナーク(3)、ブルガーコフ、マヤコフスキイ(以上2)、レールモントフ、ゴルチャロフ、チュッチェフ、アンドレーエフ、プーニン、エセーニン、アフマートワ、ツヴェターエワ、ソルジェニーツィン、アレイヒム
児童文学	2	ノーソフ、チュコフスキイ

- 比較文学 4 ゴーゴリと芥川龍之介、葉山嘉樹とゴ
リキイ、宮本百合子におけるソヴィエ
ト、フィリーナとカレワラ
- 芸術 7 ヴィソーツキイ、ムソルグスキイ、ヴ
ルーベリ、プリセツカヤ、ロシア・ア
ヴァンギャルド芸術、映画台本、イル
クーツクの美術館、
- 思想 7 チェルヌイシェフスキイ(2)、チャダー
エフ、トロツキイ、デカプリスト運動、
シベリアにおけるデカプリスト、ロシ
ア・アナーキズム
- 社会 9 個人と集団、女性の権利、家族、離婚、
教育、農奴、ロシアにおけるオウム、
乾杯のスピーチ、コサック
- 日口関係 9 北方領土(2)、シベリア抑留、「時規
物語」、日口学生交流、宣教師ニコラ
イと日口戦争、北陸地域の対露貿易、
対日観と対露観、大黒屋光太夫

翻訳研究 9

文学関係が最も多く、そのほとんどは作品論である。しかし、平成4(1992)年度卒業生あたりから論文のテーマは文学中心から、ロシアの社会や文化、日口関係などへ広がっていく。上記の芸術(7)社会(9)日口関係(9)の大部分は平成4年度以後のものである。この傾向は日本の若者の「文学離れ」の風潮と重なるものであったが、同時に、学生の主たる関心がペレストロイカからソヴィエト崩壊へと激動するロシアの社会それ自体へ、さらに日口関係のあり方などへ向けられていったことを示している。また、このころ増え始めたロシア(主にイクルーツク)への留学者の多くがロシアでの体験に根差したテーマを撰んでいることも付記しておこう。平成5年度の学部改組に伴うコース名変更(ロシア語・ロシア文学 ロシア言語文化)の背景には、このような状況があった。

ところで、本コースとイルクーツクの大学との学生交流は、平成2(1990)年にシベリアへの学術調査に参加した藤井がイルクーツク経済大学で日本語を学ぶ学生たちに出会ったことが機縁で始まった。最初は富山大学を中心に、金沢大学、名古屋大学の学生とイルクーツク経済大学の学生が相互に訪問し合うという形で行われた。外貨を持たないロシア人

学生の滞在費用は、主に日本人学生の拠出金とコース卒業生からのカンパでまかなわれた。やがて交流相手は日本語学科が新設されたイルクーツク外国語教育大学英語学部の学生となっていく。こうした交流が続く中で、コースの学生が経済大学や外国語教育大学へ私費留学したり、向こうの学生が国費留学生や私費留学として本学で学ぶようになった。このような実績の上に平成8(1996)年3月、本学部とイルクーツク外国語教育大学英語学部との間に学術交流協定が結ばれ、双互の学生派遣が制度的に保証されたのである。参考までに、本コースのロシアへの留学生(半年以上)は、平成2(1990)年に最初にウラジオストークの極東大学に留学した学生から数えて合計21名になる。平均して毎年2名強が留学していることになる。

すでに述べたように、現在までの本コースの卒業生は合計104名であり、大学院修了者は6名である。学部卒業生の進路は多岐にわたっているが、ロシア語関係では貿易会社5名、出版関係2名、外務省1名、大学院9名(うち6名は本学、3名は他大学)などがあり、ほかに教師7名(小学校1、中学校2、高校4)、塾教師3名、新聞社2名、他は一般企業である。大学院修了者は大学の非常勤講師(ロシア語)2名、出版社、博物館各1名などである。

平成3(1991)年の『CAMOBAP』10周年記念号には多くの卒業生から近況報告が寄せられた。5(1993)年11月には第1回露文コース同窓会が開催され、卒業生20名、在校生20、教官2名が高志会館に集い、旧交を温め、新睦を深めた。また、10(1998)年3月には藤井一行教授の停年退官を記念して卒業生約30名がワシントンホテルに参集し、コース発足以来の長年にわたる藤井教授の労苦をねぎらった。

コースの現状

現在(平成11年4月)、ロシア言語文化コースには2年生5名、3年生6名、4年生5名が、そして大学院には2名が学んでいる。うち3年生1名が交流協定によりイルクーツク言語総合大学に留学中、2名が10月から留学の予定である。イルクーツク言語総合大学からは東洋語学部(英語学部より独立)の学生3名が聴講生(国費留学生2、短期留学生1)として、同学部助手1名が国費研究生として学んで

いる。

本コースの学生の大部分は、1年次に教養科目の「ロシア語A」を4単位(週2コマ)、専門科目の「基礎専門ロシア語」を2単位(同1コマ)履修してきている。コース所属後、2年次前期から以下のコース主要授業科目(かっこ内は必修単位)を履修することになるが、2年次では教養科目の「ロシア語B」4単位も履修するよう指導している。

ロシア言語文化講読(6) ロシア言語文化演習(6)
 ロシア語会話(4) ロシア言語文化特殊講義
 ロシア文化論 卒業研究(10)

(ロシア語会話のみ30時間の授業で1単位、その他の科目はすべて2単位)

コースの学生は、卒業に必要な専門科目84単位のうち、上記の主要授業科目を、必修26単位を含めて56単位を修得することが義務づけられている。

教官スタッフは矢沢英一(教授)と武田昭文(助教授)の2名に外国人教師ロゴーズナヤ・ニーナも加わって、それぞれ自己の研究分野を中心に据えながら上記の科目と教養科目のロシア語の授業を担当している。また、国際文化論コースのロシア文化担当教官とも授業や卒業研究指導などの面で協力関係を密にし、学生の多様な関心に応えるよう努力している。これによって、双方の学生はロシアの言語、文学、歴史、文化、国際関係など多様な内容の授業を履修し、卒業研究テーマを選べるようになっていいる。さらに、卒業生も多数参加する恒例の夏期のテニス合宿など、コースの垣根を超えた親睦もはかられている。

このように、コースの教育環境は往時に比べて大幅に改善された。とくに外国人教師が配置されたこ

との意味は大きい。留学の道も制度的に保証されている。ロシアからの留学生(聴講生、研究生、大学院生)も人文学部で常時10名程度学んでおり、ロシア語の運用能力を高める条件は十分整っている。ロシア言語文化関係の図書も年々拡充されている。一方で、専門科目(教養科目についてもいえることだが)の履修に関する制約の度合は、その是非はともかく、学部創設時に比較して著しく軽減されている。学部や学科共通の必修科目は一切ないし、演習や講読の単位当たりの授業時間数も半減している。このような状況の中で、学生がいかに主体的に専門的知識や技能を深め、人文科学の幅広い教養を身につけていくか。それは学生自身の課題であり、それを促す教官側の課題でもある。

ロシア言語文化コース カリキュラムの現状

1. 教育目標

- (1) ロシア語に習熟し、ロシア文学をはじめとして、歴史、社会、思想等、広くロシアの言語文化を学ぶ。
- (2) ロシア語圏と十分な文化交流を果たすことができる人材を育成する。
- (3) 英、米、独、仏、その他の言語文化にも眼を向け、国際的な視野を広める。

2. 授業の組み立て

骨格

- 1年次 ロシア語A、専門基礎ロシア語
- 2年次 ロシア語B、演習、講読、文化論、特殊講義、会話
- 3~4年次 演習、講読、文化論、特殊講義、会話、卒業研究

主 要 授 業 科 目			関 連 授 業 科 目	
授 業 科 目 名	単 位 数		授 業 科 目 名	単 位 数
	必 修	選 択		選 択
ロシア言語文化演習	6	6	特に指定せず、左欄以外のすべての人文学部専門科目	
ロシア言語文化講読	6	6		
ロシア文化論		4		
ロシア言語文化特殊講義		14		
ロシア語会話	4	2		
*専門基礎ロシア語		2		
卒業研究	10			
計	26	34		

必修の内訳

卒業に必要な専門科目の単位数は84単位である。その内訳は、

主要授業科目の必修26単位

主要授業科目の選択34単位

中30単位以上

関連授業科目(=上記以外の
人文学部専門科目)

併せて58単位

コース横断的授業

学生がロシアの歴史と文化について幅広く学べるように、国際文化論コースのロシア文化担当教員と授業や卒業研究指導などの面で協力し合い、相互の授業が受講しやすいよう時間割編成に配慮している。

3. 各授業の位置づけ... ()内は順に開講形態、担当者(A - C)

基礎ロシア語(半期、A or B) コースでの2年次以降の学習に円滑に移行できるよう基礎的な語学力を養成することを目的とする。文法の授業が中心となるが、言葉を言葉らしく学習させるために、ロシアの子供向け絵本を教材に取り入れている。

ロシア言語文化演習(通年、A / B) 19~20世紀のロシア文学についての講義と学生の発表とからなり、教室での議論を土台にレポート・論文の書き方を指導する。学生がなるべく早くから良い文学作品に出会えるよう、2~4年生と一緒に受講する私たちの授業にしている。

ロシア言語文化講読(通年、A / B) 2~3年生対象と3~4年生対象の授業を設け、それぞれの語学力に応じて、児童文学から、ロシアの新聞雑誌の記事、そしてロシア文学の名作まで、多様なテキストを精読する。

ロシア文化論(半期および通年、A or B / C) 日本人教員とロシア人教員がそれぞれ開講する。日本人教員は半期ずつ隔年で担当し、19世紀と20世紀のロシア文学史を講義する。ロシア人教員は通年でロシアのフォークロア・英雄叙事詩・昔話の詩学を講義する。

ロシア言語文化特殊講義(通年および集中(夏・冬)、C / 非常勤講師2名) ロシア人教員による通年の講義では、19~20世紀のロシアの詩と小説を

ロシア固有の文化的コンテクストを解説しながら読む。非常勤講師による集中講義は、ロシアの言語・民俗・社会・文学・芸術などをテーマとした多彩な内容の講義を、日本におけるロシア文化研究の第一線で活躍している研究者を招いて開講している。

ロシア語会話(初級・中級・上級)(通年、C) 2~4年生を対象として、ロシア語の発音とイントネーションからはじめて、旅行会話の型を学び、卒業時までには様々なテーマについてロシア語で自分の意見を述べるができるようにする。

卒業研究(通年、A / B) 大半の学生は4年次のはじめに卒業研究のテーマを決定する。夏休みまでに個別指導をとおして問題を絞り、夏休み明けに中間報告会を開き、秋以降の段階的作業をへて完成し、面接試験後に最終発表会を行うというのが例年のペースである。中間報告会と最終発表会はコースの学生全員を集めて行っており、2~3年生の大きな刺激になっている。今後の課題としては、夏休み前に研究の動機の部分を学生が自己確認する意味での発表会をもう一つ設けるようにすることである。

4. その他

- ・学生に対して、本人文学部が学術協定を結んでいるイルクーツク言語大学への留学を積極的に勧めている。学生の半数以上が、夏季集中、半年、1年のいずれかの期間の留学経験者である。またロシアからの留学生も毎年2、3名あり、講読の授業は日口の学生と一緒に受講している。

- ・講読で取り上げた文学作品を日本語訳して、コース機関紙「サモワール」に発表している。

- ・ロシア人教員のイニシアチブで、ロシア映画の上映会を催し、また「ロシア詩クラブ」を作っている。

- ・コースの親睦を図るために夏季テニス合宿を行っており、卒業生も毎年多数参加している。

- ・演習の授業には、他コースからも1年次にロシア語を学んだ学生が若干名受講にきている。

- ・本コースでは3年次にロシアに1年間留学する学生が多いためか、3年次までに単位を取得し終えたという理由で4年次に授業に出席しなくなる学生の割合が少ないように感じられる。